

一八世紀、太平洋におけるロシヤ人の航海

稲垣敏夫

目次

まえがき（訳者）

第一章 「アジアはアメリカと地続きか」の問いに対する答を求めて

一 科学的偉業の源

二 第一次シベリヤ・太平洋学術探検

三 シェスタコーフおよびバヴルーツキーの学術探検

四 グヴォズデフおよびフォードロフの、最初のヨーロッパ人としての北西アメリカ沿岸の探検

第二章 北西アメリカの発見と日本への航路の開発

一 第二次シベリヤ・太平洋学術探検の準備

二 北方諸隊の活動の概要

三 日本沿岸へ

四 ペーリングおよびチリコフによるアメリカ北西部およびアリューシャン列島の探検

五 第二次シベリヤ・太平洋学術探検の意義

第三章 ペーリングおよびチリコフ後のアメリカおよび日本への航海

一 企業家のコマンドールおよびアリューシャン諸島への航海

一八世紀、太平洋におけるロシヤ人の航海

一八世紀、太平洋におけるロシヤ人の航海

一八〇

二 クレニーツィンおよびレヴァーシェフの探検

三 地理学および天文学探検

四 カムチャツカおよびアラスカへの航路開拓

五 日本への最初の代表派遣

六 シェリホフと北西アメリカの開発

あとがき

附録 1 度量衡換算表

2 日露関係年表（一七三九—一八七五年）

まえがき

ここに紹介する資料は、ヴェ・ア・ディヴィン（В. А. Дивин）の著書「一八世紀、太平洋におけるロシヤ人の航海（Русские мореплаватели на Тихом океане в XVIII веке）」（モスクワ、一九七一年、「ムイスリ」出版）を要訳したものである。

そもそも、ロシヤ国家はキーエフ王朝に始まり、ノヴゴロド、ウラジミール、モスクワと東方に新天地を開拓して公国ができ、モスクワ公国が最も勢力を得て、東スラヴ民族を統合して帝政ロシヤを形成した。

古来、東スラヴ民族の海洋への進出は、その民族が膚で感じた本能とでもいうべきもので、遠くノヴゴロド公国の時代に、白海やムルマンスキーの海へ進出した歴史を持っている。

蒙古のロシヤ支配が終り、封建諸公がモスクワ公国に統一されるようになってから、ロシヤの海洋進出は漸く活発化し、イワン雷帝の一五五〇年代には、カザン、アストラハン汗国を併合し、クリミヤ汗国およびトルコのサルタンを押えてヴォルガ川、カスピ海に進出し、近東と関係を持つに至った。一六世紀後半にはリヴォーニヤを攻め、フィン湾の大部を押えてバルチック海への進出を成し遂げた。

一七世紀はロシヤにとって、海洋進出の苦しい時代で、トルコおよびクリミヤタールに南部国境を攻められ、スウエーデン諸公やポーランドにバルチック沿岸の大部を占領され、そこへの進出を断たれた。一七世紀後半に至り、ドンおよびザポロジエのコサックが南方進出に大いに活躍した。彼らは勇敢で、すばらしい航海術を身につけていた。

元来コサツクは特別の種族ではない。一五〇一七世紀にツァー政府の農奴制の下での、苛斂誅求から逃れてザボロジエ、ドン、ドネープリ、シベリヤ等の辺境で、中央政府の影響を離れ、自由に行動した者たちの呼び名である。彼らは農耕牧畜に従事し、安全のため兵を養ない、大きな勢力となり、後には、逆にロシア国家の辺境の護りとして重要な役割を果たすに至ったのである。

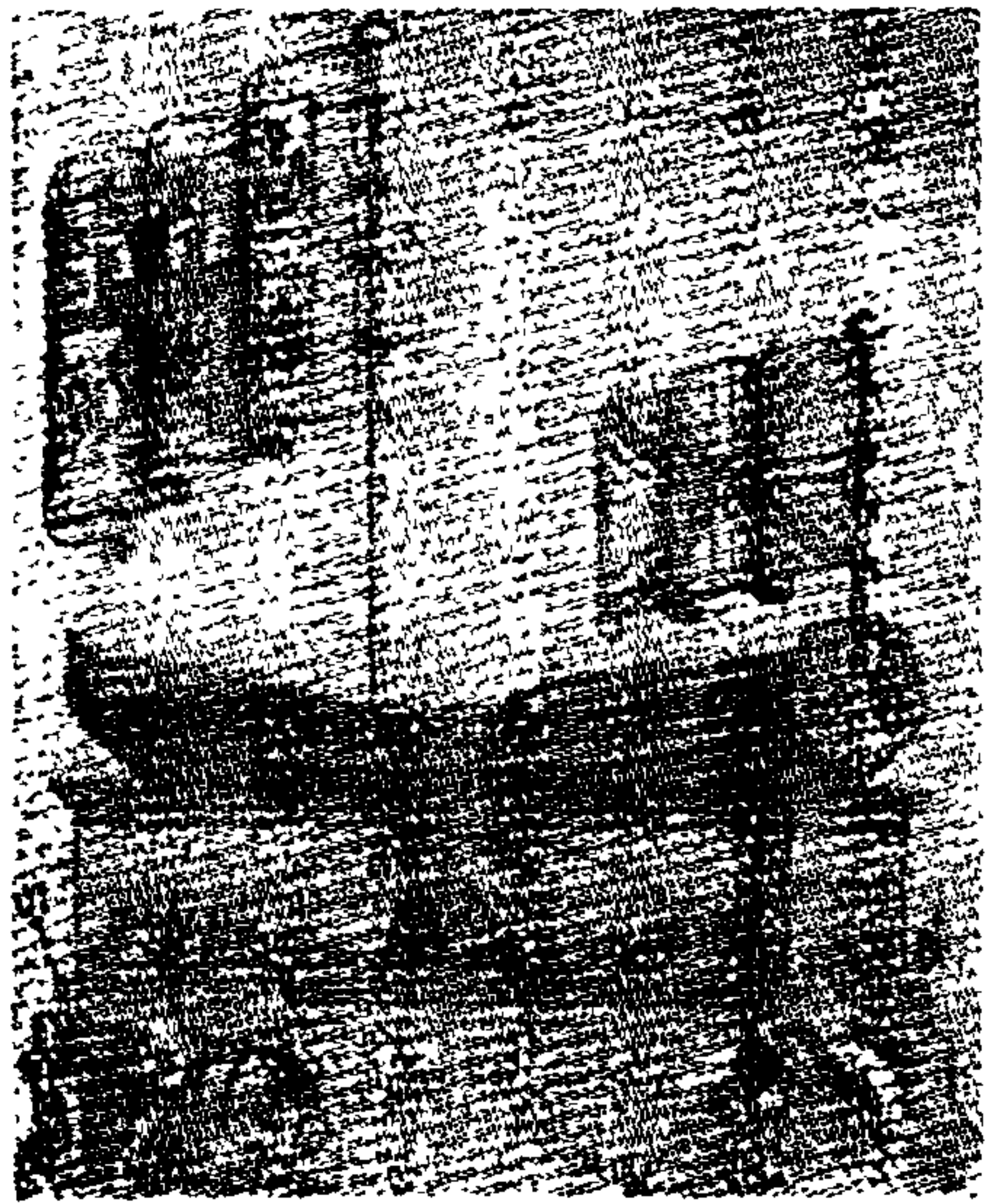
このコサツクの勇敢さと進取の氣象が、シベリヤのロシアへの帰属と、その開発に大きく貢献した。それはまず、伝説的なエルマツク（一五八四年没、コサツクの頭目、出生経歴は判っきりしない）のシベリヤ探検で急速に進んだ。

シベリヤ、極東の植民地化にはコサツクのほか、商人の役割も見逃すことはできない。彼らは自費で探検隊を編成し、毛皮、金、銀を求めて、無限の宝庫を東進した。当時、毛皮は西欧諸国で需要が高く、ロシア政府の大きな収入源であった。

こうして彼らは東へ進み、町や村を建設し、要塞を築き、原住民に貢租を課し、その植民地化が進められていった。一七世紀の主なシベリヤ探検は、一六四八年のデジニョフのアジア最北東端（チュクチ半島）の探検、一六四三年から四六年のポヤルコフのアムール川およびオホーツク海の探検、一六四九年から五三年にかけてのハバロフのアムール探検、一六九七年のアトラソフのカムチャツカ（探検隊員一二〇名）などがある。

り、一七世紀末までに、ロシアは東西シベリヤは勿論、アムール、沿海州地域を除き、北部極東はカムチャツカに至るまでを、その掌中に収めることに成功した。

かくして、本資料で紹介する一八世紀の探検に入るわけであるが、一八世紀の探検の特徴は、それまで、個人の野心と利益追求の探検から、政府の計画の下に行われる組織的な探検へと移行したことである。ピョートル一世の治世になり、ロシアの海洋進出政策はとみに積極性を帯び、一八世紀前半では、南進、西進のほか、ベーリング海峡、北氷洋、アリューシャン、千島の探検が行われ、世紀半ばにはベーリング海峡、北氷洋、千島、アリューシャン、アラスカの探検のほか、日本への航海も試みられ、世紀の後半においては、これら全域を更に精査するという経過を辿るが、特にアリューシャンの植民化の進展と日本政府への最初の正式使節団の派遣は注目すべきことである。しかし、北氷洋の探検はさすがに厳しく、当時の造船技術と航海術をもってしては、欧露から北東端のチュクチ半島を回ってカムチャツカに至る通しの航海は成就しなかった。特に東部北氷洋が厚い流氷に覆われていて、多大の犠牲を払っている。また、一八世紀においては、樺太探検には何ら見るべきものはない。それは、当時、ロシアの関心が専らアラスカおよびアリューシャンに向けられていたことと、アムール流域が清国



ピョートル一世の船

に押えられていたことで説明されよう。また、ロシア単独による世界一周航海も実現していな。僅かに、東インド商会の船に便乗しての航海が一回記録さ

れているに過ぎない。

こうして一九世紀以降の探検へとバトンがタッチされていくのであるが、一八世紀は、イギリスの産業革命、フランス革命等があつて、西欧諸国が漸く近代国家へと脱皮しつつあり、各国が競って実施した海洋探検により、世界の植民地分布図の骨格がほぼでき上った時代である。その意味で、ロシアの一八世紀の探検は、その後のより科学的な、そり華々しい探検よりも意義が大きかったともいえる。

この資料は、いわば一八世紀のロシアの探検史のダイジェスト版とも云うべきもので、大小にかかわらず総ての事実を網羅し、当時の膨大な記録および手記を縦横に駆使しているが、無

駄を省き、要領よく纏められている点が高く評価される。

一九世紀の探検は、その重点が世界一周航海、北部太平洋のほか、アムール、沿海州、樺太地区にも向けられ、その後五〇年間にわたるアムール流域への浸透の結果、一八五八年五月の愛琿条約の締結により、アルグン河からオホーツク海に至るアムール左岸はロシア領に、沿海州は露支共同所有となり、続く一八六〇年の北京条約により、沿海州がロシア領となる経過を辿り、今日のアジア大陸東部におけるソ連領土の完成を見るのである。

千島および樺太については承知の通り、一八五四年（安政元年）一二月下田の日露和親条約において択捉、ウルップ島間を国境とし、樺太を両国雑居地と定め、一八六七年（慶応三年）二月の樺太仮規則六カ条（雑居条約）に調印となり、更に、一八七五年（明治八年）五月の千島・樺太交換条約調印、一九〇五年（明治三八年）九月の日露講和条約調印の結果、日本の南樺太領有、そして遂に、第二次世界大戦の結果、日ソの間における今日の領土関係が、現実の問題として存在するのである。本資料は、今日の北方問題に明確な答えを出しているものと思われる。世界史の中の数奇な運命の一コマである。

訳者

第一章 「アジアはアメリカと地続きか」の問いに対する答を求めて

一 科学的偉業の源

一六八八年五月のある日、ピョートル一世がモスクワ近郊のイズマイロヴォ村に一本櫓の小さな船を発見し、これを修理してヤウザ川に浮べたのが、若きツァーが海への関心を持った始めとされている。この船は一七二三年、ツァーの命によりペテルブルグに移され永久に保存されることになった。これを機会にロシヤのバルチック海への進出が始まり、スウェーデンを破って、それを成し遂げたのである。

一八世紀始めの経済改革により、国の経済状態は好転したが、特に製鉄業は根本的変革を遂げた。それまでスウェーデン等から購入していた兵器はウラルおよびシベリヤの鉄で製作されるようになり、軍隊は著しく増強された。海洋へ進出するというロシヤの基本政策の遂行が、それによって著しく楽になった。貿易が盛んになり、リガ、レヴェリ、ナルヴァ、ヴィボルグ、コラ、アルハンゲリスク、就中ペテルブルグはツァーの希望通り、最とも活気を帯びたロシヤの中心貿易都市となった。内外の取引が増大するに伴ない、一七世紀に始まる造船技術も急速に発展し、ヴォログダ、アルハンゲリスク、トボリスク、オホーツクなど、多数の造船センターが極東にまで広がった。それまで外国人の技術者に依存していた精練および造船技術はロシヤ人の手に移っていった。当時の駐ペテルブルグ英大使ジ

ニフリスは、ロシヤに送り込んでいる造船技術者を早急に引揚げなければ悔を千載に残す、と警告し、建言している（タルレ―Tallier―一九四九年、八六頁）。

北方戦争終末の一七二四年にはロシヤの海軍は大小一六三隻の艦船を持つに至った。一七〇一年一月一四日付ピョートル一世の告示により、数学・航海学校が開設され、ロシヤにおける海軍兵学校の第一歩を踏み出したのである。こうして逐次高度な技術を持つに至ったロシヤ海軍は、海戦でその実力を実証したのみならず、数多くの探検に参加し、歴史の頁を次々に変えていった。バルチック海、カスピ海への進出、工商の発展、科学の進歩は、シベリヤおよび極東の開発を目的とする太平洋への大規模な探検隊の編成を可能にした。

コロンブスがアメリカ大陸を発見してから長い間、学者の論争の種になったのは、アメリカがアジアと陸続きであるか、または海峡によって隔てられているか、ということであった。

一八世紀半ばまでの大部分の地図には、チュクチ（アジア大陸の北東端……訳者注）の北東には、大きな島ともつかぬ、またアメリカ大陸の一部ともつかぬものが記載されていた。一六四八年にコサック、セミヨン・デジニョフ（Семён Дежнёв）がアジアをアメリカから分離する海峡を発見したことより、こ

の論争に終止符を打ったかに見えたが、西欧はそれを知らず、ロシアは彼を忘れていた。原住民の情報として、ウラジーミル・アトラースフ(Уладимир Атрасов)は、一七〇一年二月、「チュクチ半島の対岸に『島』があつて、冬期海が凍結すると、独自の言葉を持つ人々が黒貂くろぎつを持ってやってくる」と報じているが、それが長い間、不確実ながらもアメリカに関する最初の情報として、一般に認められるようになったのである。しかし、ロシア人はアトラースフ以前に東チュクチ人と交渉を持っていたことは明らかで、更にその東チュクチ人はロシア人が現われる以前からアラスカ原住民と交渉があったことは疑いない。従つてロシア人探検家が、チュクチ半島の対岸の住民について、東チュクチ人から知ったということは簡単に想像できる。

一六五一〜一六五七年、エム・スタードゥヒン(M. Стрый-КНИ)を長とする探検隊は、アナドゥイル要塞からペンジナ川(カムチャッカ半島北西岸……訳者注)に向つたとき、現地人から事情を聞き、シベリヤは東方が海に洗われていると判断した。デエジニョフおよびスタードゥヒンの探検によつて、アメリカの北西部はチュクチ半島からあまり遠くない位置にあると判断されるようになった。この頃がちょうど、ロシア人の間で、バイカルから新天地(アメリカ北西部)に達する山脈があると

想像され、それが地図に載つた時代であつたのである。これによつて、そこに海峡があるかどうか俄かに人々の関心の的になった。

ゴットフリード・ヴィリゲリム・レイブニッツ(Готфрид Вилхельм Лейбниц)はこのロシア人の探検を評価して、「すべての小さな進歩も、大目的達成の一つの前進である」と述べ、また一七一六年、ピョートル一世がフランスを訪問したときに、パリの科学アカデミーが、「ロシア人のみがこの偉業をなし得る」と皇帝をおだてている。

アジアとアメリカが続いているか、分離しているかはロシア政府にとっては重要なことで、欧露から北氷洋を通じて太平洋にで、更に日本、インドに行けるか、ということなのであつた。一八世紀の最初の四半期には、その解明のためいろいろの試みがなされた。

千島に関する最初の情報は一七世紀半ばの一六四九年のこと、フェドット・ポポフ(Федот Попов)がカムチャッカ半島の南端を通過つて列島を確認したとしてゐる。一六五六年ミハイル・スタードゥヒンが千島列島に沿つて航行し、また、一六九六年、ルカ・モロズコ(Лукá Морозко)がカムチャッカに滞在して列島の存在を知つた。更に、一六九七年にアトラースフは、千島列島第一島(北から)の対岸に島らしいものを認め

た、と記録にある。

アトラソフの「物語」には日本に関する面白い部分がある。それは、彼がイチエ川の流域のカムチャツカ原住民のところでデンベイという日本人に会った。一七〇一年モスクワに移されたデンベイは、シベリヤ局で日本について述べ、その国家機構、経済状態、金および銀鉱、風俗習慣、宗教などに触れている。「物語」は彼の口述を書綴ったもので、彼自身の署名がある。この資料は断片的ではあるが「日出づる国」に関する最初の文献であった。ピョートル一世は、彼を国費で養うこと、ギリシャ正教を強制しないこと、彼がロシア語を学び、更に三、四人の子供に日本語を教育すること、その暁には帰国を許すこと、などを指示した。デンベイは数年ロシア語を学び、一七一〇年キリスト教に改宗し、ガヴリール（Гавриил）というロシア名をもらった。デンベイは当時政府が企図した日本との貿易に必要な通訳要員の養成に当たったのである。

一七〇六年カムチャツカ管領ワシーリー・コレソフ（Василий Колесов）はカムチャツカ原住民から貢租（ロシア政府がシベリヤ原住民に課した毛皮等の現物納入税……訳者注）を取立てる目的でミハイル・ナセードキン（Михаил Наседкин）を長とする五〇人を派遣したとき、カムチャツカ半島南端のロパトカ岬で、前方海上に島（Шумшу—Шумшу）を見たが船の用意

なく、断念した。

一七一〇年ヤクーツクの地方長官トラウルニヒト（Траур-Михил）はナセードキンの情報をきき、千島の探検およびその原住民にロシア皇帝へ忠誠を誓わせるため、船の建造を命じた。

一七一一年コサツクの一隊が反乱して、上官三人を殺害した。彼らは、この三人が部下に対して酷であり、横領その他の悪事を働らき、そのうえ、皇帝の命令である日本および新天地の探検を拒んだ、としている。反乱の発起人の一人に、コサツク一等大尉イワン・コズイレフスキー（Иван Козыревский）がいた（彼は一七一七年髪をおとし修道院に入った）。ア・ヤ・アンツィフェーロフ（А. Я. Анциферов）およびイ・ペ・コズイレフスキーの継続的千島探検はアトラソフのカムチャツカ探検にも匹敵するものである。

一七一一年八月一日アンツィフェーロフおよびコズイレフスキーを長とする探検隊はボリシエツツク要塞（カムチャツカ半島南端に近い西海岸にある……訳者注）を出発してロパトカ岬に向い、シムシュ島に滞在して、九月一八日無事帰還し、管領ワシーリー・セヴァスチャーノフに島の見取図を渡した。月末にはピョートル一世に報告書を送り、その中で、自分たちの探検行と、松前、日本への航海計画を述べた。

翌年には、日本への航路、彼らの武器の有無、住民のロシア

人に対する感情、交易の意志の有無についての調査が命ぜられた。

一七一二年探検の準備が始められ、コズイレフスキーが再び長に予定された。一七一三年四月一三日五五人の隊員、一人のカムチャツカ原住民、一七一〇年にカムチャツカ沿岸で遭難した日本人サン(Cam)を乗せて出発した。

コズイレフスキーに与えられた任務は、新しい島嶼および陸地の発見、カムチャツカ南端からさきの日本国のすべての民族、およびそれを支配する勢力の調査、場合によってはそれらをロシア皇帝に忠誠を誓わしめ、貢租を取立てることの可能性を探ることにあつた。

彼らは海獣の皮で作った船で千島の北部三島、シムシユ、パラムシール(Парамышир)、オネコタン(Онекотан)に向つた。千島の原住民は日本の主な都市の名、列島の二三の島名を教えた。そのほか、マトマイ(松前)、ニフォン(日本)等の名もあつた。その先は装備の不備、食料の不足などにより、航行を断念した。

一七一三年のコズイレフスキーの探検によってパラムシールを一つ加えることができ、地理学的、人種誌学的貴重な資料を収集することができた。彼の報告書には航海日誌、見取地図があり、それには松前島、箱館、蝦夷まで含まれていた(當時は

混同してはつきりした区別がなかったと思われる……訳者注)。

彼の報告書は従来のものより完全で、信用できるものである。彼は原住民の言を広く利用している。しかし総じて、若干自己の功績を誇張したきらいがある。

一七二六年、彼が作成したカムチャツカ半島南部および島嶼の見取図によれば、フェドット・ポポフはウラジミール・アトラソフより半世紀前にカムチャツカを発見し、ロシア人はベリリングより八〇年も前に、アジアとアメリカを隔てる海峡を通過したことになっている。

コズイレフスキーの千島および日本に関する情報は広く学者の注目するところとなり、一七三七年にゲ・エフ・ミルレル(L. Ф. Миллер)が出版した「カムチャツカの地理と現状」には、コズイレフスキーの手記をそのまま載せている。この資料がその後の探検家たちの航海に極めて重要な役割を果たしたのである。彼の資料には千島原住民アイヌ、その他の民族の生活について詳しい記述があるほか、日本には、当時二大政権があり、そのほか多くの独立した公国があつたとしている。大きな湾の河口にエドというところあり、それが一般にいうニフォン国である。国の支配者は物心両面に亘る権力を持つが、日本にはこの支配者のほかにツァーがいて、神の出身であるといわれ、お通りのときは平伏して、見ることも、名を呼ぶことも許

されない。そのツアーの名を「クボサマテンカリ」という。第二の大きな国家はウザック（Узаккикоо нок.）といい、支配者を「クボノカミテンカリ」と呼ぶ。この国は支那および他の国々と広く貿易をしている。偉大なる支配者（ツアーでない―訳者注）にニフォン国およびウザック国の支配者が従属しているとみられ、南部をウザック国が、東部および北部をニフォン国が支配していた、としている。比較的新らしい都市である松前へは普通罪人が送られていた。松前には社会の墮落した要素が少なからずあり、それが町の生活に反映し、住民は武器を持ち歩くのが常であった、と書いている。

当時西洋の学者は北部太平洋に関する確実な情報を持っていなかった。それは、一六四三年に樺太南岸に來たオランダの探検家エム・ゲ・フリズの間違った情報によっていたからである。彼は樺太南岸を北海道の北部と受取り、それに東から接している土地をアメリカとしている。これは多分北海道の続きであったと思われるが、実際は千島列島で、北海道北部と思ったのがエトロフ島であり、アメリカと思ったのがウルップ島であり、北海道の続きはクナシリ島であったのである。日本近海で発見したというアメリカは実に数千マイル東にあったのである。それから五年後、ポルトガルの天文学者テイシェイラが地

図を発表したが、それによれば、千島列島の位置に無秩序に散在する島を配し、その東にガマ（Гамма）という全く存在しない土地を描いている。こうした認識がヨーロッパの学者の間にあり、それが一八世紀の半ばまで続いたのである。

その後、コズイレフスキーの資料に基づき、多くの探検が行われ、相当の効果を収めた。コズイレフスキー自身は、自分の成果に満足できず、新しい計画を立て、ヤクーツク地方長官事務所のヴェ・ベーリング（В. Вепринг）へ（一七二六年）、トボリスク事務所へ（一七二七年）、宗教院へ（一七二九年）、遂には元老院へ（一七三二年）日本への探検隊派遣を要請した。

一七二四年九月、コズイレフスキーは修道院を抜け出てヤクーツク地方長官事務所に現われ、日本探検の詳細な計画を示して熱願した。ヤクーツク地方長官事務所は決定を下しかね、トボリスクからの指示を待つ間、彼を拘束し、監視をつけた。フエオファン管長は、コズイレフスキーが修道僧の名を汚した、として彼の修道院帰還を要求した。一方、トボリスクにおいては、彼の日本探検に関する計画書を、探検準備のためオホーツクに来ていたベーリングに渡した。一七二六年、コズイレフスキーはヤクーツクに來たベーリングに会い、自分の計画を話し、採用を願ったが、ベーリングは彼の話はきいたが、計画は採用しなかった。ベーリングはヤクーツクの事務所へ手紙を書

き、コズイレフスキーの計画は、自分に与えられた任務であるアジアとアメリカの間の海峡の有無を明かにすることと一致しない、と述べている。コズイレフスキーは、アメリカ発見の可能性ありとして、ベーリングに同行を頼んだがいれられず、自分で探検隊を編成しようと決心した。しかし、その意図は実現せず、一七二六年五月一七日スパスキ修道院への帰還命令を受けた。トボリスクへ逃げたが逮捕された。

しかし、このとき、トボリスクにアフアナシー・シエスタコフが太平洋探検の準備に來ていることを知ったコズイレフスキーは、どうしても諦められず、彼に自分の計画を話した。それはデジニョフの辿った行程、即ち、後にベーリング海峡と名づけられた海峡を北から通り、カムチャツカ半島に沿って南下する、というものであった。トボリスクの地方長官事務所は、シエスタコフの探検隊にコズイレフスキーが加わることに反対はしなかった。コズイレフスキーは一七二九年、軍艦エヴェルスで、二十八人の乗組員とヤクーツクを出航し、北氷洋に向けてレナ川を下ったが、シクテヤフから先の航行は危険となり、五月には氷に船を破壊された。彼は企図半ばで、一九三〇年モスクワに帰った。

アトラーソフ、ロシア人の手に落ちた日本人、コズイレフス

キーなどから得たカムチャツカおよびその周辺の島嶼に関する情報はピョートル一世の興味をひき、皇帝は大規模な太平洋探検を国家的事業として実施することを命じた。それは、アメリカ大陸、日本、千島、その他の探検で、その住民の実態調査および帰順工作、貿易等あらゆる任務が含まれていた。

一七一六年、「大カムチャツカ特別任務班と称する探検隊」が派遣され、その長はヤクーツク地方長官ヤ・ア・エルチン(D. A. Елчин)であった。トボリスク県知事は彼に、カムチャツカ一帯の陸地および河川の調査、その周辺の海の探検を命じた。しかし、これは満足すべき結果をもたらさなかった。

更に太平洋探検隊を編成すべく、イ・エム・エヴレイノフ(M. M. Евреинов)、エフ・エフ・ルージン(Ф. Ф. Лужин)の二人の測地学者が派遣された。探検隊は一七一九年一月ペテルブルグを出発し、翌年夏オホーツクに到着した。隊は一七二〇年九月カムチャツカのイチャ河口(半島の中部西海岸…訳者注)に到着し、越冬した。一七二二年早春、南下してボリシエレッツクに着き、五月二二日六名を選抜して千島の探検に向わせたが時化に遭い、六月二一日やっとの思いでカムチャツカに帰り、数日後オホーツクに辿り着いた。

一七二二年エヴレイノフは、ペルシャ遠征に出向いていたピョートル一世をカザンに訪ね、第一回政府探検隊の資料を提

出した。皇帝は非常に満足で、数時間を過した。

エヴレイノフおよびルージンの業績は、アジア、アメリカ両大陸間の海峡の有無という大課題を解明せず、単なる部分的活動に終始したにもかかわらず、皇帝から高い評価を受けことは、果して何であるかという疑問が起る。一部の学者には、南へではなく、北へ進出すべきだという意見もあったが、ピョートル一世の考えは北へとは限定されていなかった。当時アジア、千島列島、日本、アメリカの間には、相互に陸路があるという意見があったし、ピョートル一世の関心も、当然、千島と日本に向いていたといえる。

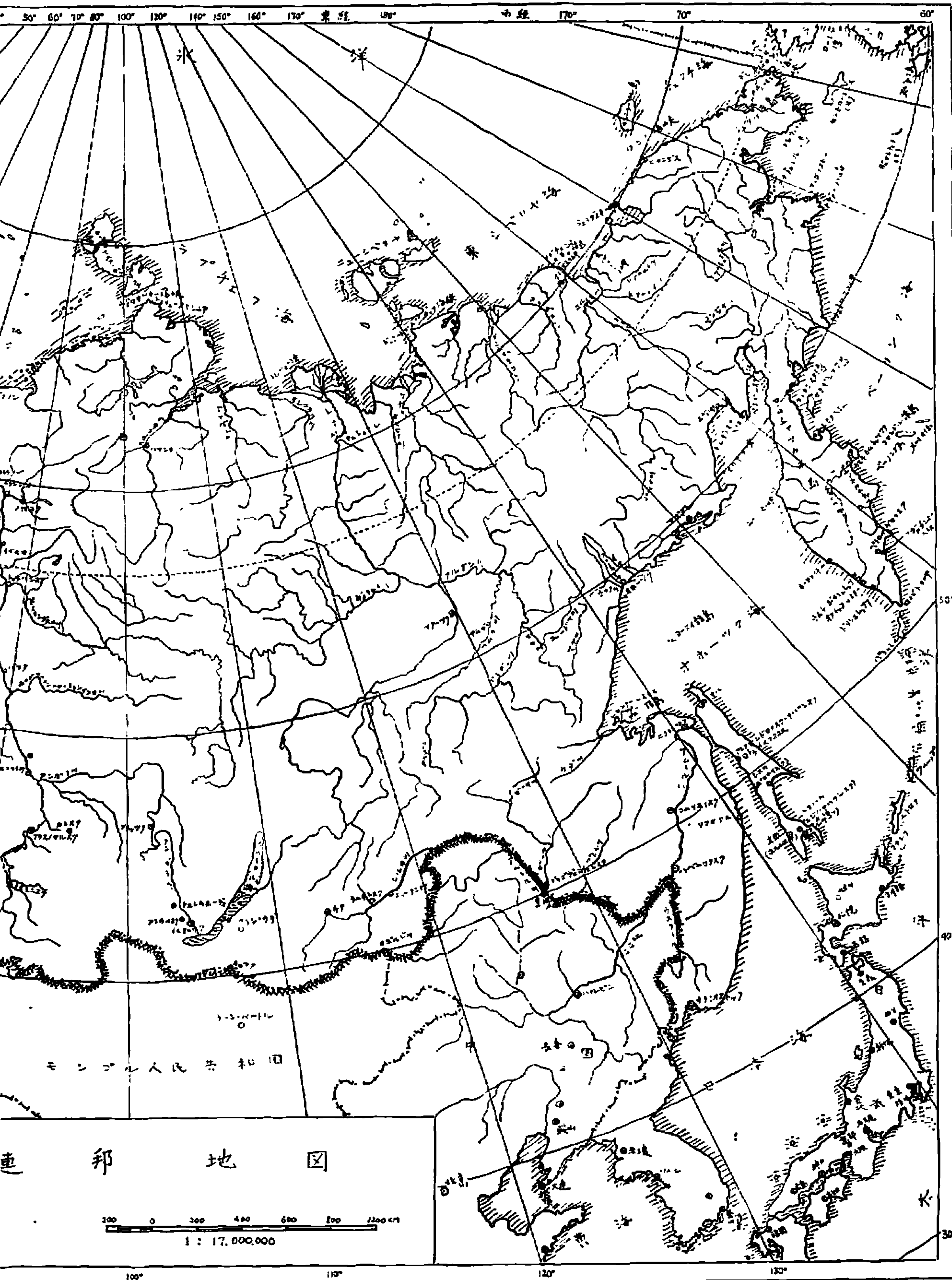
その意味で、エヴレイノフの作成した地図は、トボリスクから東、太平洋沿岸も含むもので、当時としては精度が高く、特にカムチャツカ半島、千島列島が南西に向いている点が注目される。またオビ、イルトゥイシ、エニセイ、レナはその支流をも含めて正しく記入されている。更に、千島列島の島相互間の関係位置も正しい。地図には経緯度が用いられてあり、二人はロシヤで始めて四分儀を使用して地図を作成した。間違いはあるが、立派なものである。彼らは、自らの観測として、千島列島に一四の島を記入している。

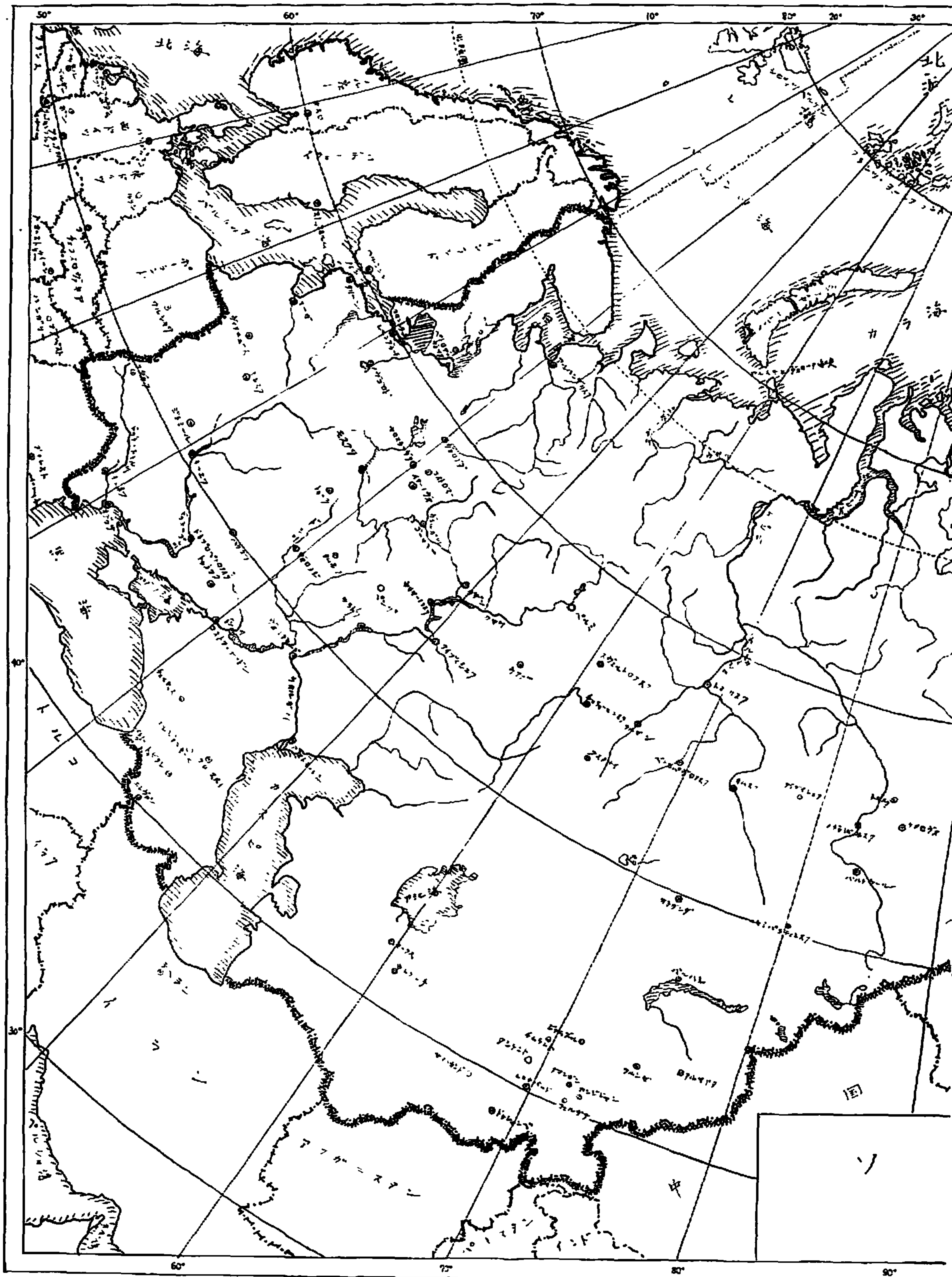
ピョートル一世の治世の末期には、古い歴史と無限の富を持

つインドとの交流に関心が寄せられた。当時の駐ペテルブルグ、フランス大使カンプレドンは一七二一年、「スウェーデン戦争のあと、ロシヤ皇帝の関心はペルシヤおよび東印度との交流にある。ペルシヤとはカザンやアストラハン公国を通じ、または、南部都城を通じて簡単に行える。東印度とは、地球を一周するような航路でなければ可能である(このフランス外交官は、一七二二年ヴォルガとドンを結ぶ運河の工事が始められたことを知っていたものと思われる)。多分この目的で皇帝は、タターリヤがアメリカに続いていないか。オビ河口から印度に航路がつながっていないか、を調査するためアルハンゲリスクから二隻の軍艦を派遣したと思われる。オビはロヤシの大河で、皇帝の支配下にあるタターリヤおよびシベリヤを縫って、トボル、イルトゥイシ川を合流し、北氷洋に注いでいる」と書いている。

カンプレドンの言葉通り、ピョートル一世は北氷洋から太平洋への航海の可能性を探るため、特別探検隊を派遣した。若し二カ月以内に日本沿岸に到達することができれば、イギリスやフランスのように一年半も費やして世界一周で来るよりは、遙かに有利であると考えた。

しかし、北氷洋は厳しく、その年はアルハンゲリスクから僅かに東へ移動できたに過ぎなかった。結論として、北氷洋を通じて極東へ行き得るのは、レナ川以東のシベリヤの河川を利用





する場合にのみ可能であると判断した。

それ故に、ベーリングは、一七二六年、カムチャツカに向う途中、エニセイスクに寄り、アジアとアメリカの間の探検は、皇帝の指示にあるようにカムチャツカからではなく、コルイマ河口（北東シベリヤから北氷洋に注ぐ：訳者注）から東に向い、チユクチ半島を西から回って進むことを、元老院に請願している。

ピョートル一世はまた、中央アジアを通してインドと交易することを試みた。一七二二年のペルシャ遠征は、その布石であった。また一七二三年末に、彼は二隻の軍艦をマダガスカルに派遣することを企図した。それはインドとの中間補給基地にと考えたものである。

一八世紀最初の四半期におけるロシアは、まずバルチック海に進出し、西洋諸国と文化交流を確立し、貿易を開き、経済発展の第一歩を踏み出したことである。また、自国民による要員の養成が始まり、北方戦争により陸海の正規軍を持つに至り、戦闘技術が進歩した。

ポルタワの勝利によって、ピョートル一世は、その方面の懸念が解消し、極東問題に専念することができた。ポルタワ勝利の二年後、コズイレフスキーの探検に始まる一連の探検が行わ

れ、その結果、カムチャツカおよび千島列島の相当の部分が明らかになった。永い間かかって集められたこれら探検家の資料は、しばらく世に知れなかったが、一七三八と一七三九年になって、シパンベルグが日本方面へ航海したあと、ロシアの国家目的達成のため、広く利用されるようになり、それはヨーロッパ、アメリカでも貴重なものとなった。

また、中央アジアを通してインドへの進出、または希望峯を回っての航海は執拗なまでに試みられたが、この方面では思わしい結果は得られなかった。

従って、ロシア政府は暫くの間極東問題に集中することになった。このときまでにインド、支那、日本への航路として、北氷洋を利用する考えが浮んだが、それにはアジアとアメリカの間がどうなっているかを解明することが必要になってきたのである。

二 第一次シベリヤ・太平洋学術探検

第一次シベリヤ・太平洋学術探検は、太平洋北部のロシアの地理学的発見に新しい頁を開いたものである。ピョートル一世は戦争指導で多忙ではあったが、なおかつ、その方面への関心を持っていた。当時、イギリス、フランス、スペインの植民地戦争は熾烈を極めており、ロシアも海洋へ進出することが、自国

の安全を完うする唯一の道であると考えていた。

ピョートル一世の歿する前、エフ・エム・アプラクシンは皇帝と会談を持ったことがある。その内容について皇帝に近かったエヌ・ア・ナルトフは、皇帝は病気で引籠っているが、自分の目の黒いうちに、計画を立案したい熱望にかられていたように、**「私は健康を損ねていて思うにまかせぬが、その計画は以前からあった。しかし、他のことがそれを妨げてきた。北氷洋を通して支那、インドに行く道を開くことの可能性は学者から聞いた。それが実現すれば、祖国を敵から護るに非常によい。我々は、ときどきアメリカの海岸線を探索しているオランダ人やイギリス人よりも幸福になりたいものだ」**と述べたと伝えている。



グイトゥス・ベーリング

いる。この発言は、皇帝がベーリングをカムチャツカへ派遣しようとする意図をはっきり表わしている。
この探検に限って言えば、そ

れは局部的なものであるが、当時の国際情勢からみて、貿易面でも世界の検舞台に出ようとするピョートル一世の企図が現われている。また、当時のヨーロッパ諸国が北部太平洋に関心を持っているのを逸早く察知して、手をうったことは、ピョートル一世の功績である。

第一次カムチャツカ探検隊の長は海軍大佐グイトゥス・ベーリング (Bityc Bepur) であった。彼は一六八一年デンマークのホルネンスに生れ、若くして水兵として、東インドにオランダ船で航行し、そこから一七〇三年にアムステルダムに帰った。その年ベーリングはロシアに仕官し、一七〇四年には既に二、三本櫓の帆船を指揮した。この船はコトリン島 (レニングラードに近く、フィン湾にある…訳者注) から木材を運搬していたが、クロンシュタット要塞の構築に用いられた。一七〇六年海軍中尉となり、四年後に大尉となって二〇門砲艦を指揮し、その後バルチック艦隊に配属された。一七一七年には海軍少佐となり、三年後中佐、一七二一年、六〇門砲軍艦マルリブルグの艦長となった。二年後九〇門砲軍艦レスノエの艦長となりエフ・ア・アプラクシンが指揮する分艦隊に属した。北方戦争のあと、多くは進級したが、彼は据置かれた。それを潔きよしとしなかった彼は予備役を申し出て、一七二四年二月許されたが、故国デンマークへは帰らず、ロシアに止まった。一七二四年八月、

ピョートルはベーリングを想い出し、彼は再び六〇門砲軍艦マ
ルリブルグの艦長となった。

ベーリングの補佐官はエム・ペ・シパンベルグ (M. П.
Шпанберг) およびア・イ・チリコフ (А. И. Чirikov) であ
った。

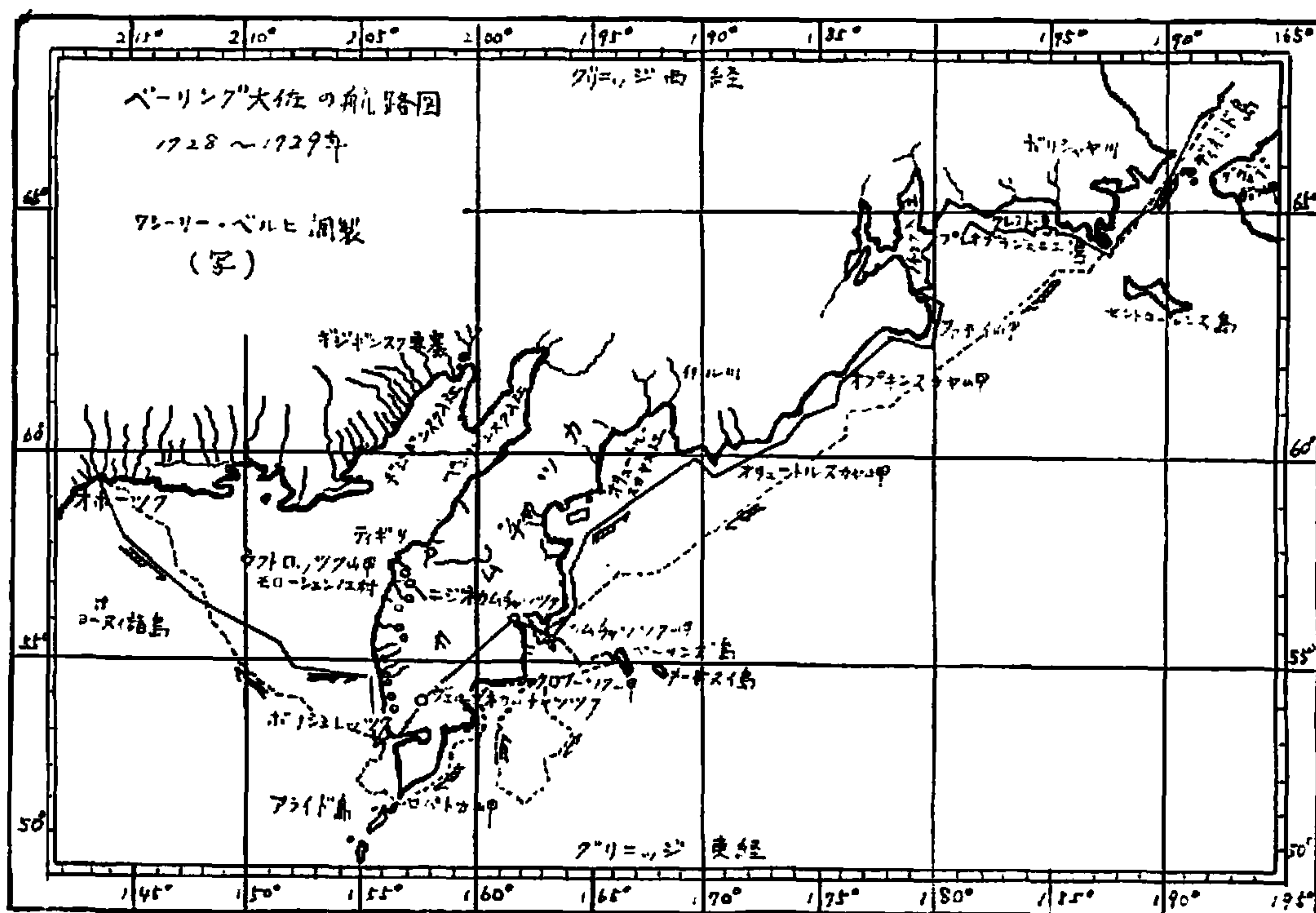
デンマーク人であるシパンベルグは経験に富んだ海軍将校で
あったが、権勢欲が強く、傲慢で、部下には粗野で苛酷であっ
た。ロシア語は下手で、読み書きは不十分であった。彼の欠点
は第二次カムチャツカ探検で特に出た。しかし、彼は無限のエ
ネルギの持主で、積極的に決断力あり、海をこよなく愛し
た。

アレクセイ・イリイチ・チリコフは探検ですばらしい業績を打
ち立てた。彼は一七〇三年に生れ、少年時代をモスクワで過
し、叔父の家で初等教育を受けた。生来体は弱かったが、探検
においては不屈の精神を発揮し、自己に厳しく、困難に際して
仲間の大きな励ましとなった。彼は一七一五年数学・航海学校
に入学し、一年後、海軍アカデミーに移り、一七二一年好成績
で卒業した。海軍少尉となり、翌年バルチック艦隊に配属され
た。一九二二年九月海軍少尉候補生教育の命を受け、その準備
教育を受けた後、同年十一月海軍アカデミーに移り、優秀な教
育者として勤務した。

探検隊には、その他有能な水兵、下士官が選ばれたが、その
中には後に重要な任務を果たした少尉候補生ペ・ア・チャプリン
(П. А. Чаплин) もいた。

探検に関する細部は、海軍長官エフ・エム・アブラクシン海
軍大将に任された。彼はトボリス県知事ヴェ・ヴェ・ドルゴル
ーキーに手紙を送り、ベーリングがヤクーツクに着いたら、船
の建造、装備および食料の準備につき必要な援助を与えるよう
指示した。

一七二五年一月二四日チリコフおよびチャプリンを指揮官と
する二六人の一隊は、二五台の橇荷にあらゆるものを纏め、ペ
テルブルグを出発した。数日後、ベーリングはアプラクシンの
指令を受け、シパンベルグと共に五人の部下を従がえて途につ
き、二月一四日ヴォログダでチリコフの隊と合流した。三月一
六日一行はトボリスクに着き、五月半ばまでそこで諸準備を整
え、そこからイルトウイシ、オビ、ケティ、上トウングスカの
諸川に沿って行動し、一七二六年六月一日ベーリングおよびシ
パンベルグはヤクーツクに着いた。半月遅れてチリコフおよび
隊員が到着した。そのときまでにチャプリンは大準備作業を進
めていた。一七二五年九月五日ヤクーツクに着いた彼は、そこ
で船を建造し、連水陸路でそれをオホーツクに移送する任務を
持っていた。ヤクーツクの地方長官ポルエクトフは部下百数十



1728～1729年のベーリングおよびチリコフの聖ガヴリールでの航海

人を援助に送り込んだ。この人たちは土地の事情に通じ、もし、陸路船を曳くのであれば、大きいものは駄目である、と助言した。当時、この附近は未開地で、人はおらず、木材の伐採人、運搬人、船大工、鍛工の雇庸は困難を極めた。また日用品、食料品も入手困難で、揃えるのに大変な苦勞をした。チャプリンは土地の人の助言をいれ、食料その他の必需品は馬で陸送することにし、肉の代りに家畜を連れて行くことにした。非常な困難を克服し、逃亡者も出る中で、一〇月ベーリング以下はオホーツクに到着した。オホーツクへの荷物発送のためチリコフはヤクーツクに残り、かたわら、各種観測に従事した。

一方シパンベルグを長とする二六四人の輸送隊は、一七二六年七月、一三隻の船に砲、網、錨、帆および一部の食料品を積んでレナ、アルダン、マヤ、ユードマ（いずれも東からレナ川に注ぐ支流およびそのまた支流（訳者注））を遡航したが、冬の到来で航行困難となり、ユードマ（最後の支流）の途中で船はとまった。そこで、一〇〇台の橇荷を編成したが、寒さのため馬は死に、人力でこれを曳いた。目的地に着いた橇荷は半数であったという。

一七二七年夏、探検隊はオホーツクからフォルトゥーナ（Фортуна）という船でボリシェツクに至り、そこから、秋の暴風を避けて、カムチャツカの海岸に沿うことなく、冬期

犬橈を使って、荷物も探検隊もニジネカムチャツク（カムチャツカ半島中部東海岸…訳者注）に着いた。

オホーツクで建造されたもう一隻の帆船は一七二八年六月八日進水し、聖ガヴリール（Св. Гавриил）と命名された。ベーリングは、探検には二隻の船を使用することにし、フォルトゥーナは七月八日ニジネカムチャツクに回送された。

七月一三日、世紀の謎、アジアとアメリカは続いているか、を解明すべく、聖ガヴリールは四名の隊員を乗せて海へ出た。七月二七日フアデイ岬を通過し、二日後アナドゥイル河口を通過、海岸に沿って北進し八月一日入江を発見、聖クレストと命名、八月六日船は湾に入った。後日プレオブラジエーニエ湾と命名される。四日後聖ラヴレンティイ（セントローレンス）が発見された。

ここで彼らはチュクチ人に遭い、通訳を通して未探検地の模様を訪ねたが、現地人からは海峡があるという確証は得られなかった。八月一三日船は北緯六五度三〇分に到達した。陸地は見えなかった。

秋が近づきつつあり、ここから引返すべきかどうかにつき、ベーリングは将校を集めて協議し、書面で意見を出すことにした。

シパンベルグは船長として、更に三日の北上航行は可能で、それで北緯六六度に達しなければ、その時は引返してもよい。ここに越冬するには薪がなく、湾もなく、不可能で、場合によってはチュクチ人が敵意を示さないとも限らない、という意見であった。

チリコフは、探検隊の任務は、アジアとアメリカは陸続きかどうかの解明にあるのだから、この上更に何らかの補足的証拠を得る必要がある。それがなく、このまま引返すのでは、両大陸が陸続きであるという伝説を破ることはできないと考えた。現代の論評によれば、チリコフの主張は各種状況からみて、正しかったとされている。

しかし、ベーリングはシパンベルグの意見に同調し、これ以上、この北の海に止まることは危険であるとし、カムチャツカに引返すことになった。

八月一四日北へ進み、高い山を目撃した。聖ガヴリールは北緯六六度四一分に達し、船は既に北氷洋に出ていたが、彼らはそれを知らなかった。八月一五日、北緯六七度一八分、東経一九三度七分に達していた。同日午後三時、ベーリングはカムチャツカに引返す断を下した。

カムチャツカへは往路と同じコースを辿った。後日、ロマノーソフは、「もっと東へ進路をとればアメリカ北西部を観察し

得たであらうに」と残念がっている。

一七二八年九月二日、聖ガヴリールはカムチャツカ河口に帰還した。越冬期間中、ニジネカムチャツクでは、次のアメリカ沿岸に対する探検準備が進められた。

一七二九年六月五日、船は順風に乗って海に出、コースを東にとった。土地の人々の話では東に島があるということであった。間もなく島の近くに出た。後にこれをベーリング島と呼ぶ。六月九日強い南西風を受けて、船は引返すコースをとる。六月一日、ベーリングはカムチャツカ沿岸沿いに南下するよう命じた。七月一日ロパトカ岬（カムチャツカ南端…訳者注）を回り、千島の北部二島を認めながら海峡を通過し、七月三日ボリシェレツク到着、ここで強風に遭い錨綱を切り、船を破損させる。七月二三日、聖ガヴリールはオホーツク河口に入り、最も興味が持たれた太平洋探検は、かくして、あっけなく終わった。

一七三〇年三月一日、ベーリングはペテルブルグに帰還した。彼は、アジアとアメリカは海峡によって分離されていることに確信はあったが、ペテルブルグでは、最初のもっともらしい反対意見によって、公然と探検の無成果が話されるようになった。海軍当局は、ベーリングの結論、両大陸間に海峡がある、ということ否定はしなかったが、北氷洋航行の可能性について、何等の結論も得られなかったことは、ピョートル一世

の指令の重要部分の欠如であるとの見解をとった。

ベーリングは承知のとおり、ときとして、銜学者的一面を表わした。コズイレフスキーの日本探検案を退けたのもその一つであったが、それは当面、極東探検の目的は、アジア、アメリカ間の状況解明を先決として考えていたからであり、事実、チリコフ、シパンベルグを含めて、海軍省あたりの考えもそうであった。そのことは、一七二八年一〇月、アフアナシー・シェスタコフをコルイマ河口からアナドウィルへ派遣しようとしたことにも、また、第二次カムチャツカ探検隊を編成して、その主要課題を解明させようとしたことにも現われている。

しかし、後世の学者たちは、当時のベーリングの資料を分析して、確かに彼は海峡を発見していると、異口同音に、その功績を認めている。例えば、ロシヤの有名な航海者であり、学者であるア・イ・ナガーエフは「聖ガヴリールは一八〇〇ヴェルスタを航行し、チュクチ半島が北西に曲っている地点まで行き、そこで引返したのは、アジアとアメリカが分離していることを確認したからである」と述べている。こうしてベーリングによる海峡の発見は一般に認められるようになったのである。

三 シェスタコフおよびパヴルーツキーの学術探検

シベリヤ県知事チェカススキー公爵は一七二二年七月中央に

手紙を書き、情報によれば、カムチャツカの沿岸には多数の島があり、原住民も多い。これをロシアの勢力下に入れ得れば、多くの富が期待できる。部下の中には、その探検のため休暇をとりたいと願い出る者もいる、と述べている。

これに関連して、ヤクーツク・コサツクの頭目アフアナシー・シエスタコフ（Афанасий Шестаков）の探検に触れることにする。彼は、ベーリングがカムチャツカに出发直後、ペテルブルグに現われた。彼は意志が強く、豊富な経験の持主であった。粗野で権勢欲強く、教養がなかったが、シベリヤおよび極東を非常によく知っていた。彼の描く地図は正確でなかったが、その内容は豊富であった。彼は、カムチャツカ周辺の島の発見、その住民のロシアへの帰属、千島、アムール河口の探検、日本との交易を唱え、そのもたらす利益の大きいことを力説していた。

元老院書記官長イ・カ・キリーロフはこのシエスタコフの考えを全面的に支持し、アンナ・ヨアーノヴナ（一六九三—一七四〇年、女帝一七三〇—一七四〇年、イワン五世の娘、ピョートル一世の姪…訳者注）に頼んだ。その際、ヤクーツク、イルクーツク、ネルチンスクは遠隔の地ではあるが、近年、ロシア人も増えており、また多くの要塞も建設されているので、その原住民から齎らす利益の計りしれぬことを強調している。

この元老の熱心な肩入れにより、一七二七年三月二三日付告示を以って探検の許可がおり、任務が与えられた。それは、ベーリングは単一任務であるから、このように実利を主体とした、多目的を持つ探検も必要であると考えられたからである。

一七二七年六月、シエスタコフはペテルブルグを出発し、オホーツクに向った。途中、トボリスクで四〇〇人のコサツクを率いるデ・パヴルツキー（Д. Павлуцкий）大尉が彼に合流した。それには、航海士、副航海士、船大工、水兵など多彩な人員が揃えてあった。一七二九年、オホーツクに着いた一行は、二隻の船、ヴォストーチヌイ・ガヴリールおよびレフを建造し、ベーリングの残した船フォルトゥーナと聖ガヴリールを受継いだ。

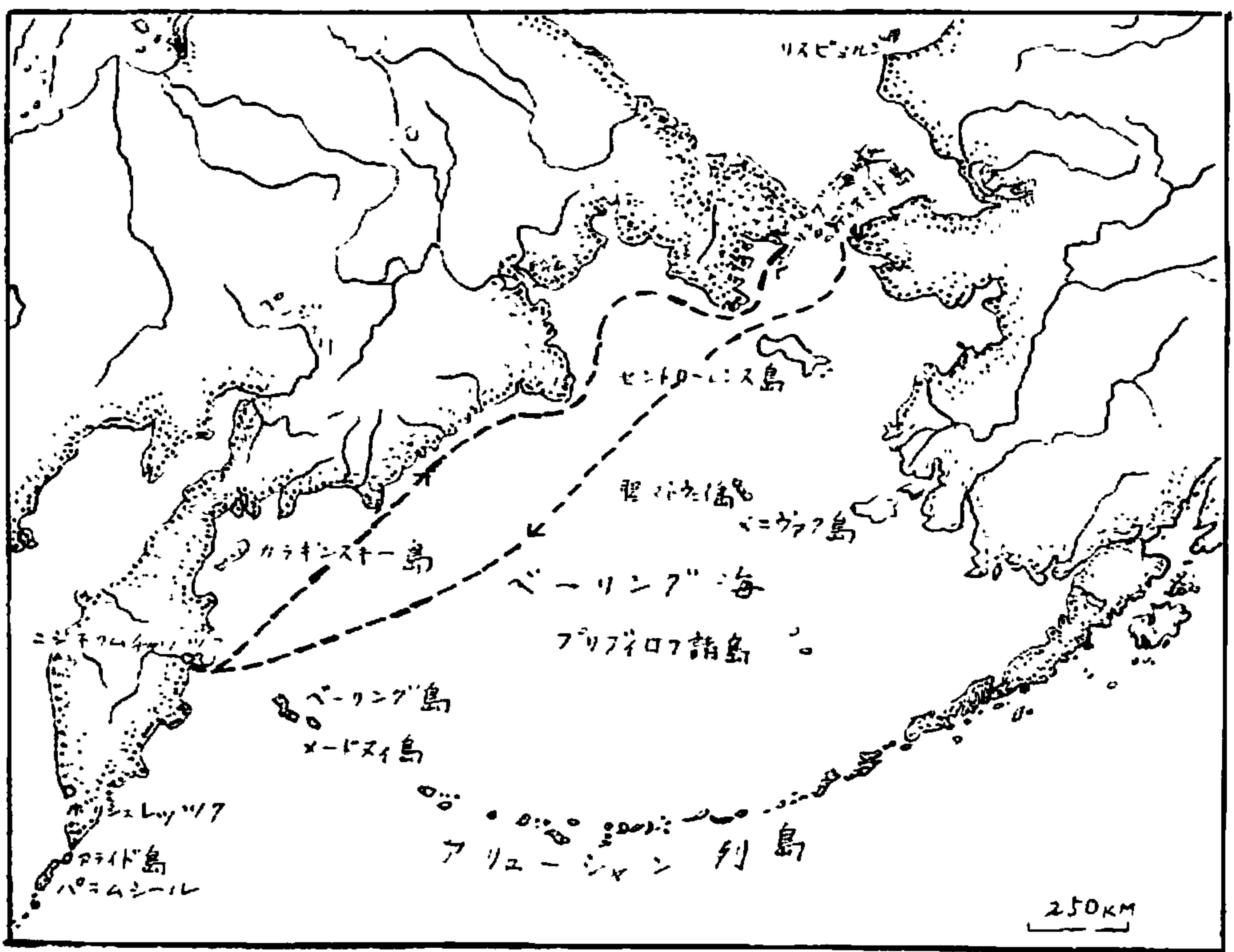
しかし、シエスタコフとパヴルツキーの間に意見の相違があり、準備は進まなかった。トボリスク地方長官事務所は、深刻な争いが起ることを怖れて警告書を送り、探検の実施を早めること、全員の合意で行動すること、などの指示を与えた。

一七二九年、シエスタコフは、甥のイワン・シエスタコフを聖ガヴリールの長とし、息子ワシーリー・シエスタコフをフォルトゥーナの長とし、ロシア人二〇人をつけて、ボリシエレッツクへ出発させた。自からはヴォストーチヌイ・ガヴリールでタウイスク要塞（オホーツク海北部、現在のマガダン…訳者注）に向

い、そこからコリヤーク人（シベリヤ極北の原住民：訳者注）の支配する土地へ向ふことにし、グヴォズデエフおよびスペシネフに、あとからそこへ来るよう指示した。シエスタコフの隊には一〇〇人以上のトウングースがいた。一七三〇年シエスタコフは途につき、殆んど全コリヤークの領土を通過し、それまで貢租を納めていなかったコリヤークから貢租を取立て、更に人質をとった。その少し前、コリヤークの領土にチュクチ人が攻め入ったことを知ったシエスタコフは、チュクチ人を追跡した。戦闘でシエスタコフを始め、五〇人程がチュクチ人に殺された。シエスタコフの死後、パヴルーツキーが探検隊の指揮をとったが、彼には、未だロシヤに忠誠を誓っていない原住民を速かに帰順させるよう、指示された。しかし、戦闘を構えてはならない、とされた。

四 グヴォズデエフおよびフョードロフの、最初のヨーロッパ人としての、北西アメリカ沿岸の探検

シエスタコフの死を知ったパヴルーツキーは一七三二年四月二六日、ヤ・ゲンス (Я. Гeнс) 、イ・フョードロフ (И. Фeдopов)、イ・スペシニコフ (И. Спeцификов)、エム・グヴォズデエフ (М. Гвоздев) に命令し、オホーツクからカムチャツカに行き、そこからアナドゥイル要塞へ早急に来るよう指示し



イ・フョードロフおよびエム・グヴォズデエフの1732年の航海

た。それよりさき、一七三〇年一〇月、ゲンスおよびフョードロフは一行と共に、速かに、オホーツクからアナドゥイル要塞に来るよう指示されていたのである。

一九三〇年九月一九日、グヴォズデフおよびフョードロフは、ゲンスの指揮する聖ガヴリールでオホーツクを出航、九月二五日ポリシェツクに着き、一七三一年七月漸くカムチャツカ河口に到着した。そこから一行はニジネカムチャツカに行ったが、この航海は見るべき成果はなかった。

ニジネカムチャツク要塞では、次の探検が準備され、一七三一年七月二〇日出航の予定であったが、ゲンスの病気で、副航海士のフョードロフが彼に代った。その間、第一次カムチャツカ探検の教訓、その他につき、パヴルーツキーはよく部下を教育した。

一九三二年の春が来て、一行は出航の準備を急いだ。フョードロフとグヴォズデフとの間に意見の相違が生じた。それは、それから先が未知の世界で、地図もなく、経験のフョードロフと理論のグヴォズデフの相違の現われであった。一九三二年七月二三日、聖ガヴリールは総勢三九名を乗せて、カムチャツカ河口を出航した。四日後、カムチャツカ岬を通過し、八月三日、アナドゥイル河口に達した。そこから島を探すことになり、結局、一七二八年にベーリングが行った島に行くことに

決し、その島を求めて航行するうち、八月五日チニクチ岬南部に到達したとあるが、多分それはデジニョフ岬の南岸であったと判断される。

彼らはそこで風のため十日間停泊したが、その間、グヴォズデフは小舟で附近を調査した。このとき皮舟に乗った現地人に事情をきこうとしたが、何の答えも得られなかった。

八月八日、順風に乗り、大陸（アメリカ）に向ったが、風のため再び停泊、八月一五日航行を始め、一六、一七の両日島を調査した。多分、ラトマノフ島（ベーリング海峡にある…訳者注）

と思われる。八月二〇日第二の島（クルーゼンシテルン）（同じく、ベーリング海峡…訳者注）を調査し、八月二二日船は大陸に向い、プリンスオブウエールズ岬に近接し、かくて八月二一日午前三時、遂に待望のアメリカ大陸に到達したのである。ここで現地人の包（パケ）を認め、上陸を試みたが逆風のため果さず、なおも岸に沿って航行、八月二二日キング島（アラスカ、北緯六四度）に着く。その先の探検は、食料欠乏のため不可能となり、乗組員の要請を容れて引返すこととなり、九月二八日無事カムチャツカ河口に帰着した。

この航海中、グヴォズデフおよびフョードロフは航海日誌をつけた。日誌は一七三三年七月二二日オホーツク地方長官事務所に送付された。しかし、両者は任務上対等の地位にあり、

かつ、意見の相違があったため、その日誌による地図の訂正は困難を極めた。特に、帰還後もお互に協議して訂正しようとしなかったことに問題があった。しかし、この探検は、ベーリングのそれに比べ、一段の進歩で、ベーリング海峡にある島嶼の調査や、ベーリングが海峡を南北に通過したのに対し、東西に横切り、航海の所要時間等も記入している点が注目される。

アラスカ北西部に関する記録は、この探検で始めて得られたもので、その点が高く評価される。特に、アカデーミック、パラスはグヴォズデエフを賞讃し、その測地の正確さはクック大佐のそれに劣らないものであると評している。

フョードロフおよびグヴォズデエフ探検隊の科学的成果は、一七四六年にできたロシヤ帝国総図の北東部の作成に大きく貢献している。

第二次カムチャツカ探検隊には、グヴォズデエフを始め、この探検に参加した優秀な乗組員が多数参加した。

ベーリングを始めとするこれまでの数次の学術探検は、その後の計画的学術探検の、いわば、レールを敷いたもので、これらは総て国費を以って賄われ、ロシヤ帝国の領域を広め、新しい国の収入源を求めたものであった。

第一次カムチャツカ学術探検は、シベリヤの都市の位置を正

確にし、それらからオホーツクに至る道を開拓した。また、多くの人種誌学的資料を収集し、将来の極東探検の重要な参考資料となった。

チャプリンの日誌は本格的航海日誌の更始とされ、内容も充実し、後世への道を拓いたものである。

河川をシベリヤの経済開発に利用するというベーリングの発想は興味深く、注目に値する。また彼の人種誌学的調査は極めて価値あるものである。

ミハイル・グヴォズデエフの功績は大きい。それは、ヨーロッパ人として始めて、アメリカ大陸北西部の探検をなしたことがことにある。彼の一七四三年九月一日提出の報告書は学術的価値が高く、外国人学者も評価するところである。

パヴルーツキーの功績はチュクチ半島の地理的解明にある。また、彼のチュクチ人についての資料からは、対岸の大陸の存在を容易に察知できる。

一八世紀の最初の三〇年間に行われた探検は、制約された不完全な装備のもとに行われたにもかかわらず、その目的は常に大きく、その行動は、時として、力以上のものを発揮しなければならなかった。完遂できなかった目的は、更に次の探検に拍車をかけ、学術探検の編成、装備、計画、手段の改善を促していったのである。

第二章 北西アメリカの発見と日本への航路の開発

一 第二次シベリヤ・太平洋学術探検の準備

この学術探検の準備は綿密で、ロシヤの政治的、経済的發展に即応して樹てられたが、それには学士院、元老院、海軍省、商務省などが参画した。

探検を実行し、拡張された領土を守り、太平洋諸国との交易には、まず、極東の経済基盤の強化があげられた。

第一には、造船のため極東における鉄の鑄造である。当時ヤクーツクでは既に鉄を鑄造し、釜を造り、箱物の金具を作っていたと報じているが、更にその鑄造所を増加し、拡大することであった。第二には、農業の定着と牧畜である。それは、食料の確保と物資の輸送に必要であった。次に、大工、鍛冶屋、その他の職人および人夫の確保である。シベリヤに定住する妻子のある役人を徴集することは、遠く散在するシベリヤの都市の状況を考えれば困難で、欧露から直接連れていったほうがよいとされた。最後には、シベリヤのコサツクの子弟に対する海事教育の必要性であった。

これらの手段を講ずる責任者に、一七三一年オホーツク地方長官に任ぜられた有名な活動家であり、学者でもあるゲ・ゲ・スコルニャコーフ・ピーサレフ (Г. Г. Скоряков-Писарев)

がなった。彼は、穀物の栽培、家畜の飼育、港湾の構築、船の建造、河川航路の開発、特にユードマ川とウラク川（オホーツクの西に注ぐ川：訳者注）の間に力をいれた。

一七三三年エム・ゲ・ゴローヴキンの元老院への報告によれば、カムチャツカの商取引は非常に低調である。役人はいるが商人が行かず、物資の調達は困難である。故に免租などにより商行為を活発化しなければならぬと提案している。このような提案にもかかわらず、ことは早急に解決されず、人手不足と物資の欠乏には相変わらず悩まされたのである。

こうして、種々の提案に基づいて樹立された第二次カムチャツカ学術探検計画は、海軍省のエヌ・エフ・ゴローヴィン提督を長とする審議会で検討されることになった。

その頃、ゴローヴィンは他の提督と共に世界一周の計画を樹てたこともあるし、駐英大使からも、エルトンという英国人の提案としてアルハンゲリスクから日本、支那、アメリカへの安全な航路と称するものが建言されている。いずれにしても、北方戦争のあと平和がきて、海軍は航海も訓練も少なくなり、船は老朽化し、海軍が実用に供さなくなりつつあった時代で、ゴローヴィン、その他の提案は、それに活を入れ、併せて、貿易の実利を得ようとしたものであった。

学術探検計画の最終案は一九三二年一月決定された。それ

によれば、隊はアルハンゲリスクから北氷洋を通過してカムチャツカに至るもので、それによって最終的に、アジアとアメリカは接続していないことを証明し、併せて北氷洋の海岸線の調査、航路の設定、千島列島の探検および調査、日本に至る航路の開拓、アメリカ北西部への航路の発見など、一口にいえば太平洋への出口を求めることであつた。

これに基づき、ベーリングは、建造船の型などを建言した。それによると、オホーツクでパケット・ボート（郵便、旅客等運ぶ沿岸船…訳者注）二隻を建造することであつた（案によれば、カムチャツカで一隻、他はオホーツクで建造するようになっていた）。

探検隊は七隊に編成され、それぞれ定められた海岸線が割当てられた。第一隊は一七三四年アルハンゲリスクで編成され、ベチョーラ河口からオビ河口までを予定された。第二隊はトボリスクで編成され、カラ海のオビ河口からエニセイ河口までとし、経験豊かなドウミートリー・オフツィン（Думитрий Офцин）海軍中尉が隊長に任命された。第三隊は同じくカラ海のエニセイ河口から東方の沿岸調査で、トゥルハンスク（エニセイ流域…訳者注）に基地を設けて準備を進めた。第四隊はレナ河口から西へ、エニセイ河口に至る沿岸の調査。第五隊はレナ河口からチュクチ半島を回って、カムチャツカに至る沿岸の調査

と地図作成。この二隊はヤクーツクで編成され、船の建造および乗員の編成はベーリングに任された。第六隊はアメリカ沿岸へ、第七隊は日本諸島へ行くことに定められた。

第一隊を除く他の隊はチリコフおよびベーリングの指揮を受けるようになっており、彼らが隊の任務の細部を決定することになっていた。

一七三三年探検隊のスタッフが定められた。隊長はベーリングで、第一補佐としてチリコフ、第二補佐としてシパンベルグが任命された。探検隊の編成と準備に大きな役割を果たしたのは元老院書記官長イ・カ・キリーロフ、海軍長官エヌ・エフ・ゴローヴィン、水路学者エフ・イ・ソイモノフであつた。

隊長としてのベーリングの任命は必ずしも適當といえない。何となれば、時として彼は極端に用心深く、時として人の意見にすぐ同調するといったふうに、自主性に乏しい面があつたからである。ア・ペ・ソコロフによれば「このような敵しい世紀に、このような当時秩序のないシベリヤという地で、探検隊を指揮する能力は微弱である」と述べている（一八五一、二〇八頁）。当時の人々の中にも、彼の隊長任命について信頼をおかない傾向がみられた。

それに反し、チリコフは探検隊の指揮において決定的な役割を果たしたが、「教養と智を兼ね備え、控え目で、意志が堅い」

とある。一九三〇年第一次探検からペテルブルグに帰還して、海軍大尉となり、二年後海軍少佐に任命されていた。

第二補佐官のシパンベルグは日本行きの艦長となったが、その任務の重要性から、海軍当局の指示により、ロシア人のみの隊員で編成された。

第二次学術探検には、学生も含めて、多数の学者が参加し、通訳、画家も編成に入った。これらの人々には、科学アカデミーの配慮により、俸給の増額が認められた。また、これら学者が必要とする本、器材が調達され、学生は、数学、天文、建築、工学、地理、歴史、ラテンおよびギリシヤ語にいたるまで、広汎な予備教育を受けた。

一部の隊は一七三三年三月ペテルブルグを出発したが、完全な編成でオホーツクに集結したのは四年後である。集結後間もない一七三七年一〇月二一日、スコルニャコフ・ピーサレフは首都へ報告書を送り、探検隊は国庫に損害を齎すだけで、この先、それから得るものは何も期待できないとし、悪いのは、あたかも、ベーリングとシパンブルグで、彼らはシベリヤへ出発後、自分のポケットを満たすことに専念し、ベーリングは既に多額の財をなした、と書いている。

この報告書に基づいて、一七三八年八月一九日、海軍省および元老院に探検継続の可否に関する審査、解明が命ぜられた。

その結果、その年の一二月元老院は、使った金を無駄にしたため探検を継続すべきである、という海軍省の提案を支持した。

一七三七年の冬はユードマ川から橈で荷物を運ぶ作業に従事したが、人々は疲れ、被服は破れ、惨澹たるものであったという。

将校たちの仲違い、およびスコルニャコフ・ピーサレフの中心によって、航海準備は、いやがうえにも、やりにくいものとなった。そこでチリコフは、より指導性を發揮し、いちいち中央からの指導を待つてはいられないと思った。一方、ベーリングはまた、彼に与えられた指令から一步も踏みはずまいとした。チリコフは海事に関する諸規定の忠実なる実行者であり責任者でありながら、一方では、中央からベーリングを監視するよう命ぜられ、他方では、彼の指揮下におかれるという、つらい立場にあった。

そこで、一七四〇年五月チリコフはベーリングに「もう一刻も猶余はならぬ。自分をブリッグラム・ハイルで、チュクチ対岸の陸地探検にやらせてもらいたい」と提案したが、ベーリングは、指令と違うと、許可しなかった。若しこれが採用されておれば、一七四〇年中にアメリカ北西部に到達できた筈であった。

一七四〇年夏、パケットボート聖ピョートル (Св. Пётр) およ

び聖・パーベル (Св. Павел) は竣工した。

二隻のパケットボートは小型船二隻を伴って、八月一五日オホーツクを出発し、カムチャツカに向った。ベーリングは聖・ピョートルを、チリコフは聖・パーヴェルを指揮した。一七四〇年一〇月六日船はアヴァチンスク湾に入り、越冬した。ベーリングおよびチリコフによって開かれたこのアヴァチンスクの港をペトロ・パヴロフスクと呼ぶが、それはこのパケットボート二隻の名誉を讃えたものである。

この越冬間、ここが良港であることの観察のほか、地図の作成、気象、動植物の状況につき記録した。ベーリングの観察によれば、カムチャツカの南部にはクリール (千島原住民：訳者注) が住み、北部にはカムチャダール (カムチャツカ土人：訳者注) が住み、言語に違う点がある。若干の者は偶像を崇拜し、他は無宗教である。食物は、穀類はなく、魚、海獣、野苺子、草根から得ており、家畜は犬以外なく、被服は犬皮である、としている。

春が近づき、討議が重ねられ、出発は近づきつつあった。

(四に続く)

二 北方諸隊の活動の概要

オホーツクでアメリカ探検の準備が進められている時、シベ

リヤ・太平洋探検隊の一行は、北極の厳しさの中で、アルハンゲリスクからチュクチ半島に至る探検活動を、着々と進めていた。

一七三四と三七年の間、エス・ムラヴィヨフおよびエム・パヴロフ海軍中尉を指揮官 (後エス・ゲ・マルイギンが長となる) とする探検隊はエクスペディションおよびオビ号に乗ってアルハンゲリスクから東の北氷洋を調査した。一七三六年および一七三七年の二度に亘る探検によって、一七三七年八月一七日マルイギンは遂にオビ河口に到達し、その間の地形、地質、気象、動植物の分布、原住民の風俗習慣等を調査した。

一七三四年五月一日トボールの船長デ・オフツィン海軍中尉はオビ河口から観測を始めたが、その年は氷の状態が悪く、探検は不成功に終わった。一七三五年六月船は北緯六八度四〇分に達したが、この間乗組員の大部分が重症の壊血病に罹り、そこから引返し、八月オビ河口に達し、一〇月トボリスクに帰還した。

一七三七年は、北氷洋西部は全く氷が無く航海によい年であった。オフツィンは新たに建造された「オビー・ポチタリオン」と「トボル」で出発し、八月上旬外洋に出た。八月一六日船はオビの入江とエニセイを分ける半島の突端を回り、八月三十一日エニセイの河口に到達した。そこからエニセイを三〇〇キロ遡

航し、トウルハンスク近くで越冬準備に入った。これを知ったベーリングはオフツインに祝福の手紙を送っている。

この成功に喜んだオフツインは、報告書を携えてペテルブルグに向ったが、トボリスクで逮捕された。理由は、当時流刑中の公爵イ・ア・ドルゴルーキーと連絡を持ったことであつた。兵に降等された彼はベーリングの指揮下に送られた。

その後を受けて、航海士エフ・ミーニンおよび副航海士デ・ステルレーゴフがエニセイから東に向つて探検を始めた。困難をおかし、氷を割つて北東に進み、一七四〇年彼らはタイムイル半島の西部に到達した（北緯七五度二九分）。岬には航海士ステルレーゴフの名がつけられた。

海軍中尉ヴェ・プロンチーシチェフおよび航海士エス・チェリユースキンの隊も立派な業績を残した。一七三五年、ヤクーツクで、チリコフの指導下に建造された船で、オフツインおよびミーニンに合流すべく、レナ河口を出て西に向つた。オレニョーク河口で越冬に入り、翌年彼らは、現在のチェリユースキン岬に殆んど到達していたが、群氷に阻まれ、引返した。ここで指揮官プロンチーシチェフおよびその妻が重症の壊血病で亡くなるといふ不幸に見舞われたが屈せず、ハリトン・ラプテェフ海軍中尉が長となり、困難を冒して探検を続けた。更に不幸が襲う。船は氷に打ち砕かれ、全員海中に投出されたが這い上り、

徒歩で何もないツンドラを長距離に亘り探検を続行し、遂にレナ川からハタंगा河口湾までの地図ができ、後更にタイムイル半島の地図ができたのである。

一七四二年二月チェリユースキンハタंगा河口を出て、アジアの北端に向つた。五月一日聖ファデー岬に到着、そこから「北東岬」と彼自身が命名した岬までの海岸線の調査を行つた。後にこの岬には彼の名がつけられた。チェリユースキンはこの岬を北緯七七度三二分と測定したが、後日その正しさが確認されている。彼の探検目標は十分に達成されたのである。

ラシーニウスを指揮官とする探検隊は、プロンチーシチェフの隊と同時に行動を起し、一七三五年レナ河口から「イルクーツク」で東に向つて出航し、ハラウーラフ河口で越冬したが、この冬隊員は重い壊血病のため、五二人中八人が生き残つたのみであつた。ラシーニウス自身もここで亡くなった。彼の死後、隊の指揮をチリコフの友人、ドウミートリー・ラプテェフ海軍中尉がとつたが、その任務はコルイマ河口に散在する島嶼の探検であつた。一七三六年五月三隻の平底川船で、ヤクーツクを出航し、レナ河口に向つた。ここで彼はハラウーラフ河口に越冬中のラシーニウスの生存者一行を待たが、待ちきれず、ハラウーラフ河口に向つた。そこで七月一八日「イルクーツク」の指揮官となり、月末には川船を待たせてあつたレナ河

口に着いたが、流水が多く川船に着いたのは八月七日であった。数日後、そこから北東へ進み、二日後北緯七三度一六分に達した。ここで群氷に囲まれ、協議の未、引返した。結論は海路カムチャツカに至ることは、当分不可能である、ということであった。レナ河口の越冬は厳しく、殆んどが壊血病に罹った。一七三七年七月、ラプテエフはヤクーツクに帰還した。

二年後、レナ東部探検隊長にデ・ラプテエフ、船の長にはハ・ラプテエフが任命された。二人の従兄弟に与えられた任務は、海があけば直ちに出發し、流水などの障害にあえば時を待ち、すぐ航行を続け、冬が来ても基地に戻らず越冬の手段を講じ、翌年更に航行を続け、とにかくチュクチ半島を回ってカムチャツカに到達せよ、というものであった。これは非常に大変な任務であった。一七三八年船は氷を分けて進み、ハタング入江に到着し、越冬に入った。(實際は西に進んでいた。訳者注)一七三九年から四〇年にかけての冬、ハ・ラプテエフはピヤーシン河口へ旅行し、またタイムイル河口の東西を調査した。一七四〇年夏タイムイル半島を回ろうとして、船を群氷で破損、止むなく、陸路、三方から半島の調査を行った。それは一七四一年三月から五月にかけ実施された。この調査は非常に正確なもので、後北氷洋地域の地図の作成に、大きく寄与した。

一方、デ・ラプテエフ隊の一部は、早春レナ河口から東へ、

スヴャトイ・ノス岬に向って調査を始め、他の一部はインジギルカ河口の調査を始めた。これらの調査は陸路を踏査したもので、この地帯では海からの調査は不可能であった。

一七四〇年春、アラゼヤ河口からコルイマ河口までの調査を行った。同時にヤナおよびフローマ河口の調査も行った。夏一行は、チュクチ半島に到達すべく行動を起したが、ボリシヨイバラノフ岬(コルイマ河口の東)まで行くのがやっとのことであった。コルイマ川中央河口で越冬、その秋から翌年春にかけて、コルイマ上流、アナドゥイルに至る道などの調査を行った。

一七四一年一〇月、デ・ラプテエフは四五台の犬橇隊を編成し、陸路カムチャツカに向い、長距離を走破して、アナドゥイル要塞に着いた。一七四二年夏、彼は舟でアナドゥイル河口附近を調査し、ニジネコルイムスクへ再び帰った。一七四三年彼はペテルブルグへ帰還した。

多大の困難と犠牲を払ったこの探検隊の苦勞は筆舌に尽し難いが、それでも、東方隊が、チュクチ半島を回ることができなかっただけで、アルハンゲリスクからチュクチまで、精密な調査が行われたことは、歴史に特筆すべきことである。また、ラプテエフは総隊長ともよく連絡し、チリコフとは特に友情を温め、成功も不成功も共に分かち合い、通じあっていた。

三 日本沿海へ

一七三八、三九年の航海 シパンベルグを長とする探検隊は千島列島の探検にあった。任務は、千島列島は既にロシヤの勢力下であり、その住民からはカムチャツカへ貢租を納めているが、先年エヴレイモフによって、そのうち一六が調査されている。今回は更にこれを確認し、新しい島があれば調査する。更に足を伸ばして日本附近まで行き、その島を調査し、それは日本の勢力下にあるか、または他のアジアの国の勢力下にあるかを調べ、原住民に会ったら、よく懐け、ロシヤに忠誠を誓わせること、そうすることによって貢租を納めるよう仕向けること、決して事を構えてはならない、というものであった。そのほか日本自体の島の調査、およびその航路の探検であった。シパンベルグがオホーツクに到着後直ちに準備が始められ、一七三七年七月七日、ブリック・ハアルハンゲル・ミハイル（Архангел-Михаил）が進水し、七月一九日解ナデエジダ（Надежда）が進水、ハ聖ガヴリールが修理された。食料不足のため一七三八年春まで出発は延期された。一七三八年六月一八日オホーツクを出航、七月六日ポリシェレツク到着、ここで物資を補給し、一路南下する。シパンベルグの報告によれば、島は三二あり、岸が急なので踏査せず、住民の有無は不明とあるが、彼は明かに誇張していた。

濃い霧のため、ハ聖ガヴリールは遅れ、解ナデエジダも見失なう。秋が近づき、それから先は危険が伴なうので、各船の判断で、カムチャツカに帰還することとなった。隊長の船は北緯四五度のウルツプ島まで行き、それを回って、八月一七日ポリシェレツクに帰還した。解（船長シェリテイング）はそれより一〇日早くポリシェレツクに帰り、ハ聖ガヴリール（船長ヴァリトン）は北海道東端の岬（北緯約四三度二〇分）まで行き、地図に二六島嶼を記録している。

日本沿岸に到達することはできなかったが、千島列島に関する若干の新事実が判り、また航海に関する新しい知識を得た。ポリシェレツクに越冬し、パンを焼き、船を修理し、船の炊事場を調べ、あらゆる準備をした。また、島の調査用に白樺を使って一八挺櫂、一二挺櫂のボートを作成した。

一七三九年五月二〇日早朝、ハアルハンゲル・ミハイルに青旗を掲げ、五発の礼砲を撃って出航した。

五日後、船隊は最初の群島に到達した。それは、北緯約四二度で、デミリによれば、謎の土地ガマの記入されている地点で、実際には、そのようなものではなく、隊員たちは驚ろいた。最初の週に指揮官の交代があり、秩序は乱れた。シパンベルグは、ヴァリトン海軍中尉をハ聖ガヴリールの船長とし、少尉候補生シェリテイングを解ナデエジダの船長とした。何故

こうしたか。長と部下との間に溝ができた。

船隊は始め南西に航路をとり、六月一四日北緯三九度三一分に達し、そこから日本の沿岸に向った。霧が発生し、鐘を叩き、砲を撃って合図し合ったが、六月一五日「聖ガヴリール」は見失なわれた。その日は鷗を目撃し、木の漂流するのを見た。そして陸地を認めた。本土（本州）の北東部であった。船は本土に沿って航行した。それは広汎に、全体を観察するためであった。沿岸の水深、土質などを調査した。シパンベルグはボートを卸ろし、岸に送った。入江には三〇隻にのぼる帆船と、多くの小舟があつて上陸はできなかった。六月一八日隊は岸に近づいた。水兵の言によれば、岸は岩壁で、その上には大きな木が生え、岸には大きな部落が四つあり、建物は総て石造りであり、周辺に穀物が植えてあつた、という。

六月二〇日、二隻の日本のボートを発見、ロシアの船と併行して進む。招くと、彼らは手を振って応え、錨を卸し、岸へと合図した。記録によれば、日本人は立つて舟を漕ぎ、魚のように後ろで操作し、早い、とある。

六月二二日、三隻は北緯三七度で錨を卸す。岸から一ウエルスタ（約一軒）であつた。その日は日本人漁師はかしい、その他の魚を呉れる。ロシア人は酒をもてなし、また会うことを頼んだ。船には旗が掲げてあつたので、日本人に好感を与えた。

用心深さが解れ、親しみが湧いた。新しい知合はロシア人に魚、米、煙草、大根、胡瓜の塩漬けをくれた。シパンベルグは酒、タバコを与えた。彼らはもらう毎に、額まで持つて行っていただいた。ロシア人の通訳では言葉は通じなかった。

日本人は好んでロシア人と物を交換した。羅紗、ビーズなどで、それに対し日本人は金貨を支払った。それは平行四辺形や四角のもので、ロシアのチエルヴォーネツの十分の七の目方で、純金であつた。

日誌には、日本人についての詳細な記事がある。背丈は中背または小さいのが多く、大きいのは少ない。体は浅黒く、目は黒くて大きい。髪は黒く、額から剃りあげ、上および後頭部には髪を蓄え、紙で束にして曲げ、先端は切つてある。子供は上頭部を四角に剃るほかは大人と同じである。

ロシア人は、自分たちと非常にきわだった対象の服装を見た。着物は長く、帯を締め、ロシア人が用いる寝巻のようである。

大きなボートで来た六人は上級階層の者と判断された。彼らの着物の肩および裾には紋が縫付けられていた。彼らは船室に入ると、土下座してお辞儀をし、手をとって頭に持つてゆき、そのあとで跪づいた。船長はウォツカで持成した。

友好裡に話が進むうち、シパンベルグは地図と地球儀を出し

て見せた。彼らはこの土地をニフォーニヤ (Нифония) とい、ロシヤの地図にあるヤポーニヤ (Япония) ではなかった。

七月三日北緯四四度二四分に達し、千島の三島を発見、七月七日北緯四三度一五分に低い、草の密生する島を発見、七月八日ヌツカム (Нуткам) 島に投錨した。周辺には一〇以上の島があり、住民はマツマイと交易していた。

そこから船はマツマイに向った。霧と雨と向い風のため難航したが、間もなく細い海峡に入った。うっかりすると岸や岩礁に乗上げる危険があった。病人が出た。

七月二四日隊はマツマイ島に近づいた。多くの帆船が集っていた。ここで眼につくものはすべて観察した(当時彼らの認識によれば、マツマイとは、道南の松前の意味でなく北海道全体の意味である…訳者注)。

病人が多くなり、船の操作にも支障が出たので、七月二五日帰路につき、六日後、北緯四四度二四分で「ナデジダ」を霧のため見失ない、八月一四日「アルハンゲル・ミハイル」はボリシェレッツクに帰着し、八月二九日オホーツクで他と二隻と合流した。

途中ではぐれた「聖ガヴリール」の行動は、六月一六日北緯三七度四二分に達した所で、日本の東海岸に着いた。南下して六月一八日北緯三五度一〇分に達し、沖に投錨した。翌一九日

一八人の日本人が乗るボートが来て、彼らを陸へ招じた。ヴァリトンは、航海士カズイミローフ以下六名を、淡水補充を兼ね、土産を持たせて送り出した。そのボートを迎えに岸から一〇〇隻以上のボートが来た。岸では日本人が深いお辞儀で一行を迎えた。ここは本州のアマツムラといった。土地の漁師は葡萄酒、橙、林檎、大根の砂糖漬、飯を馳走し、煙草をくれた。

ロシヤ人はビーズ、銀貨を与えたが、それはその場で上司に差出された(日本の法律は外人との接触を厳重に禁止していた)。カズイミローフは水兵と共に村を見学した。そこは木造、石造合せて約一五〇〇戸あり、海から約三軒離れている。日本では牛馬、鶏を飼い、米、豆、葡萄、橙、杏子、大根などを作っている。家はきれいで、陶器の鉢に花を生け、綺麗な箱に品を納め、綿、絹物など、短時間では見尽せない程であった。出迎える時には、二本差しの一入を含め、二人が刀を差していた。

そこから進路を南にとって進み、六月二一日北緯三八度五一分に達し、四つの島の間に投錨した。この島は岩壁が多かったが、住民は多数で、家畜も相当おり、野菜も栽培していた。この諸島は岬から南へ散在していた。六月二二日二隻の日本船が近づき、上陸を指示された。湾は風で、ロシヤ船は曳航された。突然、剣を持ちピストルを構えた軍人(単数)が乗ったボートが現われた。彼はロシヤの船を切離すよう命じ、日本人と

交流することを禁じた。船はその日に湾を出て、翌日小さな島に停泊した。そこでロシヤ人は麻の着物を着た人々に会った。岸には牛や馬が放牧してあった。

六月二四日、聖ガヴリールはカムチャツカに向け帰還の途につき、七月二一日ロパトカ岬と千島第一島の間を通して、一カ月後オホーツクに帰着した。

航海士と測地士の協同作業に成る資料は、ヤクーツクから緊急にペテルブルグに送られ、ベーリングの指示により、シパンベルグはヤクーツクに残った。

シパンベルグの報告は一七三九年一月一九日ペテルブルグに着き、好印象をもって受入れられた。これによって日本への道は開かれ、その航海の方法、日出づる国の事情が判明した。

シパンベルグは叙勲はおろか、探検隊の長としてベーリングに代わることも約束されていた。一七四〇年一月七日の告示は、シパンベルグが総ての資料を携えて、夜に日を継いで、ペテルブルグに出頭せよ、というものであった。その命令は一月二四日シパンベルグに送られたが、彼の手に入ったのは、やつと四月一〇日であった。しかし、シパンベルグは、馬で行ったとしても、河川の汜濫などがあって直ちに行けぬ、レナの解氷を待つて陸路のある所まで行き、そこから文字通り、夜に日を継いで行く旨を書き送っている。かくして六月一三日レナの解

氷を待つて出発し、七月八日キレンスク要塞で彼は緊急命令を受取った。急ぎそこからカムチャツカに帰り、カムチャツカ探検隊の指揮をとれ、というものであった。

シパンベルグに与えられた指令は、一七四〇年春チリコフおよびエンドグーロフを二隻のパケットボートでアメリカ探検を行わしめ、シパンベルグ、ヴァリトンおよびチハーエフは日本に向う、というものであった。日本へは、最初千島へ行き、次にマツマエ、日本へ行くよう指示された。日本へ行くには地図の補正が必要で、シパンベルグより南下したヴァリトンが作成した地図の提出が求められた（シパンベルグはそれを提出しなかった）ほか、千島南部諸島の停泊所の調査などがあげられ、日本へ行った場合は、両国に利益を齎らす通商、友好関係の樹立、日本近海の島の発見と、その民情調査などが指示された。

また、北アメリカは西洋の植民化が進んでいるので、その附近をよく調査し、ロシヤの勢力範囲として確保し、極東の保有を安泰にすること、そのほか島の発見に努め、住民を手なづけ、ロシヤへの忠誠を誓わしめることなどが指示された。

一七四一、四二年の日本への航海 一七四一年九月準備を完了。編成はパケットボート「聖ヨアン」（Св. Иоанн）、ブリ

ツクハアルハングル・ミハイル、舩ナデエジダ、舩ボリシエレッツクの四隻で、科学アカデミー養成の日本語通訳ペ・シエナーヌイキン、ア・フェネフ、二〇歳のシパンベルグの息子、アレクセイ・ドルゴルキー（公爵ドルゴルキーの息子）、日本人ヤーコフ・マクシーモフ（一七一八年カムチャツカで遭難）が加わった。

シパンベルグは、その年の日本探検は時期を失したと判断、オホーツク西岸からアムール河口探検を行うべく、九月四日少尉候補生シエリテイングおよびグヴォズデフを派遣した。五日後シヤンタールスキー島（オホーツク海の西部：訳者注）に至り、九月一日ウダ河口に向い、一五日河口に入る。九月二日ウダ要塞を出て、二二日から二八日までシヤンタールスキー諸島を調査、十一月九日ボリシエレッツクへ帰還する。この年は単に、ウダ河口とシヤンタールスキー諸島を探検したに止まった。

一七四一年から四二年にかけての冬は次期探検の準備をした。編成は船四隻で、パケットボート聖ヨアンにはシパンベルグ以下七人、ブリッグハアルハングル・ミハイルにはシエリテイング以下四〇名、舩にはコーズイン以下三三名であった。

一七四二年五月二三日探検隊はボリシエレッツクを出航、三

日後千島の第一島に到着、三〇日には航海を再開し、南西に航路をとる。六月三日北緯四九度一八分に達したとき、如何なる意図および理由からか、ブリッグハアルハングル・ミハイルと舩ナデエジダは隊列を離れ、更に、六月一三日北緯四四度四〇分で、舩ボリシエレッツクが遅れた。そこでシパンベルグは二度にわたり将校を集めて、その先の航海計画につき協議した。六月二三日「聖ヨアン」は北緯四一度二五分にいた。シパンベルグはカムカヤツカに一旦帰ることを提案した。小舟がなくては日本近海の調査は不可能である上、乗組員は衰弱し、病人が出かねない状況であった。一同は原則的にはシパンベルグの提案に賛成であったが、一時帰還の期限につき意見の相違があった。そのうち船の水漏れが始まり、皆がそれに従うことになった。六月三〇日船は北緯三九度三五分にいたが、そこからカムチャツカへ引返すこととなった。かくして日本の岸を見ることはできなかったのである。

七月一四日聖ヨアンは千島第一島（北から）に着いた。そこには既に「ナデエジダ」、ハアルハングル・ミハイルが帰っていた。

幾分よい成果をあげたのは舩ナデエジダである。「ナデエジダ」は北緯四六度二一分まで行き、そこから航路を千島列島へとり、調査を行って七月二日前記の集合場所へ帰った。

シパンベルグは新たに「ナデエジダ」の船長となったシェリディングに、再びオホーツク海西岸の探検を命じ、ウダ河口からアムール河に至る間の調査を指示した。他の船は修理のため、ボリシエレッツクへの帰還を命ぜられた。

七月二四日「ナデエジダ」は千島を後にして、八月一日サハリンに近づき、北緯五〇度一〇分に達した。彼らはそれをイエスソ（蝦夷）と思った。更に南下して、北緯四五度三四分に至り、日本とサハリンを距てる海峡に入った。霧が濃く、岸から六哩にいたが、海岸は見えなかった。

この探検調査ではミハイル・グヴォズデフは地形、岬、入江、海岸線などを実によく調査している。八月二〇日船に水漏れが起り、食料も底をつき始めたので、シェリディングは、カムチャツカに向けてコースをとり、一七四二年九月一〇日、サハリンの東海岸の一部を調査して、オホーツクに帰還した。

一七三九年のシパンベルグ、ヴァリトンによる日本への航海が西洋に知れるや、一七四〇年始め、「クロニカ・ノーヴォオ・スヴェータ」はその内容を紹介し、一七四〇年七月二七日付「ガゼット・デ・フランス」はシパンベルグによる千島三四島の発見と、その住民の模様を報じ、それが日本人に似ていると書いている。一七四〇年一月一三日アムステルダム雑誌

も、ペテルブルグ駐在オランダ代表の手紙として、これを紹介している。

ペテルブルグが、シパンベルグの日本到達の成果に湧いているところへ、一七四〇年八月四日元老院はスコルニャコフ・ピーサレフの報告を受取った。それには、シパンベルグおよびヴァリトンは、単に朝鮮沿岸に行ったに過ぎない、というものであった（前記の如く、これもピーサレフの悪意と思われる……訳者注）。シパンベルグの日誌および地図には不確実な点はあったが、ベリリングは一七四一年四月一八日付の報告書で、彼が所望の地点に到達したものの断定を下している。ベリリングの意見は権威もあるものではあったが、それでも尚且つ、シパンベルグの探検資料は検討に付されることになった。この分析は海軍アカデミーのシーシコフに命ぜられた。委員会は一七四六年五月二〇日付の審査報告書において、スコルニャコフ・ピーサレフの意見を退け、シパンベルグらが日本に行った事実には問題は無い、との判定を下している。

シパンベルグ探検隊の成果は、ガマという架空の土地の存在を否定したこと、千島列島の調査を更に一歩進めたこと、未だ西洋人の踏査したことのない蝦夷、本州、サハリンの東海岸を航海し、それまでヨーロッパ人にとってぼんやりした認識しかなかった日本北部地方の状況をかなり判つきりさせたことにある。

る。既に一七四五年には東アジアの地図が作成され、それにはサハリンは島として扱われている（ロシア側の文献によれば、樺太が島として確認されたのは、一九世紀半ばのネヴェリツコイのアムール、樺太探險によるとある：訳者注）。これが「ロシア科学アカデミー地図帳に採用」された。

最初のロシア人の日本への航海は日本の年代記にも記録されたが、それによる貿易関係の樹立は残念乍ら実現しなかった。

それは一七三九年七月一日、日本軍事封建政府が「日本の湾から強制的に外国の船舶を遠ざけよ」との指令を出し、鎖国政策を強力に推進したからである（一七三九年（元文四年）五月スペインベルグ指揮のロシア探検船陸奥、安房、伊豆の沿海に出没、七月幕府海防を厳しくする……日本史年表、歴史学研究会編、一九六六年、岩波）

四 ベーリングおよびチリコフによるアメリカ北西部およびアリューシャン列島の探検

航海への最後の準備 航海のための直接の準備は一七四一年四月二三日から六月四日までであった。五月四日ベーリングは会議を招集し、航海の具体的打合せを行った。五月二十九日「聖ピョートル」および「聖パーヴェル」は曳航されてアヴァチンスク入江に入った。そこで水、食料、火薬、弾丸などを積込んだ。「聖パーヴェル」はチリコフ以下七五名、「聖ピョートル」はベーリング以下七七名であった。

六月一日一八時出航と決めたが、霧のため六月四日西風を利用して出航し、会議の打合せ通りのコースをとり、六日後北緯四六度に達し、更に一度南下し、航路を北東にとった。六月二〇日霧のため両船は分れ分れになり、後各船は単独行動をとるようになった。

ベーリングの航海 二日間何の成果もなく「聖パーヴェル」を探して彷徨い、北緯四五度まで行き、そこから北東、北北東へコースをとり、その後東へ、更に北東へ進路をとり、北緯四六度まで陸地はなかった。飲料水が欠乏し始め、節約しても九月一日までが限度であった。その後北北東に方向を変え、七月一七日、一カ月半の航海の後、北緯五九度四〇分に至り、船から二〇哩に土地を発見、近づくにつれて、眼前に峨峨たる山が現われた。

こうして一行は、遂にアメリカの北西部に到達したのである（後刻判ったことであるが、チリコフはベーリングより一昼夜半早く、アメリカの陸地を認めた）。陸地を見て、探検隊の一行は、非常に喜んだ。多年に亘る努力が遂に実を結んだのである。隊員の喜びに反し、ベーリングは素直に喜ばなかった。彼の述懐によれば「我々は多くを発見した。我々の誰もが、名誉に心が

浮いて、空中に樓閣を築いているが、我々は今この岸を何処に発見したのか、家までは如何に遠いことか、この先何が起るか、何故知らなければならぬのか、我々をここで季節風が襲わないか、岸は未知である、飲料水は越冬に足りない、などは一切考えていない」と、彼の心境は複雑であった。

「聖ピョートル」は海岸に沿った航行を続け、北西に進路を変えて一行は山岳のある島に接近した。それは七月二〇日の月曜日で、聖イリヤ祭の日であった。それでこの島をイリヤ岬と命名した（現在のカヤク島）。この島の調査結果は次のようであった。カムチャツカの同緯度より遙かに氣候がよく樹木の成長がよく、住民はカムチャダル（カムチャツカの原住民）と同一民族である、ということであった。

七月二一日早朝カムチャツカに向け出発、途中嵐にあいカジヤク（コディアク）島南西の小島に近づいた。この島をトゥマシヌイと命名する。後にチリコフ島と命名された。

秋が近づき、飲料水は欠乏し、乗組員の大部分は壞血病に罹った。この時健康な者四名であったという。八月三〇日「聖ピョートル」は群島に到達する。投錨、飲料水を補給する。ここでシユマーギンという人気者の水兵が亡くなった。島に彼の名をつけた。九月五日皮舟二隻で来た現地人に誘われて一人が下船して、島人と交流する。ここには九隻の皮舟があった。こ

の皮舟は転覆しても水の入らぬよう巧妙にできていた。

九月六日から十一月五日までは何処とも判らぬ、連日連夜の航海であった。九月二五日一行は群島に行き当った。遠くに高い山が見え、これを地図に記入し、聖ヨアン山と命名した。それから進路を北東にとった。

情況は日に悪く、帆は破れ、装備はいたみ、ベーリングは病気で指揮はとれず、誰かが毎日死んだ。秋のこととて、冷たい風が吹き、雨が降り、雪が降り、霰が降った。船が何処にいるのか誰も知らなかった。船は殆んど風のままに動いた。十一月四日陸地を認めた。雪に覆われた高い山があった。皆はカムチャツカだと思った。病人までが床から這い出して見た。隊長ベーリングも起きて見た。皆喜んだ。しかし、近づくにつれて、それはアヴァチンスク入江でないことが判った。

十一月五日壞血病ですっかり弱ったベーリングは部下を集めて協議した。しかし、今となつては先へ進む術もなく、この地に上陸することに決めた。皆がもう病人でろくに勤務にもつけなかった。ボートを卸し、病人を先に運び、次に荷物を運んだ。「聖ピョートル」は錨一つで海に残された。翌日大きな波で錨綱が切れ、船は陸地に打上げられた。

人々は、これが島か大陸かを知りたがった。ベーリングは既に知っていたが、期待している部下のため、黙っていた。地形

偵察のため二隊が編成された。海岸を歩くと、らっこ、北極狐が静かに座っていた。明かに人は住んでいなかった。彼らは山に登った。向うに海が見えた。それは島だったのである。その報は人々の心に氷の如く響いた。それは、全員の破滅を意味していた。島にはこけ以外何もなく、家も船も作る術なく、地は雪に覆われていた。冬の到来であった。食料、薬品は殆んどなくなっていた。

一二月八日ベーリングは死んだ。死の数時間前、彼は、暖まりたいから自分を首まで土を埋めよ、と部下に命じた。彼は生き乍らにして葬られたのである。かくして、勇敢なる航海者、隊長、海軍大佐ヴィトウス・ベーリングは、最後まで部下を励しながら、その生涯を閉じたのである。彼の死後ヴァクセリ中尉が指揮官となった。その冬の、帆で作った住いでの生活は筆舌に尽し難い困難なものであった。(一九六六年カムチャッカ考古学者の一行はコマンドール島で「聖ピョートル」の残骸を発見し、そこに「一六八一—一七四一、偉大なる航海者ヴィトウス・ベーリングに捧ぐ、一九六六年、カムチャッカ住民より」と刻んだ碑を建立した)。

春の到来は状況を好転させたとはいえなかった。食料の調達は一層困難になった。らっこは用心深くなり、大抵の場合は不首尾に終わった。仕方なく、おっとせいを食したが、肉は固く油こく、異臭があった。五月になって、あざらしを食し、鯨が陸

に上り、海牛を数頭捕獲して、漸く食事情は好転し、草の芽がふき、病気は快方に向った。

暖かい日の到来と共に、その先どうするかという問題が起った。オフツイン(さきに降等された)は船を起して使用するといい、他の者は、ボートでカムチャッカへ行き救助を求めると主張した。結局、船を改造することに決した。船大工は全員死亡していたが、クラスノヤルスク生れのコサック、スタロドゥブツェフが、経験があると仕事を買って出て、それに二〇人程の比較的健康な者が加わり、遂に一七四二年八月一〇日、一回り小さな「聖ピョートル」が進水した。このコサックは一七四四年「ボヤーリン」の息子「」の称号(封地を受けて文武の勤務にくく小領主…訳者注)を受けた。八月一三日、この客をもてなさない島を出航し、二七日ペトロパヴロフスクの湾に入った。

チリコフの第一次航海 ベーリングに別れたチリコフは始め東に、その後東北東に進んだ。七月一二日鴨の飛ぶのを見て陸地の近いのを察知し、七月一五日朝三時、アラスカ沿岸のプリンスオブウエルス島の西の島(現在のベイケル島)に着く(北緯五五度二〇分)。

北緯五八度まで北上して島を発見、投錨する。気候は余程寒く、山の雪も多くなった。チリコフはアヴラム・デメンティエフ

に一〇人をつけて島の探検に向わせる。任務は停泊所、住民の数、水深、進入路の調査であった。しかし、彼らは約束の時間に帰らず、数日待ったがやはり帰らず、今日まで、そのことは明かにされていない。

ヴェ・ベルヒの判断によれば、彼らはそこで捕えられたか、または彼の地に残ったとし、その根拠として、一七八八年スペイン王室から手紙あり、「カリフォルニアで鬚のあるロシヤ人を見た。どこの国籍にしたらよいか」との問合せがあった。

これはデメンティエフおよび乗組員の子孫である。何となれば、それ以南にロシヤ人が上陸した事実がない、としている。

ペ・ヴェ・ゴローヴィンはこれに関連して、一七八九年二月二八日付、在マドリッド、ロシヤ大使の手紙には、ゴロ海軍大佐の指揮する「セント・シャルル」が、北緯四八、四九度のセント・ブラズ附近で、八部落に、一六と二〇家族、四六二人のロシヤ人が住んでいたのを確認した、と報じている。

チリコフ自身、一七四一年一月七日の海軍省への報告に、彼らは殺害されたと、書いているが、ベルヒやゴローヴィンのいう伝説、即ち、アメリカに捕われたという可能性を否定していない。

そのうちに、食料、飲料水が欠乏し、壊血病が発生した。七月二六日北緯五八度二一分に到達、アラスカに沿って航行中リ

トゥア湾に至り、聖イリヤ山脈に行き着いたが、小舟がなく調査不可能であった。七月二七日カムチャツカに引返すことに決する。困難を克服しつつ、九月四日北緯五二度二三分に至り、ウマナク島 (Ymahak) (アリューシヤンの東方群島) を認め、四日後アダク島 (Adak) (アンドレーヤノフ諸島最大の島) に至る。九月九日朝、アリューシヤン原住民が来たので船に呼び、贈物をする。現地人からも贈物を受ける。

九月二一日アリューシヤン列島の最も北にあるアッツ島 (Atty) を発見する。

欠食、寒気、苛酷な作業、壊血病などで、乗組員は病気になる、九月二〇日チリコフ自身も重病にかかった。船の指揮は航海士イ・エラーギンに委ねた。チリコフは彼の仕事振りを高く評価し、彼を海軍中尉にした。

一〇月八日アヴァチンスク湾が見えたが、一〇日の晩遅く入港、一〇月一二日「聖・パーヴェル」はペトロパヴロフスク湾に入った。

チリコフ探検隊はアメリカ北西岸を四〇〇〇ヴェルスタに亘り航行、調査し、アリューシヤン列島を発見し、始めて地図にこの地区を登載した。その功績は偉大である。この探検でロシヤ人の建造になる船の堅牢性も実証された。

一九四二年春チリコフは未だ病氣中であつたが、新たなアメリカ北西部の探検を考えていた。六月二日出発、六日後アツツ島に達したが、アツツ島は、他のアリューシャン列島の島々と同様、アメリカ北西部大陸の足場でないとの彼の判断により、帰還を命じた。六月二二日船は、聖イユリアン島の側を通過したが、正にこの時、この島に「聖ピョートル」とその乗組員がいることを知る由もなかった。七月一日チリコフはペトロパヴロフスク灣に入り。八月二四日ヤクーツクへ出発した。

チリコフはヤクーツクから、エラーギンにゴローヴィン宛の報告書を持たせ、ペテルブルグへ出立させた。それには探検の成果と共に、今後の探検に対する注意すべき点、次期探検に対する要請事項が書かれてあつた。

この価値ある報告と要請を支持したのはゴローヴィンただ一人で、元老院および海軍省当局は意外に冷淡で、関心を示さなかつた。

当時のロシヤ政府上層部には外国人が多く、ロシヤ人が切実な関心を示す極東の経済的価値というものを知らなかつたし、加えて、その時、一七四一年ロシヤとスウェーデンとの間に戦争が起り、膨大な軍事費を必要とする時であつた。また、フランス、イギリス、プロシヤとの関係も悪化していた。こういう時期に探検に国費を費やすことは、当を得ないと判断されたか

らであらう。このような政府の決定が下されるには、更に蔭での、探検は総て失敗であつたという、中傷があつたからともいわれている（ア・ボクロフスキーによれば、その中傷の作者はゲ・ゲ・スコルニャコフ・ピーサレフであるという）。

一七四三年九月二三日元老院はエリザヴェータ・ペトロヴナ（一七〇九—一七六一、女帝一七四一—一七六一、ピョートル一世の娘：訳者注）に報告書を提出し、その中で、ベーリングおよびチリコフの探検は国家に損失をもたらしたのみと述べ「……元老院はこの探検は成果があつたとは認め難い。よつて今後中止すべきものと判断する」と結論づけている。

一七四六年三月一三日チリコフはペテルブルグに帰り、海軍アカデミーの校長になつた。任期は短かつたが、成し遂げたことは多かつた。一七四六年五月までに、彼は若干の将校の協力で、カムチャツカ探検の成果を纏める意味で何枚かの地図を作成した。

アレクセイ・イリイチ・チリコフは一七四八年一〇月亡くなつた。晩年のチリコフは、その全生涯と同じく、非常な欠乏にあつた。彼の子供達は永年その借金の清算に苦しんだのである（チリコフには二人と息子と、二人の娘があつた）。

最後に、イルクーツクおよびオホーツク地方長官事務所が企図した探検につき、概要を記すことにする。それはベーリング

もチリコフも調査しなかったアメリカ北西部の一部を補足的に調査させようとするものであった。その準備の段階で、この方面への最初の探検の資料を検討する必要があった。一七四三年四月二〇日付、オホーツク地方事務所からシパンベルグ宛の指令書には、「一七三二年のグヴォズデフの探検の際の調査区域に不明の箇所があれば、それを補完するため、学問と経験を兼ね備える人物を長とする小探検隊を派遣せよ」とある。シパンベルグはこの指令に基づき、¹¹聖ガヴリール¹²のカムチャツカからチュクチ半島、更にアメリカ北西部にかけて行動した時の探検記録の整理を、ハ・ユーシン、ロディチェフ、および測地学者グヴォズデフに命じた。それは比較的短期間に作業を終了した。多くの資料を仔細に検討し、整理した結果、非常に価値の高いものができた。こうしてできた世にいうシパンベルグの地図は、実際にはユーシン、ロディチェフおよびグヴォズデフが作成したものであった。

五 第二次シベリヤ・太平洋学術探検の意義

ペーリング、チリコフ、シパンベルグを中心とする諸学術探検隊の成果は、それまで白紙に等しかったアメリカ大陸北西部の状態を明かにし、日本への北方からの航路を開発し、日本の地理的条件を明らかにし、更に、千島列島の調査を一層精密に

実施して、その附近からアメリカ大陸にかけて無秩序に散在すると思われるいたガマおよびコムパニヤの名称で呼ばれていた陸地の存在を完全に否定したことにある。

また、アルハンゲリスクからカムチャツカに至る北氷洋を探検し、その状態を解明したことも特筆すべき成果である。

探検隊はシベリヤおよび極東の経済開発の可能性を探り、探検隊自から身をもって穀物および野菜の栽培を体験し、牧畜の可能性なることを示した点が注目され、無限の豊庫といわれるこの地域開発の基礎が作られた。

この探検はまた、シベリヤおよび極東の原住民の統治方法はいかにあるべきかを教えた。特に貢租の取立てと、その見返りとして、彼らの生活の安定を如何に計るべきかを考えさせた。

極東およびシベリヤの利権を守るためにとるべき軍事の方策、そのためにカムチャツカ、千島を如何に利用すべきか、またどこに基地を作るべきかの問題を提起した。

この探検によって、シベリヤおよび極東の航路は著しく拡大された。

現地人子弟の教育もこの探検を機として始めて試みられたものであった。

第二次シベリヤ・太平洋学術探検は、その豊富な資源を開発して、シベリヤおよび極東並びに太平洋北部自体の経済発展は

もとより、ヨーロッパロシアとこれら地域の強固な経済的、文化的一体化を実現させる必要性を示した。これがため、北氷洋を利用しての太平洋への航路の開発、アムール河系の開発が必要となってくるのであるが、暫くは極東に近い地域の探検とその開発に努める必要があったのである（この探検で、北氷洋は個々の区域での調査は進められたが、通しの航路は実現しなかった。またアムールは当時清の勢力下にあった：訳者注）。

第三章 ベーリングおよびチリコフ後のアメリカおよび日本への航海

一 企業家のコマンドールおよびアリューシャン諸島への航海

企業家の太平洋への進出はベーリングおよびチリコフの探検の直後に始まった。彼らの目的はらっこの狩猟であった。ベーリングおよびチリコフの探検で、その地から良質のらっこの毛皮が多く入手できることが判明したからであった。それは極東の経済開発というものではなく、単なる商人の利益追求心のみが、彼らをしてこの危険な挙に出さしめたものであった。彼らは海の厳しさを知らず、ただ欲望のために行動し、多くの犠牲を出したが、それでも自分を滅ぼすまでやった。アメリカの歴史

家トンプキンスによれば、この時期の北太平洋探検は、ベーリングのあと、政府の手を離れて、個人の企業家の手に移ったとされているが、彼の言葉を引用すれば「当時シベリヤの全住民を構成していたこれら冒険家の手に移った」とある（Thompkins. 1945. 20p.）。

ロシア政府自身は、大きな科学および経済の課題であるこれら地域の開発に彼らの手を利用しようと企図したことは明かである。

当時イギリスは太平洋へ進出するため、大西洋からの北西航路の開発に意欲を燃やしており、またスペインその他のヨーロッパ諸国も同じ企図を持っていたのである。その当時の国際間の約束によれば、ある国の国民の発見した領土はその国のものとなったのである。

この意味からすれば、ロシア企業家のかかる行動は、大きな探検隊を組織できない当時のロシア政府にとっては、大きな意味を持っていたのである。

これら企業家の行動は大きく広がり、一七四三年から一七六四年までに四二の探検が行われ、その結果、アリューシャンおよびアラスカの多数の島が発見されたのである。

以下、そのうちの主なものをあげてみよう。

その第一期、一七四三年から一七五二年の間に一七の航海が

記録されているが、これら企業家の航海はコマンドール諸島（カムチャッカ半島中央部の東海岸にあり、ベーリング島およびメードヌイ島を主とする：訳者注）に集中されている。

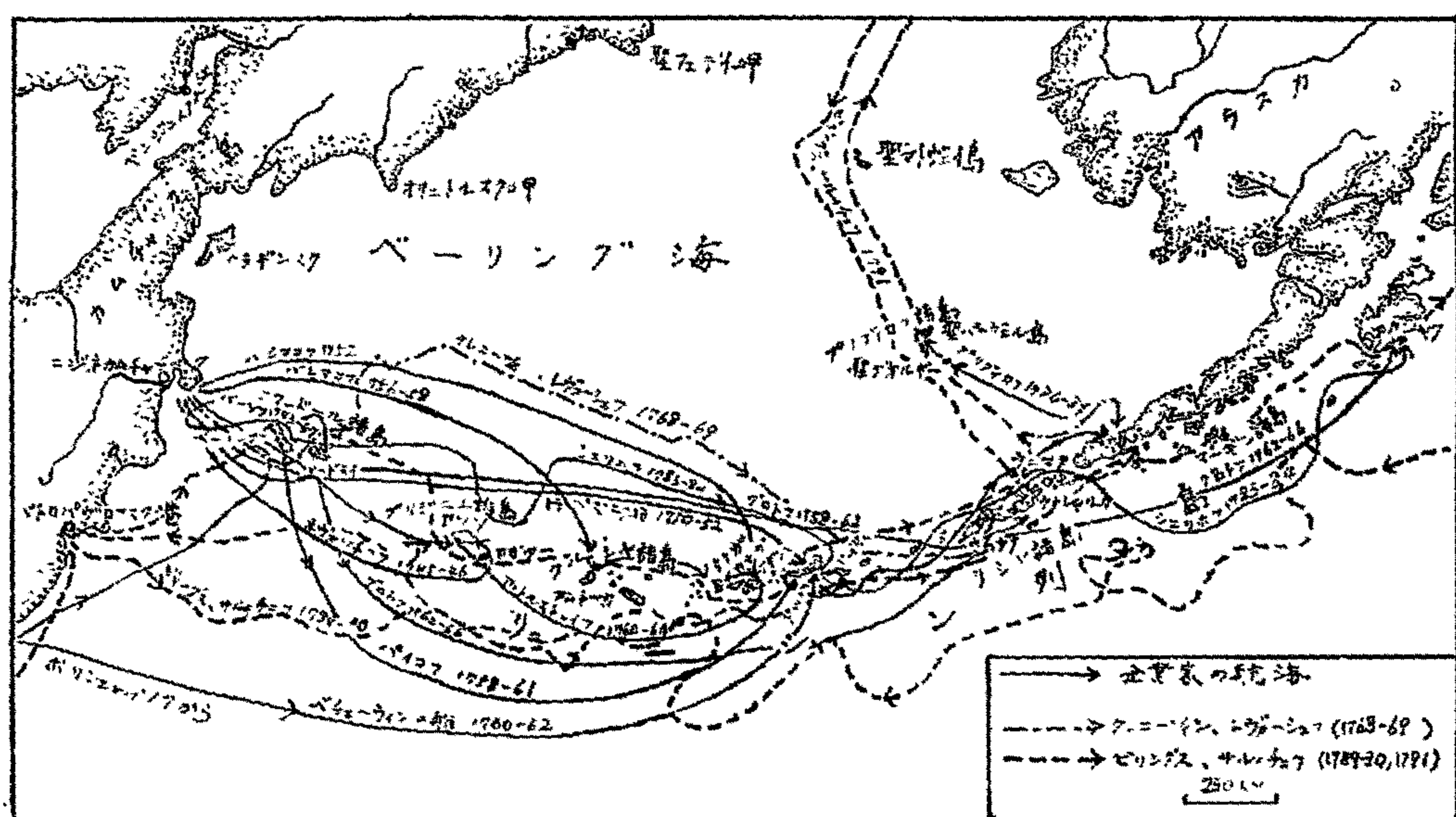
最初にコマンドール諸島に道を開いたのは、イ・エス・バーソフ軍曹で、一七二六年からヤクーツク、オホーツクおよびカムチャッカに勤務し、一七四〇年、既に、シペリヤ管領から千島、その他の島へ原住民工作に行く許可を得ていた。バーソフは三〇人から成る隊を編成して一七四三年八月一日出航して、五日後ベーリング島に打上げられ、越冬した。第一回の失敗に彼は屈せず、一七四五年同じ船で海に出、ヨーロッパ人で始めてメードヌイに上陸したが、良港なく、ベーリング島に移る。越冬中、彼らは島の測地に従事する。島は長さ二〇〇ヴェルスタ、巾は五から二五ヴェルスタあり、若し海獣の肉を食用に供すれば、多数の人間が生活することができると報じている。一七四六年一カ月猟をして七月三十一日無事カムチャッカに帰還した。獲物は、らっこ一六七〇頭、その尾一七八〇本、おっとせいい一九九〇頭、北極狐二二四〇頭であったという。これは他の者を大いに刺戟した。これに味をしめたバーソフは更に一七四七年から五二年にかけて三回の航海を実施したが、直接彼が参加したのは一回のみで、二回はバーソフと企業を組んだトラペーズニコフが参加した。バーソフは二回目の航海で、鉾脈の調

査、住民についての情報を収集した。この時彼は第二小島（メードヌイ）で天然銅塊を発見し、これをイルクーツク地方長官事務所に送った。

この銅塊は更にペテルブルグに送られ、分析の結果、一九フントの銅塊は、一七・五フントの純粹の銅と一・五フントの黒砂に分れた。そこでネルチンスク鉾山局は専門家を派遣して、一七五五年五月天然銅塊のサンプルを収集した。専門委員の長ヤーコヴレフは、報告書の中で、この地域における海獣の捕獲を制限しなければ、絶滅するであろう、と警告している。

カムチャッカ商人エヌ・トラペーズニコフ、ア・チェバエフスキーによって、一七四五年九月から一七四六年七月にかけてアガツツ（Argatzy）、アツツの両島への航海がある。彼らは沢山の獲物を積んで帰る途中嵐に会い遭難、原住民に救助されて、一七四七年七月、一三二〇頭のらっこを積んで帰る。一二人が死んだ。この航海の成果は両島の地図の作成であった。

第一期の探検で、イルクーツクの商人イエ・ユーゴフの行動は記述に価する。彼は元老院から、四隻の船で一年間の狩猟権を得た。政府への納入額は収穫の三分の一であった（従来は収穫の一〇分の一）。ユーゴフは一七五〇年一隻の船しか準備できず、その航海は不成功に終り、一七五一年自からベーリング島に渡った。一七五四年彼らは多数の獲物を積んでカムチャッ



18世紀後半期におけるロシア人のアリューシャン列島への航海

力に帰還した。ユーゴフ自身は島で亡くなった。彼の後継者はいなかった。

第二期（一七五三年～一七六四年）には二五の航海が記録された。この頃から政府は、個々の企業家の活動と、シベリヤおよび極東一帯の経済開発という政府目的とを絡ませる方法をとりはじめた。

一七五二年海軍少将ヴェ・ア・ミヤートレフ (B. A. Mat'nev) はシベリヤ県知事に任命され、同時に陸軍中將に任ぜられ、翌年再開された第二次カムチャツカ探検の指導をも命ぜられた。海軍少将の任命が、それ自体、政府の太平洋方面への関心の現われで、ミヤートレフは、シベリヤ、極東および太平洋の発見島嶼の開発計画の中で、商人、その他誰でも、鉱石や鉱脈の探索に私財を投じた者には特権を与えて、これを奨励する、と示している。また、カムチャツカおよび太平洋諸島への補給にはアムールを利用することが必要で、そのために、アムール河口に造船所を建設することを提案し、それと同時にシベリヤ全河川の利用についても建言している。また、彼は、ネルチンスク郡に農業を発達させ、そこをシベリヤの要塞や太平洋諸島の食料基地にする計画を立てた。そのためには、知事はネルチンスキーザヴォードの近くにいたなければ統治に不便であるとして、ト

ボリスクでなく、イルクーツクかネルチンスクに県都を移すのがよいと提案している。

シベリヤ開発に関するミヤートレフの案は極めて科学的で、東部シベリヤに確固たる経済基盤を築き上げなければ、ロシアは太平洋において、自己の地位を強化することはできないとの発想に基づくものであった。更にアムール河口の防衛については次のように立案している。そこには軍艦を常駐させる。少くとも、フリゲート艦三隻に砲二六ないし三四門を装備する。その他三、四隻のブリッグを建造すること。これらは、浅い川でも航行できるよう設計すること。彼は、これら輸送船および軍艦の建造責任者にエフ・イ・ソイモノフを任命し、一七五四年五月四日九項目から成る指令を与えている。

これらの諸計画のもとに、それ以後の企業家の進出には、単に狩猟だけに止まることなく、必ず他の任務、即ち、新天地の発見、調査、開発が付帶的条件としてつけられ、国家的要請が強まった。

バーホフおよびシャラウーロフの計画によるレナ河口から北氷洋を通って、コルイマ河口に至り、チュクチ半島を回ってカムチャツカに至る航行に対し、一七五五年一月知事は次のような細部に亘る指示を与えている。往路といわず復路といわず、若しチュクチ半島からカムチャツカに至る航路を発見すれ

ば、その障害の種類、位置、地形、水深、時間、天候等を記録し、何日に通過したか、その時の天候は雨か、霧か、又は雪か、嵐があったか、竜巻があったかを克明にせよ。また、珍らしい石、鉱石その他を発見せば記録し、できればサンプルを持帰ること。更に、商品を毛皮等と交換する時は、国庫の損失を考えて、自分の物と官給のものけじめをつけること、などである。

バーホフおよびシャラウーロフの科学探検の任務は、ベチエーヴィンに与えられた任務とタイアップしていた。北からでも南からでも、北氷洋からロシア北東部の海峡を通る航行の可能性を証明せよというものであった。

この指令について、イルクーツクの商人イワン・ベチエーヴィンは一七五七年一月二〇日ボリスクの知事ミヤートレフ宛に「この任務の遂行は大変なので、航海に長けた人員、大工、水兵を派遣してほしい。また一、二門の砲を準備してほしい」と請願した。ミヤートレフに代った新知事エフ・イ・ソイモノフ(Ф. И. Соимонов)は、これを聞き届け、元老院の許可を得て、国が派遣した人員の給与はベチエーヴィンが負担する条件で、認可を与えた。しかし、このように周到な準備をした探検は実施を見なかったのである。

一七五七年から六三年にかけて、ウステュージスの商人イワ

ン・バーホフおよびニキータ・シャラウーロフは、ラプテエフの後としては始めて、北氷洋から太平洋への航路の開発を試み、レナ河口から北氷洋に出、コルイマ河口に至り、更にチュクチ岬を回り、カムチャツカおよびその他の土地へ航海し、狩猟に従事した。続く数年、彼らは更に東へ進み、勇敢に困苦と欠乏に堪えて新しい土地を発見した。

一七五二年アルハンゲリスクの商人バシマコフはカムチャツカから東に向かい八個の島を発見したが、風が強く、何れの島へも上陸できず、九月二日難破した。三年後、その破片で船を作り、ニジネカムチャツクに帰還した。一七五六年から五八年、彼はその船でキイスカ (Kickska) およびタンガ (Tanga) 島を訪ずれた。

一七五八、五九年にデ・パリーコフのアツカ (Atka) およびアダク (Adak) 島の探検がある。

注目に価するのが、アンドレヤン・トルストウイフ (Андрей Тольиу) のアリューシャン列島中央部諸島の発見である。この諸島をアンドレヤン諸島という。彼は一七六〇年九月二七日、ニジネカムチャツカを出航し、東にコースをとり、ベーリング島に越冬する。一七六一年六月二四日出航、八月六日アツツ島に達する。八月二八日アダク島に至り、そこで越冬し、三年その地に止まる。この間彼はアダク、カナガ

(Kahaga) ポリシヨイ・シートキン (Большой Ситкин)、タガラク (Taralak)、アツカ、アムリヤ (Amur) の六島を調査、記録し、動物の分布を調査し、原住民を工作してロシアに忠誠を誓わしめ、貢租の納入を約束させた。その住民の数は六島で、三〇〇〇人を数えた。一七六三、六四年の二年で、らっこ一八八六頭、その尾二二〇〇、北極狐五三二頭を捕獲し、貢租として多数の毛皮を得た。一七六四年六月一四日、一行はアダク島を後に帰路についたが、途中幾度か嵐に会い、九月一七日カムチャツカに着いた時には、船は殆んど壊れていた。獲物の大部分は確保されたが、記録の多くは失われた。

元老院はソイモノフに、アナドウイル河口から、北方諸島および北アメリカ西部へ船団を送ること、およびアリューシャン列島で狩猟に従事することを命じた。そして、これら、国から出す船も、商人の船も互に協力するよう、また、自己資本の商人は、オホーツクに十分なる海獣の肉を食料として準備すること、を指示した。

一七五九年から六二年にかけてエス・ゲ・グロートフはエヌ・トラペーズニコフと協同で装備した「イユーリアン」で、アリューシャン列島の最東端リシヤ (Лисья) 諸島を発見し、二年九カ月滞在した。その間、ウナシャルカ (Унашарка) 島の住民にロシアへの忠誠を誓わしめ、貢租を集め、一七六二年五月

二六日カムチャツカに向けて出発、水と食料の不足から途中で三人を亡くし、最後の履物まで煮て食べる辛酸を嘗めて帰還した。グロートフの書いた二つの記録は地理学的にも、人種誌学的にも貴重である。これは一七六四年二月一日ベテルブルグに送られ、エカテリナ二世に報告され、その功績は高く評価されている。また、グロートフはカジャク (Kajak) 島の動植物について明らかにしているが、他の諸島と異なり、てん、い、ち、びーバー、狼、熊、猪など、アリューシャン諸島にないものが棲んでおり、柳、はんの木など大陸の樹木もあり、住民の言によれば、大陸が近いとのことであった。彼は一七六四年カジャク島から、更にリシヤ諸島に至り、二年滞在して、原住民と自由に交易を行った。これがロシア人のアメリカ北西部に進出する大きな第一歩となった。

企業家によるアリューシャン列島および北西部アメリカへの進出は、シベリヤの県知事ミヤートレフおよびソイモノフによって指導され、一見ばらばらに見えたこれら探検も、よく科学的の一貫性を以って纏められたのである。

海への進出が盛んになるにつれて、シベリヤおよび極東の経済的吸収ということが一層問題視されるようになった。

一七四〇年から六〇年にかけての企業家による諸航海は、ア

リューシヤン諸島の開発と共に幾多の地理学的発見を成し遂げ、その歴史的意義は大きい。

アリューシヤン諸島附近の航海は、従来ロシア人が使用していた舟は金具を必要とし、破損等の際の修理が困難で、やはり現地人が使用する皮舟が便利であり、より遠くへの海航には筏が便利であるとの教訓を得た。

北西太平洋への進出によって、シベリヤの農業開発が進み、ミヤートレフ知事時代にはザバイカル、ネルチンスクに造船所ができ、イルクーツク航海学校が創立された。またアムール地区の農業生産にも力を入れた。ソイモノフ知事時代になって、更にヤクーツク、カムチャツカを含めて農業生産に力を入れ、これらの地区に農民の移住が行われた。しかし、その成果は早急には上らなかった。その理由として、各要塞、探検隊に多くの食糧を必要とし、穀物の納入基準が厳しくなったため、農民に自由がなく、生産意欲を低下させたことにある、と後世の歴史家は分析している。

一七六三年一二月二三元老院はヤクーツク、オホーツク、カムチャツクの地方長官事務所に対し、ソイモノフの指示する穀物栽培に力を入れるよう命令を出した。その実行責任者であるヤクーツクの地方長官チェレドフには千留^{ルーツ}の器具および種子購入代が支給された。また造船の発達と共に、麻、亜麻の需要

が増大し、従来欧露から来ていたものを、現地調達に切替えるべく、トボリスクに一五三デシャティーナ（約一六七ヘクタール：訳者注）の麻の植付けを行なった。

この時代にはまた地質調査も広く行われるようになり、既設の鉱山は拡張され、また幾つかの新設もみえた。ダウリヤ（テムール流域：訳者注）銀鉱の長スードロフ陸軍少将の資料によれば、一七六三年アルゲン（愛琿）精銀工場には一二爐、新設のダウリヤ精銀工場（四〇ウェルスタ、アルグンの西）には六爐があった。彼の提案によれば、アルグン川の水力を利用すれば、現在の馬力の利用よりは数倍の能率が上り、年産千ブード以上の銀の精練が可能であるとしている。彼の資料には、更にダウリヤの地図が付され、銀、銅、鉛、金の採集統計表がついており、その他工場の技術工程、人的組織などが詳細に記入されている。また、人材の養成のため学校を作り、広く鉱山、工場の子弟を教育してゆく必要性を説いている。

こうして人々はシベリヤの開発に力を入れていった。

ニ クレニーツィンおよびレヴァーシェフの探検

探検の目的とその準備 企業家による地理的発見は、ロシア政府に大きな関心を持たせ、既に一七五三年には、第二次カム

チャツカ探検が再開された。

ソイモノフは、発見された千島、アリューシャン諸島およびアメリカ北西部の開発は、シベリヤ、極東の開発があつて始めてなされるものと判断し、一七六〇年政府探検隊を太平洋に送ることを元老院に提案した。一七六四年五月四日探検隊編成に関する女帝の告示が發布され、その長にはペ・カ・クレニーツィン（П. К. Креницын）が任命された。

一〇日後の五月一四日更に北氷洋からカムチャツカに至る航路開発、捕鯨、その他の海獣の狩猟、漁撈に従事する名目で、その夏の中に探検隊を派遣するという女帝の秘密告示が出された。この告示の立案者はエム・ヴェ・ロモノーソフ（М. В. Ломоносов）であるが、彼は、北氷洋は広く、ロシア人の譽れを倍加させる可能性を秘めていると書いている。

この探検の長には海軍大佐ヴェ・ヤ・チチャーゴフが任命され、ロシア科学アカデミーも参画して、海洋天文学関係を担当することになっていた。チチャーゴフ探検隊は、太平洋北部で、カムチャツカ方面から送られる探検隊と合流することになっていた。この計画にはロモノーソフ、ソイモノフ、チチエーリンが参画し、海軍省がその元締めであったが、固く秘密が保持され、元老院さえ知らされていなかった。しかし、この探検は実現しなかった。

東方海洋の新発見諸島への探検には海軍中佐ビョートル・クジミン・クレニーツインが前記の如く任命されたが、その補佐官として海軍大尉ミハイル・ドゥミートリエヴィチ・レヴァーシェフが任命された。クレニーツインの出生は明かでないが、一七四二年海軍アカデミーに入学、一七四五年から五四年までバルチック艦隊に勤務、一七五五年バルチック海の調査に参加、一七五六年アルハンゲリスクからクロンシュタットへの航海に参加し、一七五七年から六〇年「コール」の艦長、砲艦「ユピーテル」(ジュピター)の艦長としてコリベルグの作戦に参加してコリベルグの砲撃を指揮し、敵前上陸を成功させ、この要塞占領の因を作った。レヴァーシェフはクレニーツインより一〇歳位若く、同じくコリベルグ作戦と、アルハンゲリスクからクロンシュタットへの航海に参加した。

企業家の成果を確実にするため、今回の探検に航海術に長けた人々が選ばれた。この探検隊の目的は極秘にされ、名目的には、カマおよびベーラヤ川の森林の調査、となっていた。しかし、実際には、北太平洋で企業家の船に予め立てられた計画に基づき分乗し、その航行の安全を確保すると共に、細部に亘る地図の作成と日誌の記帳を義務づけた。水兵には企業家の狩猟について干渉しないよう指示された。また政府の船にも若干の企業家側の人員も乗組ませ、船の停泊中狩猟に従事させるよう

にした。しかし、そのための無駄な停泊は禁止された。クレニーツインにはその他、トボリスクから出航地カムチャツカに至る地域の動植物の分布およびその差異、各現地諸民族に関する各種観察日誌の記載が命ぜられた。出発に際して、ペーリングおよびチリコフの日誌のコピーが与えられ、最後に、日誌は訂正しないよう、その時々の日誌をそのままにしておくことが指示された。また、北氷洋を通じてカムチャツカへ南下する予定のチチャーゴフ探検隊と太平洋北部で合流した時の信号等についても指示された。

かくして、永年の考えであった北氷洋を一気に通り、カムチャツカに出る航路開発の計画は、今回、より綿密に準備されたのである。

一九六四年三月五日、クレニーツインは一行と共に、ペテルブルグを出発して、トボリスクに着いた。そこで、カムチャツカには商人の船がなく、船の修理はできているものの、装備に不足品があることを知り、それをトボリスクで調達することにし、一行をレナ停泊所に先行させ、それを用意した後で、自分からそこへ合流した。遅くも一七六五年の夏までに準備して、その年のうちに、ペーリング島に行こうと考えていた。一七六五年三月探検隊はオホーツクに向った。その途中クレニーツインは予ての指示通り、東西シベリヤに関する多くの資料を収集

した。彼はトムスク、エニセイスク、イルクーツク、レナ停泊所というコースをとっている。

最初の試練 一七六六年四隻の船でオホーツクからカムチャツカに向う。間もなく嵐のためちりぢりになり、別個に目的地へ行くことになった。一〇月一七日北緯五三度四六分で、**聖エカテリーナ**は陸地を発見、それはカムチャツカ西岸であった。一〇月二四日**ボリシエレッツク**湾に入ったが、二四日夜の嵐で船は**ボリシエレッツク**北方二五ヴェルスタの海岸の浅瀬に打上げられ、こうして一番大きな船を失うことになった。**聖パーヴェル**も**ボリシエレッツク**北方八ヴェルスタに打上げられ、**聖ガブリエル**はやはり岸に打上げられた。乗組員は救われた。もう一隻の帆船**聖パーヴェル**は更に苦難に遭遇した。強風でカムチャツカ南端と千島第一島の間を太平洋に流され、一月二一日アヴァチンスク湾に入ろうとした時錨綱が切れ、更に漂流し、一七六七年一月八日千島第七島に打上げられ、壊れた。乗組員四三人中一三人が生残ったのみであった。猟に来ていた原住民に救われて八月やっと**ボリシエレッツク**に帰ることができた。

チリコフの観察によれば一〇、十一月のオホーツク海は波が荒く、霧が濃いため視界が悪く、航海は危険であると記されて

おり、企業家達もこれを裏付けているのに、この先人の教訓を無視したことにより、厳しく自然の罰を受けたのである。

一七六七年一月二〇日エス・ゲ・グロートフおよび航海士イ・エム・ソロヴィヨフが**ボリシエレッツク**に來た。この経験者兩名を加えて航海に出ることになる。

一七六七年八月一七日**聖パーヴェル**に**レヴァーシェフ**、**聖ガブリエル**に**クレニーツィン**が指揮官となり**ボリシエレッツク**を出航、九月六日ニジネカムチャツクに到着、自分の未熟な経験と企業家達の意見を綜合して**クレニーツィン**は、**アリューシャン**の探検を翌年に延期した。その冬から翌年春にかけて船の交換、その他の準備を進める。次の探検には**グロートフ**、**アンフィラートフ**、**ベズルコフ**など一〇名の企業家を乗せて出発することになる。

クレニーツィンおよび**レヴァーシェフ**の**アラスカ沿岸**の航行 一七六八年七月二一日帆船**聖エカテリーナ**には**クレニーツィン**を長として七二名、**聖パーヴェル**には**レヴァーシェフ**を長として六五名が乗組み、カムチャツカ河口を出航、**コマンドル**諸島の**ベーリング島**と**メードヌイ島**の間を通過して東へ向った。八月一日、強い嵐のため二隻は離れる。**聖エカテリーナ**は、八月一四日**シグアム** (CITYAM) 島と**アムクトウ**

(AMYKTY) 島を見ながら、八月二〇日ウムナク (YMHAK) 島とウナラシカ島の間の海峡に入る。二日後、聖パーヴェルもそこへ合流する。八月二三日北西に進路をとり、その後北東に向きを変え、八月三〇日ウニマク島とアラスカの海峡に入る。二日間アラスカを調査して、越冬場所を探す。二隻はまた別れたが、翌春合流する。

クレニーツインはウニマク島の東海岸に越冬した。この湾はクレニーツイン湾と命名されている (アメリカ名では聖エカテリーナ湾)。しかし、ここは冬期風が強く、寒気厳しく、越冬には不適当な場所であった。そのため、物資の欠乏から一七六九年一月には、七二名中二〇名が壊血病に罹り、四月には少しでも元気な者は一二名となり、この越冬では三六名が亡くなった。その中には、五月四日四〇歳で亡くなった最初の発見者グロートフも含まれていた。この悪条件の中で、アメリカ人「グループ」が来て食料をくれた。彼らはお互に不信感があつて、一定の場所に品物を置き合つて、互にそれ取りに行くといった状態であつた。

一七六九年五月一〇日レヴァーシェフの「聖パーヴェル」から、原住民が小舟で連絡に来た。レヴァーシェフはウナラシカ島の現在のレヴァーシェフ湾に越冬していた。一七六九年六月六日ウニマク島とアラスカの海峡に「聖パーヴェル」が現われ

「聖エカテリーナ」は救われる形となつた。

レヴァーシェフの方も越冬はつらく、三人が死に、二人が行方不明になつた。越冬中レヴァーシェフはヨーロッパ人に接したことのないアリューシャン原住民の生活調査を実施したが、それには一夫多妻制から、アラスカからの人質の略奪等、詳細を極め、且つ興味のあるものである。

一七六九年六月二三日両船はカムチャツカに向けて出発、三日後には、またちりちりになり、聖パーヴェルはアリューシャンの島々を観察しつつ、ベーリング諸島を通過して、八月二四日レヴァーシェフはニジネカムチャツカに帰還した。クレニーツインは四週間前に帰着していた。

一七六九年から七〇年の冬には、彼らは受取るべき俸給が支給されず、クレニーツインが土地の人から買った魚は五倍も高く、隊員達は漁撈に従事した。兵達は一九樽の魚を塩蔵した。一七七〇年始めまでにオホーツクへの帰還準備が完了した。七月四日カムチャツカの西岸へボートで航行したクレニーツインはボートの転覆により、他の一人と共に亡くなった。そのあとを受けたレヴァーシェフは、七月八日ニジネカムチャツクを後にして、八月二二日オホーツクに帰還した。レヴァーシェフは船を返納し、ペテルブルグに向つたが、トボリスクでチェーリンに呼び止められ、報告を求められた。

一七七一年一月二二日レヴァーシェフはペテルブルグに帰った。間もなく彼は海軍大佐となり、翌年、新建造艦「ボリスとグレブ」の艦長となり、アルハンゲリ斯克からクロンシュタットへの航海後、一七七三年、病気の故をもって予備役となる。

クレニーツィンおよびレヴァーシェフの探検の意義 評価は二つある。探検は不成功であったとするもの。それは、最初の綿密詳細な計画に比較しての評価であり、後者は、その客観的成果に対しての評価である。この観点に立てば、二人の探検は、アリューシャン列島の組織的調査の始めをなすもので、粗悪な器具を使つての経度の測定を行ったこと、列島の全般的配置について、始めてとしては、かなり高い水準にあること、などがあげられる。ドイツの学者ゲルヴァルドは、アラスカ沿岸を小舟で始めて行き、一四回もの海航を成し遂げたことは、第一人者として高く評価されるべきである、と評している。

その他、一七六九年一月一五日、二月二〇日、三月一五日のクレニーツィンによるアリューシャンの地震観測、レヴァーシェフのアリューシャン原住民の人種誌学的資料も貴重なものである。

一七六八、六九年に、クレニーツィンが作成した、オホーツクからアラスカまでのメルカトール式地図は、ベーリング、チ

リコフのものより数段内容が充実している。一七七一年海軍省当局は、ア・エヌ・ナガーエフに、新しい総地図の作成を命じたが、それはベーリング、チリコフ、クレニーツィン、レヴァーシェフの資料を合せて作ったものである。特に最後の資料なしではできなかった。また、一七七七年ヴェ・クラシリニコフがクレニーツィンの資料によりアリューシャン列島の地図を作成したが、それは、その後アリューシャンへ行く人々の道標となった。

如何なる立派な探検でも、全部一度に成し遂げることはできない。要は幾度かの積重ねにある。その意味において、この探検は価値あるものである。

クレニーツィンおよびレヴァーシェフの跡を辿って、企業家や商人が多くその地へ行ったが、彼らの船には規則として、艦隊所属の経験ある航海士や水兵が乗組んだ。こうして地図および調査の記述は改善された。

三 地理学および天文学探検

北東ロシアの地理学および天文学探検は一七八五年八月八日決定され、その隊長に、クックの第三回航海に見習水夫として参加したイギリス人ヨージフ・ビリングス(Йо́сиф Би́ллинґс)

が任命され、補佐官には、同じくイギリス人エル・エル・ガル (P. P. I'art) 海軍中尉 (後のロシアの海軍大将)、ゲ・ア・サル イチエフ (Г. А. Салухев) およびハ・テ・ベーリング (Х. Т. Беринг) 海軍中尉であった。

探検隊の任務は、アジアの北東端チュクチ半島を回って、北氷洋から太平洋へ出られる可能性を証明するにあった。何となれば、イギリスの探検家クラークは、多くの学者のアジアとアメリカの間に海峡があるとの意見に反して、ジェームス・クックの航海の後で、北西または北東通路の探索は無意味であるとの結論を下したことに對して、大きな意義があったのである。

予定航路はコルイマ川東河口から、シベリヤの東端の岬に至り、そこからアラスカ西海岸の探索であった。

探検隊に對しては天文学、測地学、気象学に関する器材が支給された。

この探検もまた、嚴重なる秘密下におかれていた。

探検隊の編成には八名の医師団、画家などが入った。隊員に大きな褒賞が約束され、期限内進級も約束された。ベリングスは直ちに海軍大尉に任ぜられ、コルイマ河口に至れば海軍少佐、聖イリヤ岬に至れば海軍大佐を名乗ってよいとされた。他の乗組員もコルイマ河口に到着すれば一階級上り、アラスカに到着すれば次の階級が約束された。

一七八五年九月隊は陸路ペテルブルグを出発し、サルイチェフは翌年三月二七日オホーツクに着き、直ちに船の建造にかかった。七月ベリングス、続いてガルが到着した。一七八六年八月一日サルイチェフはヴェルフネコルイムスクへ出発、ベリングスがこれに続いた。それまでに「ヤサーシナ」(Ясашина) および「パラス」(Палас) の二隻の船が建造され、前者をサルイチェフ、後者をベリングスが指揮した。

六月二四日約束通り、ベリングスは海軍小佐を名乗り、コルイマ河口を出て北氷洋に入った。ベリングスは流水を逃れて、最も岸に近く航路をとって進み、大バラノフ岩と小バラノフ岩の間に觀測所を設けた。船は北に向って進んだが、濃霧 (視界二サージェン) で進めず、また大小の氷塊が果しなく続いて海を塞ぎ、それに当る波は凄まじいばかりであった。協議の結果、七月二六日コルイマ河口に帰った。後世の学者は、ある者はベリングスのこの挙を任務の回避であると批判し、またある者は、止むを得ない措置であったとしている。

ベリングスの行動の緩慢さが不満であったエカテリーナ二世は、一七八七年七月二〇日ベリングス探検隊の召換命令を出した。当時イルクーツクおよびコルイヴァンスク總督のイ・ア・ピリはこの大切な探検を中断させまいと、八月八日その告示に對する返書を送った。告示は遅れて翌年の八月五日に入手された。

そのうちに明かになったことは、イギリスの費用で装備されたスウェーデンの船メルクーリー（マーキュリー）が、イギリス海軍將校コックス指揮の下、カムチャツカ方面に現われた、ということであった。当時ロシアの主力は黒海問題の解決と、バルチック海で得た勢力の固定化に集中されており、その間隙をつかれた形であった。このような条件下にこそ、ロシアは極東の利益を守るに十分な力のあることを示す必要があったのである。

一七八九年六月始め、プリングスはオホーツクに来了。七月一〇日、スラーヴァ・ロシーは竣工し、ノドーブロエ・ナメレーニエはでき上りつつあった。

八月二七日、スラーヴァ・ロシーはノドーブロエ・ナメレーニエを曳行してオホーツクを出航したが嵐のため後者は殆んど壊れ、スラーヴァ・ロシーは一〇月三日アヴァチンスク湾に入り越冬した。途中、北緯五六度五五分に島を発見、これを聖ヨーマイ（Св. Юма）島（オホーツク海中央部…訳者注）と命名する。

一七九〇年五月九日、スラーヴァ・ロシーはプリングス指揮下に出航し、六月始めにアリュウシヤンのウナラシカ島に着く。

彼らが出発した後、コックスの船メルクーリーがアメリカ北

西岸を行動しているとの情報を手にした総督ピリは、万一に備えて、カムチャツカ方面の防衛を命じた。

探検隊は七日間ウナラシカに停泊して調査に従事し、六月一七日シユマーギン（Шумаргин）諸島に向う。この広域に亘る、未調査の地区の探検には、男女二人の原住民が協力した。この七島は、海底岩礁が多く、その間の船の航行は不可能であり、島は山岳地帯で、禿山である。六月二五日セミディ（Семиди）諸島に近づき調査を実施、その他の島々を調査し、七月六日カジヤクを出発、七月一二日アメリカ沿岸に到達、現地人の案内でその島の部落に行く。七月一九日、海軍当局が示した地点通過が所望の数に達したので、プリングスは海軍大佐を宣言した。

秋の訪れと共に、カムチャツカへの帰還と決まる。サルイチエフの手記によれば、「若し、カジヤクへ食料を送ってくれば、我々はカムチャツカに帰る必要はなく、冬も立派に過せるし、観測も十分出来る」と述べている。こうして一〇月一三日アヴァチンスク湾に帰着した。

再度の航行 ペトロパウロフスク・カムチャツキーに越冬した探検隊は、一七九一年五月航海準備を完了、五月一九日、スラーヴァ・ロシーはアリュウシヤン列島に向って出航し

た。ペーリング島でエル・エル・ガルの船と落合う約束であったが、現われなかったので、単独で航行、二五日にはアリューシヤンのウナラシカ島に到着、テントを張って、海洋天文学観測に従事する。その後北西に進路をとり、プリブイロフ島、セントローレンス島を訪れて、八月四日ローレンス湾に入る。丁度そこへ、一七八七年ビリングスがチュクチ半島に派遣してあった通訳エヌ・ダウールキンおよびコサツク、イ・コベレフが合流する。与えられた任務遂行のため、そこからチュクチ半島の海岸線を調査しながら、常とは逆に、南からニジネコルイマに行く計画を立てた。そこでビリングスは船の指揮をサルイチエフに任せ、海洋の探検を継続させることにした。この挙に対し、後世の一部には、海より陸に行く方を選んだ、と非難するむきもあるが、当時アリューシヤンにおける企業家たちの原住民に対する取扱いが苛酷で、それを正すことと、更に観測を継続する必要性をビリングスは説明している。

八月一四日サルイチエフはウナシヤルカ島に到着した。そこへガルの一隊も到着し、ガルが上級であるため、船の指揮を交替する。一七九二年二、三月サルイチエフは隊員を数班に分け、原住民の援助のもと、皮舟を用いて諸島およびアラスカ南西端の調査に当った。一七九二年五月一六日二隻はカムチャツカに向け帰路につき、六月一九日アヴァチンスク湾に帰る。サ

ルイチエフは一七九三年七月一四日ペテルブルグへ向けてオホーツクを出発し、翌年四月到着した。

一方チュクチ半島のビリングスは、チュクチ人が毎年海峡を渡ってアラスカ原住民に攻撃をかけ、男を殺し、子女、獲物を略奪するのを見聞した。彼は、チュクチ人をロシヤに忠誠を誓わせなければ、この行動はおさまらぬと判断した。しかし、彼の地は森林が多く動物が繁殖している等生活条件がよく、チュクチ人にすれば、一面、彼ら自身の生活手段でもあったのである。ビリングスは奴隷になっている一人の「アメリカ婦人」を見た。彼はそれを現地人から買い求めた（後に子供と共にヤクーツクに移される）。先にダウールキンを派遣してあったのも原住民工作のためであった。

ビリングスの探検は、一八世紀におけるロシヤ探検隊の総仕上げともいべきもので、一八〇三年にサルイチエフの出版した地図帳にはサルイチエフ、ビリングス、ギーレフ、ブロンニコフ、フジャコフの手になる資料が載せられている。また画家ルカ・ヴォローニンの筆になるアリューシヤン列島、アラスカ、チュクチの河川、湾、島嶼、海岸、海峡の絵図、住民の生活様式などあらゆるものが含まれている。

特に価値のあるものはメルカトール図法による地図で、シベ

リヤ北西部、北氷洋、アメリカの東部および北西部海岸の地図である。それにはプリンスオブウエルス岬からブリストール湾に至る以前になかった地域が含まれている。

この探検はまた、アリューシャン列島、アラスカ、チュクチの豊富な地理学的、人種誌学的、言語学的資料を提供した。それはピリングスの日誌に正確、かつ克明に記載されている。

大きな前進であった。

四 カムチャツカおよびアラスカへの航路開拓

一八三九年一月二一日ペテルブルグにおいて、海軍中将イ・エフ・クルーゼンシテルの海軍生活五〇周年記念祝賀会が盛大に催され、各界の名士が交々立って祝辞を述べた。彼はロシア帝国最初の世界一周航海を成し遂げた英雄として、不滅の榮譽に輝いたのである。

しかし、それを溯る一世紀前、一八世紀の前半、既に世界一周の関心は非常に高く、ベーリングおよびチリコフの探検に平行して、一七三二年クロンシュタットから北氷洋を通りカムチャツカに出るグローヴィン以下の計画があり、二三年後更にロモノソフの計画があった。しかしこれらは何れも実現しなかったのである。

ポルボヤーリノフのブラジルおよびインドへの航海 一七六三年始め、駐インド大使ヴォロンツォーフは、東インドコンパニーが船をボンベイに向けるのを知り、少尉候補生ポルボヤーリノフおよび兵曹コズリヤニーノフを同行させる許可を得た。四月二五日船はブラジルに向け出航した。ポルボヤーリノフは赤道通過時の航行に関することを詳細に調査している。七月二日セバスチャン市に停泊、ブラジルで彼は地下資源、商業、アフリカからの奴隷、動物について調査し、克明に書いている。

半年後の一二月二五日ボンベイ着、彼の日誌にはボンベイの富と貧について人々の生活が書かれ、動植物のほか気候についても詳しく記載されている。一七六四年二月二四日ボンベイを出航、アフリカ南端、希望峰を通過して一〇月三〇日デイル市（テームズ河口）に帰着する。彼が作成したイギリスからブラジルに至る航路図、ブラジルからボンベイ、ボンベイから希望峰、イギリスに至る航路図は、一九世紀前半広くロシアで使われた。ポルボヤーリノフは帰還後一五年間艦隊に勤務し、一七八〇年海軍大佐で退役した。

一七六四年ロシア政府はチチャーゴフ探検隊を、アルハンゲリスクから北東部海峡を通過して、インドへ行かせることを決めた。この年はクレニーツィンおよびレヴァーシェフの探検に

平行して、二隊を上記コースでクロンシタットから出発させようとした。更に、一七八一年海軍次官イ・ゲ・チエルヌイシェフが自己の発案に基づいて、アメリカ北西岸に探検隊を送ろうと試みた。しかし、それは何れも実現しなかった。前者は露土戦争が原因であり、後者は技術的な問題であった。

世界一週の旅について、オーストリー人ボルツの提案あり、また一七八六年にはオホーツク在往将校の代表としてビリングスの提案もあったが、しかし、それはムロフスキーを世界一周に派遣する計画があつて、取止めになっている。

一七七〇年代に入り、北部太平洋に外国の勢力が伸びて、ロシア政府は一層北辺を固めなければならなくなった。

特に、一七七八年クック探検隊がアラスカに来て、北西通路を開発する目的があつたのを警戒した。

更に、地方政權を驚かしたのは一七七九年四月一八日、アヴァチンスク湾に二隻のイギリス船が来たことである。指揮官はクラーク海軍大佐であつた。カムチャツカ州長エム・カ・ベムは、後任のヴェ・シマーレフにポストを譲り、オホーツクに引揚げようとしていた矢先であつた。急ぎボリシェツクからペトロパヴロフスクに帰り、陣地の強化を指示した。クラークは彼に「サンドヴィチ諸島発見後、隊は北西アメリカへ向つた。ウナラシカを訪れ、ベーリング海峡を北緯七〇度四四分まで北

上したが、氷に閉され進めず、再度サンドヴィチ諸島へコースをとり、一七七九年二月一四日ハワイ島調査中、ジエームス・クックが原住民に殺害された」と語つた。

イギリス人は食料不足で困っていた。ベムは二〇頭の牛と二五〇プードのライ麦粉を与えた。六月五日イギリス人はアヴァチンスク湾を後にした。後、イギリス政府はその援助に感謝してベムには銀メダル、またシマーレフにはクックの置時計を贈つた。

この事件により、一七七九年エカテリーナ二世は、イルクーツク総督に命じて、カムチャツカの防備を強化させた。

その後も、北東太平洋における西欧諸国の活動は活発になり、一七七九年二月には、スペイン船二隻が、北西太平洋探検のため来航して、聖イリヤ岬の北方まで行動し、一月に去つた。また、一七八五年から八八年までイギリス船がアメリカ北西部を行動し、更に、一七八七年にはフランスの探検隊ラベルズが極東水域に現われている。

一七八八年スペイン船がアリエーション諸島（カジャク、ウナシヤルカおよびウニマク）に現われ、現地人が移住村落設置のためにロシアの軍艦の来るのを待っていることを知るや、直ちに新スペイン（メキシコ）の副王に報告した。副王は命令を発し、直ちに軍艦をヌツカ島に送り、これを占領し、その占領

事実をロシア側に認めさせるよう指示した。同時にスペイン政府はロシア政府に対して、アメリカのスペイン領をロシアが植民地化するのを中止するよう申入れてきた。その土地は未だ嘗つて一度もスペイン領であったことはなかったのである。しかし、エカテリーナ二世はなぜか直答を避けたのである。

ムロフスキーの世界一周探検隊の目的とその準備 一七八六年エカテリーナ二世の個人秘書ペ・ペ・ソイモノフは商務省に「東方海洋における貿易と狩猟」という意見書を送り、その中で、イギリスは支那にその勢力を固定しようとし、日本との貿易関係の樹立に努力し、更にロシアが発見した土地を占領しようとしている。この土地の権益を護り、狩猟を保護するため太平洋へ三、四隻のフリゲート艦を送る必要あり、と提案している。この提案は上層部の支持を受け、一七八六年二月二日の告示をもって、バルチック海から、クックの船の程度に武装した軍艦二隻、および武装艇二隻を派遣することになった。その長には二九歳の海軍将校ゲ・エム・ムロフスキーが任ぜられた。

この探検は前記の如き主要目的のほか、広汎な科学調査任務が課せられ、科学アカデミー会員ベ・エス・パラスが、その計画作成に任命され、ロシア艦隊の歴史学者グループのチーフと

なった。

航路はクロンシタットから北海に出て、アフリカ南端を通り、ゾンド海峡またはオーストラリア沿岸を通って二隊に分れ、一隊はアメリカ北西部に向い、外国の占領下でない諸島をロシアの領土に組入れること、第二隊は千島列島、樺太およびアムール河口の探検に向い、第五船はカムチャツカのペトロパヴロフス港に航行することに定められた。

そのうえクックの資料まで揃えて万全の準備を整えたが、出発命令は下りなかった。露土戦争が始まり一七八七年一〇月二八日エカテリーナ二世の告示により、探検は中止になり、船は乗組員と共に地中海へ向うよう指示された。一七八八年六月対スウェーデン戦争が起り、地中海への転進は撤回され、対スウェーデン戦争に参加した。ムロフスキーは「ムスチスラフ」の艦長として戦い、七月一五日の海戦において壮烈なる戦死をとげた。彼の最後の言葉は「艦を敵に渡すな！」であったという（ロシア艦隊史資料、七巻、五五一、五五二頁）。

早くから育まれた世界一周の夢は一八〇三年から一八〇六年にかけて、ムロフスキーの教え子クルーゼンテールンがリシヤンスキーと共に成し遂げた。ムロフスキー指揮の「ムスチスラフ」に一緒に乗組んでいた彼は早くから、この若い指揮官の感

化を受け、夙に大望を抱いていたのである。

五 日本への最初の代表派遣

レベジェフ・ラストチキンЛевжеフъ-Ласточкинの探検 一八世紀の当初から、ロシアは日本との貿易関係樹立に憚みない努力を続けて来た。最初の日本への訪問で、日本人が何を求めているか、そのためには、何を与え、何を日本人から得られるかを研究してあり、その貿易の可能性を検討してきた。

一八世紀七〇～八〇年代に太平洋北西部の状況は変化を遂げた。アメリカ北西部沿岸、カムチャツカ、日本、支那にはイギリス、フランス、スペイン、後れてアメリカの船が現われ始めた。イギリスの産業革命、アメリカの独立、フランス革命は、これらの国々の資本主義の発展を促進し、それに伴って海外市場の拡張も活発になり、そのため、イギリスとフランスの関係は植民地をめぐる尖鋭化してきた。太平洋北東部は、これらの植民地を持つ国々の競走の場となった。アメリカ独立によって植民地主義に大きな亀裂を生じたイギリスは特に積極的であった。この機においてロシアも、日本との関係樹立に取組む必要があった。

ロシアの東西の接点に当るイルクーツクはシベリヤの政治、

経済、文化の中心となり、ここで千島、アラスカ、アメリカへの探検計画が練られていた。一八世紀七〇年代のイルクーツクは人口二万を擁し、各種学校、図書館、自然博物館、劇場などがあった。

日本への航行もここで準備された。イルクーツクの総督ア・イ・ブリルА.И.Брильはカムチャツカの地方長官ベムに命じて航行志願者を探させた。その結果、ヤクーツクの商人ペ・エス・レベジェフ・ラストチキンЛевжефъ-Ласточкинが同意し、その補佐として商人ゲ・イ・シェリホフГ.И.Шериданが得られた。探検隊長として、シベリヤの貴族イワン・アンティープンИванъ-Антипинъが任命された。彼は航海術に長け、日本語をよくした。これに対する準備が整えられた。この目的達成のため、南部千島に農業および牧畜に適する土地の選定も予定に入れられた。

一七七五年六月二四日アヴァチンスク湾を出航した。一七七六年秋、船はウルツプ島附近で遭難し、彼らは皮舟でカムチャツカに帰った。

この損害にもかかわらず、レベジェフ・ラストチキンЛевжефъ-Ласточкинは二年後、政府から貸与されたブリツグ聖ナタリヤに乗って三年の期限で出発した。この時シェリホフは辞退し、アンティープンАнтипинъは前と同じく、探検の指揮をとった。通訳としてイルクーツクの商人デ・ヤ・シャバーリンД.Я.Шабаринъが参加した。

「聖ナタリヤ」は一七七七年九月オホーツクをウルップ島に向けて出航した。一七七八年五月シャバーリンは三隻の皮舟でエトロフに向い、そこでアイヌ人と出合う。アイヌは槍と刀を振りかざして、岸に沿って叫びながら舟を追って来た。三二人ものアイヌの女が金切声をあげて男達の後に続いた。怖わかったと書いている。

そこからシャバーリンは第二島マツマイ（北海道のこと：訳者注）に向う決心をした。千島の第二〇島クナシリに一時停泊する。その千島人の言によれば、斧、刀、槍、冬の着物などは日本人が彼らに補給しているとのことであった。千島人自身は白楊の内皮で粗布を作り、弓矢、木片で作った甲冑、木製の兜を用いていた。魚および米は日本から運んできていた。彼らの話によれば、クナシリの北方に彼らの言葉でコロスカ（Короска）^{（1）}とい土地あり、そこには多数の人が住み、その土地の言葉で話すということであった。日本人はそれをカラフト（Карафто）と呼ぶとのことであった。

一七七八年七月シャバーリンは第二島に至り、マツマイの北東厚岸（Аккеч）の町に入った。湾には日本の船が停泊していた。ロシア人と日本人は贈物を交換した。しかし、貿易のことになると、日本人は上司の許可がなければと断ったが、その場で、翌年七月クナシリを訪れるようシャバーリンに奨めた。

一七七八年八月二九日船はオホーツクに帰還した。

日本人との再会の機を失しないため、レベジェフ・ラストチキン^{（2）}は再度の航海に備えた。船には羅紗^{（3）}、天鵝絨^{（4）}、地図、粉、バター、砂糖、塩漬肉を積んだ。ウルップ島に越冬し、一七七九年春、七隻の小舟に乗って厚岸に向い、六月二四日ノツコモ（Ноткомо）湾に入った。そこは北海道の北東部に当り、厚岸に近いところであった。そこに住む千島人から貢租を取立てた。日本人はいなかった。三週間後アンティープンは手紙を受取った。それには天氣がよくなれば日本人が来るから、去らずにいてくれというものであった。三週間経ったが日本人が現われなかった。八月二一日船は南へ向い、四日後厚岸湾に入った。そこには日本の船があった。

「聖ナタリヤ」は礼砲を撃って、日本の旗に敬意を表した。土地の日本人の話によれば、日本人は厚岸で千島人と交易し、布、麦、煙草を売り、彼らから脂油、干鰯、蟹などを買っているとのことであった。日本人は交易の希望を直接表現せず、更に翌年国後島に船を送るよう提案した。九月五日松前から二人の日本人官吏が来た。彼らはアンティープンに、ロシア人が松前で貿易することを禁ずると伝えた。外国貿易は長崎港に限定され、如何に頼んでも、それ以外の場所では許されないから、ここで許可を得ることはできないし、将来、ここへ来ることは

無意味であるというものであった。

外見では日本人はロシア人に対し、関心と好意を示し、贈物をくれた。アンテイーピンとシャバーリンも借りは作らなかった。

間もなく船はウルップ島に帰った。越冬の予定であったが、急に島に地震が起り、大きいのは一五分も続いた。津波は大きく、船は打砕かれ、地震後岸から四〇〇米も陸地に上っていた。アンテイーピンは一隻の小舟に一四人を乗せ救助を求めにカムチャツカに向った。シャバーリンは残り五二人とウルップ島に残った。時が経ったが援助は来なかった。船を水面に浮べることが不可能であった。食料は欠乏したが、地震後海獣が居なくなり入手が不可能であった。

絶望の淵にありながらよく堪えて、シャバーリンは四隻の小舟で、一七八二年五月二八日カムチャツカへ出発した。その際、第一四島に一隻の小舟と一二のらっこ網を残し、もう一隻はカムチャツカのヤヴィーナ川に残した。彼らはらっこ六一頭、狐九七頭の他、若干のかわうそ、黒貂を持帰った。そのうち二頭のかわうそと、三頭の狐は国後のアイヌが贈ってくれたものであった。

レベデエフーラストチキンの千島南部四島（どの島という明示はない…訳者注）における探検は、一、五〇〇人のアイヌに貢租

を課し、ロシア国籍を約束させた。また千島南部の地理的解明、その住民についての新情報が若干得られたが、その任務は完全に遂行されなかった。レベデエフーラストチキンはこの探検で大損害を蒙り、その借金返済のため、アリエーシャン諸島において狩猟に従事することになった。自己の財産を費やして、南千島へ数隻の船を送ったことは、日本人と知り合う端緒となり、貿易のもとを開いたのであった。彼はその功により金メダルが贈られ、それには「社会のための有益な奉仕に対して、一七七九年四月一八日」とある。

ロシアの指導層は年来の北東太平洋への関心を捨てることはできなかった。特に彼らは千島南部諸島の農業および牧畜に関心を寄せた。アンテイーピンおよびシャバーリンらがウルップ島に蒔いた麦類は収穫をもたらした。また、この島の森林は造船基地としての可能性をも与えた。千島原住民を日本との貿易の仲介役として利用することが考えられた。こうして千島の開発は、増々膨脹しつつある北太平洋諸島の人口に対して、穀物の補給源として期待されるようになった（一七七八年（安永七年）六月ロシア船蝦夷地厚岸に来航して、松前藩に通商を求める。翌安永八年八月松前藩ロシア船の通商要求を拒否する。…日本史年表、歴史学研究会編、一九六六年、岩波）

「聖エカテリーナ」の航行 日本と貿易関係を樹立することは、極東の食料事情を緩和することになると期待された。東方隣国との貿易関係の調整には、当時国際情勢は幾分好転していた。西欧諸国はフランス共和国と戦争中で日本に対する彼らの関心は幾らか薄れていた。日本に代表を送る必要性は久しく認めるところであったが、ただ、それには何かのきっかけが待たれた訳である。丁度その時、一七八七年遭難した日本人グループがイルクーツクに送られて来た。有名な旅行者で、学士院会員であるカ・ゲ・ラクスマン (K. I. Jakmann) は、そのうちの一人、商人コウダユウ (Kodao) を自分の所へ招いた。彼はコサツク、イエ・トウゴルコフ (イルクーツク日本通訳学校講師) に伴なわれて現われた。フランス旅行者レッセンス (Lecsché) によれば、幸太夫は外見好感が持て、目は大きく、鼻は長めで、髭はしばしば剃り、背丈は約五フットあり、結構均整がとれている。髪は支那式に頭の中央に一束に纏めている、と書いている (レッセンス、二章、四頁)。

幸太夫の話によれば、一七八三年八月六日シンシヨウ丸は難破し、操舵が出来なくなり、数カ月漂流して、オホーツク海に運ばれた。遂にカムチャツカ島附近で彼らは岸に打上げられた。船は破片しか残らなかったという (オロシヤコクスイムダン、モスクワ、一九六一年、三六、三七頁)。

これに先だつ二年前に、同じ場所でロシア船二隻が遭難した。この二隻の破片で小さなボートを造り、それにロシア人および日本人 (一六人救助されたうち一七八五年までに九人が生残った) を乗せてニジネカムチャツクに帰り、日本人に着物を与え、医療を施したが更に三人が亡くなった。一七八八年日本人をオホーツクに送り、翌年イルクーツクへ送致した。

幸太夫はロシアの処遇に礼を述べ、自分の夢として、ロシアの首都を見たいと願ひ出た。彼は総てに興味を持ち、ラクスマンの家族の数、居住場所、子供のこと、ロシア人の食事、ペテルブルグの商業の状況、女帝は宮殿にどの位砲を持っているかなどについて質問した。また、ロシアは東方海域にどの位船を持っているか、イルクーツク、ヤクーツクの軍隊の数についても質問した。幸太夫は全部に満足のいく答えを得たわけではなかった。また、ラクスマンの質問に対して幸太夫は満足に答えられなかった。

この会合のあと、ラクスマンには一つの考えが浮んだ。それは、日本へ探検隊を送ること、同時にこの日本人達を故国へ送り届けることであった。自分の考えを彼はペテルブルグの科学アカデミーへ、日本の地図を付して書き送った。

ロシア政府は、イルクーツクの日本人をペテルブルグへ送ることと、ラクスマン自身が出頭することを命じた (三人の日本

人シンゾウ、コウイチ、イソキチはキャフタから出る幸便でペテルブルグへ行くことが許され、他の日本人はイルクーツクに残った。シヨウゾウ、シンゾウはキリスト教徒となり、フョードル・ステニバーノヴィチ・シートニコフおよびニコライ・ペトロヴィチ・コロトウイギンと名乗り永久にロシアに残ることとなった。ペテルブルグで幸太夫は数人の要人と会わされた。ラクスマンの計画はエカテリーナ二世によって許可された。一七九一年九月一三日付ピリに対する告示によれば、これから行われようとする日本人の故国還送は、日本との貿易を開く可能性を与え、ロシアは航路で日本とは最も近く、他国に比して有利である、とある。

探検はイルクーツク総督の名によって行われることになった。日本との貿易関係樹立に失敗しても、ロシアの国家としての權威を失墜することはない、との配慮からであった。

ピリはイルクーツク商人の中から、自身、または代理人を日本に送る希望者を募った。それにはよく選定された商品を持たせ、その売捌きによって日本の商品も買えるものを整えることであった。

二人の日本人は、将来の日本との貿易に必要な通訳要員の養成のため、イルクーツク日本語学校に先生として残すことにした。

一七九二年始め、ラクスマンおよび日本人はイルクーツクへ

帰った。間もなく、シヤバーリンというイルクーツクの豪商が日本に行くことを承諾した。探検隊の装備の一部は、同じくシエリホフが負担することになった。

カ・ラクスマンの小さなキャラバンは五月一九日イルクーツクを出発して、八月三日オホーツクに着いた。そこにはラクスマンの息子アダム・ラクスマン (Adam Jakcman) 中尉がいた。彼は探検隊長で、帆船エカテリーナの指揮官であった。隊の編成は総勢四〇名であった。

一七九二年九月一三日、エカテリーナは順風に乗ってオホーツクを出航、聖ヨアヌイ島に向けて進路をとる。カ・ラクスマンはこれに大きな期待をかけ、また、日本人との別れに際し、永い交際に情も移り、できるだけの土産を持たせた、とある。日本人は子供のように泣いて別れを惜んだ。

一〇月六日、エカテリーナは択捉島に達し、翌日蝦夷(松前、北海道)の北東に着いた。そこで六人の日本人に会い、贈物を交換した。幸太夫および彼の同僚は喜んだ。ア・ラクスマンは根室に向った。蝦夷ではアイヌがロシア人を歓迎した。ラクスマンおよびトウゴルコフは上陸した。しかし、日本人は特別の許可がないとして、会談を断わった。船に帰ったラクスマンは外交文書を認め、この湾に立寄らなければならなかった理由を書いた。

一〇月一二日日本人は蝦夷の知事に報告書を送り、ロシアから代表が来て、¹¹偉大なニフオン国、マツマイ県テンジンクボ陛下シマノ コシサム最高司令官¹²宛 (На имя "Великого Нифонского Государства. Его Тензин-Кубоссиго во лицества Матмайской губернии Главнокомандующему Шимано-Комисаму") に、ラクスマン名のメッセージが提出されたことを告げた。メッセージには、「人間愛に基づき、ロシア政府が自国民を危険と欠乏にさらしながらも、未知の国へ船を送ったのは、幸太夫およびその同胞を故国へ送るためのみであった。このような、わが陛下の思召により、わが閣下が我々を、偉大なる日本国、日本中央政府への代表として派遣したものである」と書かれてあった。このメッセージには更に、代表の来航を政府に伝達してもらいたいこと、まだ港湾に入らぬうちに天候、その他の条件により待避を必要とするときには、隣人として、如何なる障害もなく自由に入港できるよう取計ってもらいたいこと、その際、我々を、反抗したり、悪意を持つ敵と見做さないこと、などの請願書を添付した。

幸太夫の予想通り、湾内に越冬しなくてはならなくなった。その間、ロシア人は機会を捉えて小航海を実施し、この国の自然環境を調査した。後日、探検隊によって集められたコレクシヨンは科学アカデミーに提出された。

日本人は、ロシア人の一挙一動を監視した。そのうちに生鮮食料品が欠乏し、多くの壊血病患者が出た。一七九二年一〇月一七日隊員は官営住宅に移された。無償で黍、その他の食料が給付された。

遂に一二月一二日蝦夷から上級官吏スズキ クマゾウ、医師カトウ ケンゴ キオトシが来た。彼らは、ラクスマンの手紙は首都に送られたこと、根室に滞在してロシア人を護衛し、必要な援助を与える任務を受けたことを告げた。

スズキ クマゾウは乗組員の数、その姓名などを調べた。彼は本の間から折疊んだ世界地図を出して見せた。ラクスマンは、それは最も古い出版のもので、現在の状況に合わぬことを告げた。それは日本が外国と隔離されている結果からきた否定的な面で、外国の科学の進歩にうとく、ロシア人が北西太平洋を発見したことも知らなかったのである。そこで、ラクスマンは大きな地球儀と、新しい地図を日本人に見せた。スズキはこれに異状な関心を寄せた。

一二月二九日首都から高級官吏タナベ ヤスゾウ、タクサカ レンジロウの二人と、医師ゲンナンが来た。彼らは、ロシアの軍艦が来たとき、好奇心にかられて見に来た、といい、ロシアの地理的状況、工場状況、工芸品、日本までの距離などをきき、地図と地球儀に非常な興味を示した。

ラクスマンは、彼らが命令を受けて来たに間違いないと考え、ここで代表としての最終主要目的を果さなければと思つた。ラクスマンは、霞のような外交辞令のかたに真意を見る爛眼を持っていた。

鈴木は地図の複写を申しで、それを筆で実に上手に写した。彼のところには蝦夷の地図がもう一枚あり、それはカラプ（Kapau）という北西部の島が一緒に画いてあった。そのコピーを取らせてもらい、医師ケンゴが日本語で表題を付けてくれた。それは航海士ロヴツォフの許に航海の良き記念として残った。日がたつにつれて双方の接触が緊密になり、関心が高まった。

従来、日本人のロシヤ人に関する認識はオランダ人から得たものであるが、それは悪い民族との認識であつた。そのため、当初は恐怖をもって迎えられるが、幸太夫ほかを救って送り届けたことで、印象は急に好転した。

一七九三年二月一〇日ヤスゾウ、レンジロウおよび医師ゲナンが通訳トウゴルコフに耳打ちして、ロシヤ人は非常に残忍な民族であるから、若しロシヤ人の手に落ちれば可酷な取扱いを受ける、とオランダ人からきいていたので、ここへ来るときも内心怖かったと述懐したという。このような疑があつたので、ラクスマンの手紙に対する返事も遅れていたのである。そ

のため、現地の日本人達も、天皇もロシヤと友好関係を結ぶのを渋るのではないかとの予測であつた。更に彼らはつけ加えて、若し天皇がロシヤとの貿易関係の樹立を許可した場合、オランダ人には氣に入るまい。それは両国の品が同じで、その差はロシヤが近く、オランダが遠いということだけであるといつた。そして、彼らは、ロシヤ人の善意について書いた彼らの報告書が天皇の決定に好印象を与えるよう期待するといつた。

以上の如き記事は、大黒屋幸太夫の日記によって完全に裏付けされる。彼は、救助された最初の日のロシヤに対する印象、その気候、資源、ロシヤ人の風俗、習慣、文化、農工業等について書いているが、特にペテルブルグにおける接待について、歓喜の極みであつた様子を、ヨシノ（ECHO）教授は幸太夫の言葉として次の様に書いている。「私がペテルポール（ペテルブルグ）にいた時、毎日のように各所に招待され、ロシヤの貴顕、高官、著名な市民、外国の高官がご馳走してくれた。それは、自分が未だ曾って家で食べたことのないものであつた。貴顕、高官は私をしばしば宮殿に案内し、見物させてくれた。女帝も格式張られず私を招待され、私と話した。皇太子、王女も、日本人が珍らしいので、しばしば私を呼んでお話をした」（オロシヤコク スイムダン、モスクワ、一九六一年、一二、一三頁）。

ラクスマンは日本人に、ロシヤと貿易することは、オランダ

と貿易するより日本にとって得策であることを強調した。

デシマ(Dezima)のオランダ代表は日本政府に対して、ロシアの極東への勢力拡張は、日本の北方領土に恐威を与えるものであると、再三にわたって警告した(フラインベルグ、一九六〇年、五六頁)。しかし、政府の長タヌマ オキツグ(一七七二―一七八七年)は外国貿易の拡張に関心を示し、それによって財政困難を克服しようとした。多くの知識階級の武士はロシアとの貿易を支持したが、それと共に、沿海諸侯の密貿易を禁止し、ヨーロッパ商品および兵器のオランダ独占をやめるべきだとの意見を持っていた。

一七九三年三月二九日日本の官吏たちは急拠去った。幸太夫および同僚はロシアの船に残った。ロシア人は返事を待った。丁度一カ月後四月二十九日陸上に行列が認められ、二人の高級官僚が、一七九二年一〇月一二日付ロシア代表の書簡に対する返事を持って来たことを知らされた。彼らはラクスマン、ロヴツオフ、トゥゴルーコフを招き、書簡の返事を与えるといった。彼らはラクスマンおよび随員を大国の代表として迎えた。

門には槍を持った二人の兵士が立ち、中に招じ入れられた。茶および酒のもてなしがあつてから、江戸の官僚の指示により、松前の官吏の長が書面を出して読み始めた。それには、「あなたがたから松前知事に送られた昨年一二月(一〇月と思

われる：訳者注)一二日付書面は、審議にかけられるべく、わが首都に送られた。それに対し、天皇陛下は、この問題解決のため、今年一月四日五等官二名を松前に派遣することをお決めになり、二月六日到着した。三月一八日我々三人と松前の官吏四名は、あなた方に会い、ロシア側の長に陸路松前まで我々と一緒に来ることを宣言するため当港に派遣された。これで任務を遂行し、今あなた方に宣言した、というものであった(ベルヒ、一八八二年、三号、二五三、二五四頁)。

ロヴツオフは、船と乗員の安全を考え、船と乗員を残して陸路松前に行くことはできない、と申し立てた。ラクスマンも、船に残る決心をした。これについて歴史家ベルヒは鋭い批判を加え、「読者諸君も私と同じ考えで憤慨するであろう。若し、彼が断わらずに陸路根室から松前に行けば、この未知の国を、更によく知ることができたであろう」と述べている。しかし、ベルヒの意見に賛成してよいであろうか、主腦が松前に行った不在中に、指揮官の判断と決断に俟たなければならない事態が起る可能性なしとしかつたのである。

ロシア側が自己の主張を強調したため、会談は長引いたが、日本側が譲歩する結果になり、船は箱館へ行くことが許された。箱館では、外見ロシア人は丁重に遇されたが、隠された非友好的気分は随所に表れた。特に町への外出は禁じられ、漁撈

も禁じられた。日本人の説明によれば、海岸は区分されていて、各々許可区域があり、それ以外での漁撈、海草の採取は禁止されているとのことであった。

その後ロシヤ人は日本人の案内で、北海道で一番高いという山へ登った。そこには温泉があり、治療に役立っているとのことであった。

一時間後二人の官吏が来た。彼らは知事から派遣されたとい、ロシヤ人の無事の到着を祝し、身の必要事項を総て処理し、奉仕するため四六時中滞在する、とのことであった。

代表団のために特に建てられた家には、机、椅子、長椅子、寝台が置かれ、敷物なしの床が張られ、絵画、貝細工の文箱、硯箱、タバコ盆が用意され、庭には木が植えられ、庭石を配し、垣根は低かったがその上に白と青の五本縞の幕を張り廻らし、安静のためとのことであったが、高くて、外は何も見えなかった。

代表部の建物は、手に明^{あかり}を持った武装兵で警護されていた。一時間後ラクスマンは五等官のところへ招じ入れられた。彼らはラクスマンに裸足で入り、請願は横になるか、立膝でするよう指示した。ラクスマンは、それはできないと答え、第一に、日本人のように長くて広い着物でなら裸足でも、それは見えないうが、ロシヤ人はそのようなものを着ていない。ロシヤ人は一

定の、きちんとした外見を保つ必要がある。また、地面まで平伏したり、立膝など、そのように自分を卑下する習慣はないと主張した。五等官たちは、国の伝統と称して、自分達の主張の正しさを証明しようと努力した。結局日本側が譲歩した。七月一六日ラクスマンおよびロヴツォフは外出を許可された。二人の官吏が先導し、その後を代表、船長、それに数名の隊員が続いた。行列の後には四五〇人の日本人が続き、町の入口では、更に六〇〇人の日本人が加わった。

会談は九日に及んだ。日本人は時には善意を見せ、お世辞を言い、時には奸策を弄し、狡猾さを現わした。第一回には、ラクスマンに手紙を戻した。それは、日本語の訳が間違っているかの如き理由をつけてであった。トゥゴルニコフおよび日本人通訳は、その訳を完全なものにしたが、第二日の会談では、そのピリの手紙（イルクーツク総督の手紙：訳者注）を受取ることを拒否した。その理由は宛名が間違っているということであった。代表は、総督は日本人官吏の名を全部知ることにはできない。重要なのは、手紙の内容であると反論した。次の日、日本側は、松前では条約問題は解決できない。そのために船は長崎に行くことが許されているし、そこには外交関係専門の特別の官吏がいる、と申立てた。

七月二三日の会談は新しい段階に入った。この一連の会談に

において、ラクスマンは、オランダ人の敵意に満ちた活動があったにもかかわらず、大きな成果を獲ち取った。それは、日本人と貿易のため、ロシアは年一隻長崎へ船を送ることができる、というものであった。

日本側は、救助された日本人を届けてくれたことを謝し、ラクスマンは根室港におけるロシア船に対する日本人の援助、箱館港までの航行、そこから松前までの随伴、必需品の補給に対する礼を述べた。

翌日、テンジンクボ陛下のお許しで、代表団にライ麦六一俵、小麦二七袋、そば三袋、計九一俵、山羊の塩肉六樽、手動礮臼一台、篩二箇（一箇は銅線の網の張ったもの）が支給されたことをラクスマンに告げた。

三日後船は箱館に着き、そこでピリ宛の手紙をラクスマンは受取った。その内容は、日本にはロシアと心から友好関係を樹立したいと願う人々がいることを証明する、というものであった。

八月五日「エカテリーナ」は湾を後にしたが、風の調子が悪く五日停泊し、八月一日、二隻の日本船に付添われて外洋に出て、九月八日オホーツクに帰還した。

二〇日後ラクスマンは、陸路イルクーツクに向い、一七九四年一月二一日イルクーツクに着いた。イルクーツク総督に日本

国天皇の勅書、航海日誌、千島人および日本人の経済的、社会的組織等を記した書類、地図、見取図、訪問地点の調査資料等が提出された。こうして、日本への第一回代表団の任務は終わったのである（一七九二年（寛政四年、將軍家斉）九月、ロシア使節ラクスマンら、伊勢の漂流民大黒屋幸太夫を護送して根室に来航、通商を求め、一七九三年（寛政五年）六月目付石川忠房ら、ラクスマンと会い、漂流民護送を謝し、長崎入港の信牌を与える。九月家斉、漂流民幸太夫らを引見する。…日本史年表、歴史学研究会編、一九六六年、岩波）。

探検隊の成果とその意義 ラクスマンおよびロヴツォフ探検隊の主な成果は日本の政府と直接交渉を持ったことにある。それは日本との経済関係樹立の基礎を確立したもので、その意義は大きい。

日本政府が与えたロシア船の長崎入港許可に関する国書には、「大ロシア帝国の船は一隻に限り長崎に入港を許されるもので、他の場所への入港は許されない。キリスト教は我が国では我慢できないものであるから、訪問中は如何なる宗教的活動も許されない。将来如何なる条約が締結されようとも、総ての違反行為は同様に禁じられるものである。このことを遵守することを条件に、我々はこの確認書をアダム・ラクスマンに与えるものである」とある（ラクス、一八九〇年、二六五頁）。

探検隊の成果はエカテリーナ二世に報告され、女帝は一七九四年六月一三日ツァー村において、アダム・ラクスマンおよびワシーリー・ロヴツォフを引見し、八月一〇日探検隊参加者の論功行賞に関する告示が發布された。

科学調査の結果は兩人の手紙、報告書に書かれている。一七九四年二月二四日ラクスマンの報告によれば、彼は五九種の軟体動物、蟹、蝦、なまこの標本、六五種の植物の標本、六五枚の植虫、蠅類の標本を持帰った（これはペテルブルグ科学アカデミーに提出された）。また日本には極めて多種の樹木、野いちごがあることを詳細に書いている。彼の北海道に関する地理的描写も価値あるものではあるが、探検隊は行動の自由を制限されていたため、小舟による調査は不可能で、海岸線の調査が不十分であったのは、やむを得ないものであった。

ロヴツォフも同様に、細かい植物観察をしている。また、彼の一七九四年一月一八日の報告によれば、北海道は平地が多く、農業に適しているが、日本人は少なく、農地は町の附近にほんの僅かにあるのみで、日本人は一般にそれに従事していない。またアイヌも農業に従事せず、穀物は日本人と同様、日本から補給を受けている。北海道には約七〇〇〇人のアイヌが居住していた。彼らは、自分達を奴隷のように使う日本人に一再ならず敵対行動をとった。特に一七八八年にはチュルイ（Чулы）

（Чулы）港に停泊中の船に襲いかかり、日本人七五人を殺害したことがある。彼らは日本人のもとで、運搬等の重労働に服していた。日本人に対する不満は大きく、こっそりロシア人に話していた。以上がロヴツォフの報告である。

探検隊に対して各方面から高い評価が送られた。これによって、アリューシャン列島および千島から、日本人に必要な魚を非常に安い値で積み、日本からはカムチャツカに必要な品を仕入れることが可能になった。

一七九五年には、もう、イルクーツクの商人らは、ラクスマンを通じて、日本への航行を請願した。その時も、アンドレヤーノフ諸島で、米を積んだ日本船が遭難し、一五人の日本人が一七九六年三月一六日オホーツクに送られて来たが、これを護送して行けば、交渉がし易いと考えられ、準備が進められた。しかし、これは実現しなかった。当時、ヨーロッパはフランス革命により不穏な状況にあったこと、また、シェリホフ、ゴリコフ商会が北方水域における狩猟の権利を一手に収め、日本を含めた新しい航海を計画していたこと、また日本との貿易に積極的な姿勢を見せていたエカテリーナ二世の死去などの原因が重なったものと思われる。

いずれにしても、ラクスマンの探検は、日本と交友関係を樹

立しようとするロシアの努力を証明するものである。アメリカの歴史家レンゼンによれば、日本政府の希望に反して日露の最初の関係はロシアのイニツィアティブによって始まったもので、ロシア政府の代表は悪条件の中で活動しなければならなかったが、日本とロシアの科学的関係樹立の歴史に肯定的な役割を果たしたものである、と評している(Lenzen一九五四年、六頁)。

六 シェリホフと北西アメリカの開発

太平洋における地理的探検史における新しい頁を開いたのは、ロシア・アメリカ商会の活動で、この中で決定的役割を果たしたのはゲ・イ・シェリホフ(Г.И.Шелихов)であった。

グリゴリー・イワーノヴィチ・シェリホフは一七四七年、クルスク県ルイリスの商人の家に生れ、幼時からシベリヤに興味を持ち、若いうちに商用で数回極東に來た。両親の死後、一七七五年オホーツクに移住し、ロシア人の発見した島嶼への航行を企図した。一七八一年彼はアリューシャンに三隻の船を派遣し、ウナシャルカ島北方に二島を発見した。島はオットセイの棲息地として他に例を見ないものであった。

一七八三年シェリホフおよびゴリコフ兄弟の北東アメリカ商会は三隻の船を建造し、一七八三年八月一六日シェリホフ自ら妻と三人の子供を連れて出発、困難なベーリング島での越冬を

経験し、一七八四年春出航、ウナシャルカ島を通ってカジャク島に着く。ここは既に定住部落ができており、アメリカにおけるロシアの植民地の始まりであった。翌春、アラスカとの間の探検のため人を派遣する。カジャク島には銅、雲母、水晶および建築資材が発見され、オカ、ヴォルガ川流域の出身者も来て部落は大きくなり、新しい世界ができた。島の木も伸び造船に使えるようになった。ケナイ海峡は詳細に調査され、アフオグナク島には要塞が築かれた。

一七八六年春彼はカジャク島を後にした。教育のため彼は原住民の子弟若干名を引き連れた。彼は、喜んでロシア人になるという二五名程の若者を得たという。イルクーツクで彼らは意外な能力を発揮したという。読み書き、歌、算数等を教え、原住民出身専門家の養成に力を入れた。

アメリカから帰ったシェリホフはアラスカおよびそれに続く島の開発に一層の関心を示した。彼らの仕事に総督ピリは支持を与えた。それは彼らが、何時も自分の仕事と同時に、国家的探検に従事し、報告を怠らずにいたからである。商会はカジャク島から北緯五七―五九度に至るアラスカ沿岸および島嶼を調査した。

商会の船舶は千島、日本、カリフォルニアにまで商業を拡大する可能性ありと評し、ピリは「この土地はロシアの土地であ

る」と書いた紋章と鉄板を、アメリカ沿岸自体にまでも立てるべきであると、提案している。事実、その頃その海域には盛んにイギリス船が出没し、現地では非常に心配していた。そのため現地では兵力の増強と、航海術に長けた人間の増援を頼んできた。ピリは、とりあえず現地人を教育して補充要員とするよう指示し、また攻撃に備えて、要塞の構築を指示した。また千島列島、特にウルツプ島の農業、牧畜に重点をおくよう指示している。

イルーツク総督ピリの指示に基づき一七九四年八月九日シェリホフは北西アメリカ商会の責任者バラノフに手紙を送り、アラスカ、アリューシャン、千島の開発につき詳細な指示を与えた。特に陣地の構築、造船所の建築、農業、牧畜の具体案を示し、種子を送り、更にバラノフに補佐を一人送っている。多数は力なりとの観点から雑婚を考え、よい原住民の娘を得るため色々の物資を送っている。

更に、彼は、北アメリカ商会を設立し、商人メルクーリエフを長に命じ、将来これらが一体となって、開発に機能させようと計画した。北アメリカ商会の基地はパーヴェルおよびゲオルギー島で、そこへ物資および七〇人の人員を送り込んだ。

シェリホフの妻ナターリヤ・アレクセエヴナ・シェリホワも、夫と苦勞を共にした活動的女性で、その手紙には多くの貴重な

資料が含まれ、現地におけるロシア人の建設と狩猟の記録である。彼女の手紙によれば、シェリホフは千島の第十八島にアリューシャンと同じく移住村落を作り、スラヴォロシヤと命名したとある。また、チュクチ、アラスカを含めたアリューシャン列島の開発に二〇〇人からなる商会を作り、ウナシャルカ島にその根拠地を置いた、と報じている。

一七九五年一月二日イギリス人ヴァンクーヴァーがケナイおよびチュガチ湾のロシアの水域（北緯五六度、東経二五〇度）に來た時の模様を彼女は次のように報じている。イギリス人が、ロシア人は何時からここへ來ているかと問うたので、一七四一年からと答えた。イギリス人は更に、クックがここに來たのが最初であり、ここはイギリスの土地だと主張した。それに対して彼女は、ベーリングやクレニーツィンが先で、クック自身の記録と地図にその記録があると反論した。最後に彼女は、若し早急に手段を構じなければ、航海に長け、商売の上手なイギリス人は、すでにノットカに基地を持っており、ロシアが遅れをとることは必定と、警告している。

先見の明のあったシェリホフは、この地の開発には立派な地図が必要であるとして、海軍出身者を多く雇い入れ、チュガチ湾、プリストル海から北部アラスカ、更にアラスカから南下し

てアメリカ沿岸までも調査させた。

一七九六年シェリホフの資料により、海洋地図が作成されたが、それにははっきりした梯子があり、アリューシャンおよび千島の現在判明している島の殆んどが含まれている。

シェリホフの言う通り、確固たる住民地の形成のみが、これから開発地域を外国勢から守り、かつ確保する唯一の手段であった。

一八世紀終りから一九世紀初めにかけて、北部アメリカへのロシア人移住者が目立って多くなり、シットカ（現在のバラーノフ島）にロシアの行政機関の中心、ノヴォアルハンゲリ斯克まで設けられるようになった。その後、そこを基点として、カリフォルニア、ハワイ、フィリピン、日本、支那へ行くことになった。かくして探検の規模は拡大され、それらを利用して、一九世紀前半には四〇以上の世界一周、または遠洋航海が実現した。

しかし、シェリホフの活躍は当時の困難な状況下におかれ、イギリス、スペイン、アメリカ等の勢力がこの地域に伸びてきた時で、むこうが武装させた原住民の攻撃を受けたこともあった。反面、企業家たちの行為が原住民の不満を買うこともあり、それらは総て商会の幹部シェリホフ、バラーノフ等に降りかかってきたのである。彼らはこれだけの偉業を成し遂げた

が、やはり商人である限り、利益の追求が目的で、その意識には、当時の財界の利益を代表していたことはいうまでもなく、時として、その悪が表面化することを根絶することはできなかった。

あとがき

一八世紀におけるアメリカ、日本沿岸に対するロシアの海洋探検は複雑な国際情勢の中で行われた。植民地をめぐる英仏戦争は続き、西欧諸国が北太平洋へその勢力の拡張を企図している時であった。

ロシア政府の極東領域に対する心配は十分根拠のあるもので、当時の西欧諸国の植民地政策の現状からすれば、対象物が遠隔にあるということは、何等の障害ともならなくなっていた。特に英国のアラスカ、アリューシャンへの関心は高かった。

英国は北太平洋における自己の地位を確保するため、ロシアの探検成果を無視し、故意にそれが、英国の功績であるかのように西欧諸国に思い込ませようとした。その代表的な人物はヴェ・ロベルトソンで、ベーリング、チリコフ、その他のロシア人の北太平洋における北西アメリカの発見および開発を歪曲している。このロベルトソンに対して決定的な反撃を与えたのは「北

東海域におけるロシア人の航海および発見の歴史年表」(約一七九〇年)で、それには一八世紀の北太平洋におけるロシア人の地理学的発見の優越性を実証的に展開している。かくして、この記録の著者(不明)は西欧人の間違った見解を根底から覆えている。

一九世紀前半のロシア人による幾多の世界一周航行は、当時の、イギリス人に非ざれば航海者に非ず、とする西洋人の迷信を見事に打ち砕いたものである。世界一周航海の主唱者であるエヌ・ペ・ルミャンツェフは一八一八年ヴェ・エム・ゴロヴニン(海軍中将で二度の世界一周航海をなし遂げた人物、一八一二年国後島で日本に捕えられ、二六カ月抑留される…訳者注)に「航海において彼ら(イギリス人)は他国民の兄貴分であるが、多くの家庭で見られるように、弟が兄を凌いで能力を発揮することもある」と書いている。

ロシアの世界一周航海の多くは、国際政治情勢の好転下に行われた。一八一二年のナポレオンの敗退(モスクワに攻め入り、クトゥーゾフ指揮下のロシア軍に敗れた…識者注)によってロシアの権威は高まり、ロシア人の行く所、特にラテンアメリカにおいては、大歓迎を受けている。

一八、一九世紀のロシア人航海の歴史は、その航海の大部分および重要な発見の大部分が、大戦争の中間に行われたことを示

している。航海は国家および海軍の主脳によって指導され、航海を重ねる度に、人命尊重の立場から、常に新しい兵員の教育、訓練の原則が導入され、また地理学的探検の枠を超えて、水路学、海洋学の知識を必要とし、幹部のこの面の教育も重要になった。同時に常に新しい科学を導入して航海術、造船技術も長足の進歩を遂げた。

当時の国際法規によれば、ある国によって発見された土地が、その国の領有とされるのは、その土地の安全を確保する能力があるか、または、その土地が経済的に開発されているか、何れかの場合に限られていた。ロシアは当然この線に沿って、効果的な手段を構ずる必要があった。

無限の富を持つこれら北部太平洋の経済開発には、全部門に亘る研究が必要で、それはロシアの若い世代に委ねられることになった。

この探検の基地となったのは、一七四一年にベーリングおよびチリコフによって開かれたベトロパヴロフスク・カムチャツツキーであり、また、ロシアの極東国境の保持に、大きな役割を果たしたオホーツクである。ペ港は一八、一九世紀中の北西部アメリカ、千島列島、アリューシャン列島、その他の地区への多くの探検隊の編成地であった。

一八世紀におけるロシア人の探検は、一九世紀のより広汎な

探検の大きな基礎となり、後世はここから大きな教訓を汲み取っている。

一八世紀における極東、北部太平洋諸島は農業、牧畜、鉱業、造船、漁撈、狩猟の各分野で一大転換期を迎え、それを遂げたのである。

極東の地はロシヤ人の汗と血によって発見され、開発されたのである。

終り

著者が引用した参考文献

国立中央文書局、国立海軍中央文書局、ロシヤ外交文書局、国立歴史中央文書局（レニングラード）、海軍中央文書局、ソ

ビエト科学アカデミー文書局、ソビエト地理学会文書局、レーニン名称ソビエト国立図書館手書き文書課、サルトウイコフ・シチエードリン名称国立公衆図書館文書課の各記録および資料。
特に、探検隊参加者の航海日誌、手紙、報告書、請願書、学者および政府要人、海軍将校および商人の計画書、その他説明書、地図資料、外国貿易およびシベリヤ、極東の農業に関する統計資料など、多数の原本および集計資料。

注 文中に多数の注があるが、それは著者の記述を裏付けるための引用文で、内容の上二重であり、今回は抄訳のため著者の記述の方を採用し、引用文を割愛した部分が多いので、ここに一括して使用文献を記した。―訳者―

附録 1 度量衡換算表

長さ

ロシヤマイル

七ヴェルスタ

七四六八米

海洋のマイル（海里）

一八五三米

地理のマイル（ニーデルランドの尺度）

（二五分の一度）

七四〇七米

オランダマイル

（二〇分の一度）

五五五六米

ヴェルスタ（古いロシヤの長さ）

五〇〇サージエン

一〇六七米

サージエン（古いロシヤの長さ）

三アルシンまたは七フート（フイート）

二・一三四米

フート(フィート)

一二ジユイム(インチ)

三〇・四八糎

デュイム(インチ)(二二分の一フート)

二・五四糎

海洋のサージェン(六フートサージェン)

約一・八三米、単に水深の測定に使用

七フートサージェン

二・一四米。海事で水平面における距離の測定に用い、海の測量、海洋地図の作成に使用する

目方

ロシヤフント

四〇九・五瓦

ゾロトニク(古いロシヤの目方)

九六分の一フント

四・二七瓦

容量

チェツヴェリク(古いロシヤの容量で粒子のものをはかるに用いる)

二六・五立

2 日露関係年表(一七三九年～一八七五年)

(日本史年表、歴史学研究会編、一九六六年、岩波から抜萃)

一七三九年(元文四年)(吉宗) 五月、シパンベルグ指揮のロシヤ探検船陸奥、安房、伊豆の沿海に出没。七月幕府海防を厳しくする。

一七五四年(宝歴四年)(家重) 十一月、千島クナシリ「場所」開かれる。

一七七四年(安永三年)(家治) 八月、飛騨屋久兵衛、江柄、厚岸、根室、クナシリ「場所」を請負う。

一七七八年(安永七年)(家治) 六月、ロシヤ船蝦夷地厚岸に来航、松前藩に通商を求める。

一七七九年(安永八年)(家治) 八月、松前藩ロシヤ船の通商要求を拒否する。

一七八三年(天明三年)(家治) 伊勢白子の船頭幸太夫らカムチャツカに漂流。

一七八六年（天明六年）（家治） 最上徳内ら千島を探検し、ウルップに至る。

一七八九年（寛政元年）（家斉） 五月、クナシリ島のアイヌ反乱を起す。松前藩これを鎮圧する。

一七九二年（寛政四年）（家斉） 九月、ロシア使節ラクスマンら、伊勢の漂流民大黒屋幸太夫を護送して根室に来航、通商を求める。

一七九三年（寛政五年）（家斉） 六月、目付石川忠房ら、ラクスマンと会い、漂流民護送を謝し、長崎入港の信牌を与える。 九月

家斉、漂流民幸太夫らを引見する。

一七九七年（寛政九年）（家斉） 十一月、ロシア人エトロフ島に上陸する。

一七九八年（寛政十年）（家斉） 近藤守重、エトロフ島に大日本恵土呂府の標柱を建てる。

一七九九年（寛政二年）（家斉） 高田屋嘉兵衛エトロフ航路を開く。

一八〇一年（享和元年）（家斉） 富山元十郎らウルップ島に至り「天長地久大日本属島」の標柱を建てる。

一八〇二年（享和二年）（家斉） 近藤守重ら幕命によりエトロフ島を視察する。

一八〇四年（文化元年）（家斉） 九月、ロシア使節レザノフ長崎に漂流民を護送、貿易を求める。

一八〇五年（文化二年）（家斉） 三月、レザノフの通商要求を拒否し、長崎奉行に漂流民を受取らせ、以後漂流民の送還はオランダ人を仲介とすることを伝える。

ダ人を仲介とすることを伝える。

一八〇六年（文化三年）（家斉） 一月、幕府ロシア船来着の際の取扱処置を諸大名に指令する。 九月ロシア船樺太に来たり、オ

フィットマリに上陸、クシエンコタンの松前藩会所を襲い、番人を連れ去る。

一八〇七年（文化四年）（家斉） 四月、樺太およびエトロフ島にロシア船来航、箱館奉行、津軽、南部藩兵に宗谷を防衛させる。

五月、ロシア人利尻島に侵入、幕府の船を焼く。 六月、幕府、若年寄堀田正敦らを蝦夷地防衛

総督として派遣、奥羽諸藩兵を北辺守備に配置。 八月、神谷勘右衛門らクナシリ島を、近藤守

重ら利尻島などを巡視。

一八〇八年（文化五年）（家斉） 一月、幕府、仙台、会津二藩に東西蝦夷地を守備させる。 四月、松田伝十郎、間宮林蔵ら樺太

探検に赴く。樺太が島であることを発見。 七月、間宮林蔵再度樺太探検に赴く。この年、間宮

林蔵の「東韃紀行」で見る。(ロシアのネベリツコイが初めてこの海峡を発見したのは一八四八と五五年の探検：訳者注)

一八〇九年(文化六年)(家斉) 六月、幕府、樺太を北蝦夷と改称。 七月、間宮林蔵、北蝦夷を出発、東韃靼を探検、デトン府に至り帰国する。

一八一一年(文化八年)(家斉) 六月、松前奉行支配調役奈佐政辰、ロシア艦長ゴロヴニンをクナシリで捕える。
一八一二年(文化九年)(家斉) 八月、ロシア船長リコルド、高田屋嘉兵衛をクナシリ海上に捕える。

一八一三年(文化十年)(家斉) 五月、リコルド、クナシリに來り、高田屋嘉兵衛を介してゴロヴニン釈放の交渉を開始。 九月、ゴロヴニンらをリコルドに引渡す。

一八三六年(天保七年)(家斉) 七月、ロシア船エトロフ島に漂流民を護送する。
一八五二年(嘉永五年)(家慶) 六月二四日、ロシア軍艦下田に來航、漂流民を置いて去る。

一八五三年(嘉永六年)(家定) 七月一八日、ロシア使節極東艦隊司令長官プチャーチン軍艦四隻で長崎に來航。 一二月五日、プチャーチン長崎に再來し、国境・通商に関し幕使と協議。

一八五四年(嘉永七年)(家定) 三月二三日、プチャーチン長崎に來航、二八日樺太国境および通商に関する覚書を渡す。 五月一八日、樺太駐屯のロシア兵退去。 一二月四日、諸国大地震、下田に津波が襲いプチャーチンの乗艦ディアナ号大破沈没。 一二月二一日、幕府下田で日露和親条約に調印、下田・箱館・長

崎を開港、エトロフ・ウルップ間を国境とし、樺太を両国雜居地と定める。

一八五五年(安政二年)(家定) 五月二〇日、幕府、松前藩に命じ、樺太のクシユンコタンのロシア兵の陣營を焼く。 プチャーチン乗艦の残留者、下田入港のドイツ船で帰国。

一八五六年(安政三年)(家定) 一〇月一一日、ロシア使節ポシェット下田に來航する。
一八五七年(安政四年)(家定) 九月七日、プチャーチンと追加条約に調印。

一八六一年(文久元年)(家茂) 二月三日、ロシア軍艦ボサドニツク、対馬占領を企図、四月一二日島民と衝突。 七月二三日、

英艦対馬に赴き、露艦の退去を要求、八月一五日露艦退去。

一八六二年（文久二年）（家茂） 八月一九日、竹内保徳ら、開市開港延期・樺太分界等をロシヤと調印。

一八六七年（慶応三年）（慶喜） 二月二五日、遣露使節小出秀実ら樺太仮規則五カ条に調印（雑居条約）。 二月二八日、幕府、ロシヤと改税約書に調印。

一八七一年（明治四年） 五月一三日、副島種臣をロシヤに派遣、樺太境界を協議。

一八七五年（明治八年） 五月七日、ロシヤと千島樺太交換条約調印。